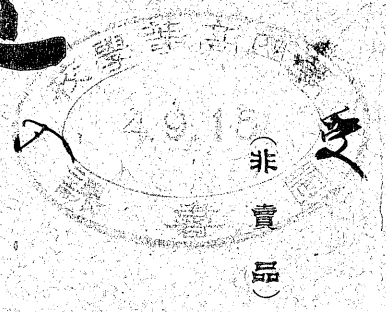


北辰會 雜誌

明治二十九年六月二十日發行

第四高等學校北辰會

第拾壹號



北辰會雜誌第拾壹號目次

論說

大化の革新に就て 曾我部 俊雄
時習寮(承前) 河原 始二

史傳

國學復興者としての契沖阿闍梨(元)

埋木の翁

雜錄

能登島の地圖に就きて 漁翁
貞婦を訪ふ記并三度櫻記 高橋 富兄
富士川舟 白榆 太瑯
蓮湖周航の記 不眠 坊泉
松原神社に詣て、 湘浦庵 殘雪
籠庵記 舊 庸 生
夏を迎ふ
歌十數首
軒の東 淡翠 迂人

文苑

琵琶の曲 小武 橫行
俳句十數句

送鷺津文豹赴任岩手縣序 村上 函峯

雜祭說 浦井 蓉湖

謝人惠新茶牘 全

蝸牛子傳 高橋 亨

北陸名勝誌序 能 東 仙 史

論王申亂 能 戴 子

詩十數首

浦の宮屋 隆 準 子

本誌第十號を讀む

雜報 露 子

附錄

青帝駕を回らす、紀念式、小松宮殿下御臨校、柔道

紅白勝負他二十餘件

第一回大競漕會記事

南越地方行軍記事

行軍餘談

北辰會雜誌第拾壹號

論說

大化の革新に就て

曾我部 俊雄

決潰漂蕩、洪波の治むへからざる九年、廣漠なる、虞舜の治域は、將さに一望無限の海洋たらむとす。此時に當り、身を献し、思を凝らし、溝を鑿ち、渠を通し、蠢々たる蒼生をして、再ひ、天日を拜するに至らしめたる、禹王の効績も、痿蹙振はず、精神界の腐蝕は、漸やく將さに骨肉に浸徹せむとするに當り、斷々乎として、新敎の唱導者となり、長く自由の盟主と誇る、「マルテ・インル・テル」の盛名も、よし其政策の、頗る變則なりしにもせよ、鐵と血とを以て、普國の偉業を策立せし、「ビスマルク」の宏業も、所詮英雄の常行として、雲烟過眼に付し去るへきか、抑亦た所謂幸運の寵兒と輕評し去るへきか。吾人各國の革命史を繙くごとに、未だ曾て國家革新に要する、一大原素を發見せざんはあらず、一は則ち革新の唱導者にして、他は則ち機運是なり。革新の唱導者は巨人ならざるへからず、否な少なくとも巨人なることを要す。機運は、巨人に依りて發見せられ、巨人に依りて利用せらる。蓋し機運の發するや、其間髪を容れず、而かも其由来淵源の久しき、恰かも彼の街頭の電燈の如けんとす、電燈の燃えんとするや、一瞬間發、明暗の間倏忽として別かる、但其針線に由り、機關に由り、更に物理學的發電作用の理に由るに至り

ては、其根底するところ深且長と云ふべし。機運の成熟に至るや、それ此くの如く長し、故に利巧の儕輩、時に或は之を發見せざるにあらず、唯彼等は之を發見するのみ、而して利用すること能はず、何となれば、彼等は所謂巨人にあらざればなり。

夫れ巨人は、人爲にして成る者にあらず、故に機運の巨人を待つ久しきあり、機運亦た人爲にして成る者にあらず、故に巨人の機運に遇はずして斃るゝ者あり。巨人なきの機運は、多くは醉生夢死の間に葬むらる、然らずんば、所謂利巧の徒輩に玩弄せらるゝなり。彼等は徒らに機運を弄して、恣まに虚譽に飽かんとす。彼等は有心なり。彼等の胸臆は利己心を以て充たさる。所以に彼等か残せる歴史は、失敗にあらずんば、僥倖の空名なるのみ。之に反して、巨人は虚心なり、平氣なり、彼等は天然と語り、天然を行ふ、而して自から、其一言一行を苟且にせざると同時に、博く他人を切愛して、正義の前には、身命を鴻毛よりも軽んず。故に彼等の機運に遇ふや、之を利用して決して失敗せず、偶々失敗するあるも、其言行や、俯仰天地に愧ぢざるなり。機運なきの巨人は、往々隴畝にありて、空しく硬骨を、無名の碑石に投ず、然らずんば、彼等は自から之を作らむとするなり、然れども天は自然に厚くして、人爲に疎し、此を以てか「コルシカ」の健兒は、自家製作の機運に仆れ、猿面冠者亦た之に依りて躓きぬ。

要するに機運來り、巨人出て、茲に始めて、完全無缺の革新を見るを得るなり。夫れ然り、若し此の推論にして、大過なからむか、吾人をして同一の觀察を、紀元千三百五年已來、我が國史上に發現せし、革新の上に及ぼさしめよ。紀元千三百五年、是れ果して如何なる期限なるか、平和的革新の最初の曙光を煥發し、國史の上に、一大光彩を陸離たらしめたる、大化の一新は、實に此の記慮すべき年代に行はれたり。嗚呼如何なる機運か、能く這般の革新を遂行せしめたる。請ふ少しく詮索する所あらしめよ。

神武帝已來、物質的、精神的の革命、一再にして足らず、而かも多くは外國交通の爲に得たる新現象ならずんばあらず。神功皇后の、三韓を征服せらるゝや、爾來、外交の道漸やく開け、醫藥、鍛冶の道より、織物、釀酒の法に至るまで、陸續として輸入せられ、各種の技藝賑々として進み、加ふるに、列聖治績に厲精したまひしかば、物質的の進歩は、頓に其面目を一新し、民衆生活の度亦た從ひて發達せり。然りと雖、無爲而化てふ、太古質樸の風俗は、物用の充備と共に、漸やく浮動を始め、足衣食而知禮節てふ格言は、却りて或は反對の徵を呈し、物質的文明は、精神的文明に反比例せむとす。慶阪忍熊二皇子の應神帝に反して立たむとしたる如き。允恭帝の太子、輕皇子の同母妹と姦したるか如き。安康帝の叔父大草香皇子を殺して其妃を容れたる如き。清寧帝の皇弟、神器を窺竄して殺されたるか如き。太古に於て聞くべからざる不倫の聲は、日と共に漸やく高し。(吾人は此等の例を皇室に取るの頗る穩當ならざるを知る、然かれども想ふ國史は皇室の歴史にして、當時の風俗を探らむとせば、之を皇室の史に徵し、以て事實を事實とし、革新の眞因を探究せざるべからざるは實に止むを得ざる事實なり)皇室既に此くの如し、况んや民衆をや。此時に當り精神界の革命を行なふに足る、二大利器は輸入されたり、前に漢學の渡來、後に佛教の傳來せしこと是なり。蓋し漢學の渡來するや、其精神綱領の、甚だ我が國俗に背戻するところ

なかりしかは、上下之を傳へて益する所多く、多年ならずして、其感化力は、注目すべき勢力となり、或は稚郎子、大鷲鷯二皇子の美蹟となり、顯宗仁賢二帝の仁政となり、上下翕然として、漸やく文明の域に進まんとす。然れども當時一般の思想に至りては、猶ほ未だ幼稚なるを免かれざりし。詳言すれば、民衆の腦髓は、單純なりしなり、彼等は人世の觀念を所有せざりき、彼等の僅少なる開化的部分すら、唯仁義五常の道を法文的に守らんとするに過ぎざりしか如し。

人生の問題すら、未だ討尋し難き、况んや世界てふ觀念すら之れなき、當時に於きて、三世を説き、十界を説き、因果の理法を説き、進みて三千大千世界を説く、佛教は、天の一方より來れり。彼等は昌黎の如く、異端邪説と、罵倒すること能はず、又た進みて研鑽吟味せんとせず、獨り茫然として、餘りに其議論の廣漠なるに驚けるのみ。果して佛教の能く國躰に適するや否や、人民の福祉を増進せしむるに足るや否やは、彼等の腦髓、猶ほ決して論理するを容るざりし所なり。

馬子の佛教を崇信せしは、耕耘論理の後にあらず、守屋、勝海の之を排斥せしも、亦た深意研究の後にあらず、彼等は唯單に之を信じ、唯單に之を斥けたり。請ふ一例を彼等が殘せる歴史に徴せむか、欽明帝の時、偶々天下疫癘流行せりしかば守屋勝海等奏して、佛法流布の咎なりとし、法を禁し、佛像を燒き、馬子の尊信せる佛像に鞭撻を加へたるか如き、是れ豈に正々堂々其教理を明解して、全然國躰に違反せるを信する真正排佛論者の行爲と云ふべけむや。之に對して、馬子は大聲號泣せりきと、嗚呼、彼か涙は果して真理の爲めに流れしか、抑亦た國家百年の大計に向ひて注きしか、此時に當り、惡疫は日に益々猖獗を極め、竟に龍躰を襲ふの甚しきに至る、馬子則ち攘災の祈願を三寶に爲さんと請ふや、勝海堅く之を拒みしかは、馬子一僧を宮中に入れ、遂に勝海を殺さしめたるにあらずや、嗚呼是れ豈に真理を解せる、真正信佛者の行爲と認むべけんや。而かも馬子の非行は、實に這般の事實に止まらざるなり、そは後に詳悉ならん。要するに、彼等は感情を以て論争し、權力の競争を佛教の上に應用しき、而して到頭一定の決論を與ふる能はざりしなり。此の冥矇暗黒の間に、獨り一道の真理を感得し、安心立命の基礎を築けるは、上古の巨人廐戸皇子其人。

皇子の佛教を見るや、極めて切實にして、深く其教理を咀嚼し、徧ねく我が國躰に鑑み、一旦結論を得るや、斷信して謂へらく佛教甚た國家に可なりと。想ふ卓拔靈活なる、皇子の眼光は、夙に漸やく墮落せむとする精神界の非運に映じ、國家百年の長計に向ひては、宗教の須要なるを識得されしや明らかなり。蓋し當時の佛教は、未だ日本化せられず、且つ其真相を發揮する者なかりしなり。獨り太子は之を明解し、之を日本化せむとし、苟くも正義公道に反すと信する者は、之に處するに嚴罰を以てして、一步も假借するところなく、一方に於きて破邪の利劍を揮ふと同時に、他方に於きては顯正に熱心し、之を一身に施こしては萬世の師表となり、之を政治に施こしては、冠位十二階の制となり、或は十七憲法の制定となり、以て大に皇室の化育を助け、至竟佛教をして彼の神道と共に我が國教となさむとせり。要するに舶載し來れる、儒佛二教の人心を改悛せむと試みたるや明白なりと雖、其感化の及ぶ所は單に社會の一隅に止まりて、倫常は日に益々紊亂

せむとするは、又た如何ともなし難き趨勢なるか。武烈帝の即位に當りて、平群眞鳥、篡立を計り大連大伴金村に誅せられしを始めとして、國民最惡の不倫、而かも古往今來其例を絶てる弑逆の大罪は、蘇我の馬子に依りて行なはれたり。吾人は此に至りて、殆んど天日を見ざるの感なくんばならず。當時文に武に勇武聖明非凡なる聖德皇太子にして、這般の逆臣と事を共にし、穴穗部及び守屋を誅したまひしは抑何等の怪事ぞや。吾人は守屋を誅し玉ひし一箭の、更に馬子の胸腔を穿貫せざりしを惜まざるを得ず。然れども予を以て當時の事情を臆測するに、太子の蘇我氏を罰せずして、後の太子を評する者をして、否な寧ろ佛教を嫉視するの徒をして、感情的の誹議を逞しくせしむる者は、太子の濟世救民に熱心にして之を殲除するの暇を有せざりしに由るべしと雖、抑亦た當時尙ほ壯年の一皇子として、權威に誇る蘇我氏を誅せむとせば、勢ひ政道翼賛宗教宣布の大目的を達する能はざりしに由らざんばならず。唯吾人は太子にして此くの如き逆臣と事を共にせざるべからざりし、當時の大勢に向ひて、寧ろ萬斛の恨涙を灑かんとするなり。

太子崩じて蘇我の一族愈々專横を加へ、其競争者として長く權力を抑制したる、物部、中臣等相繼ぎて亡び、馬子の嗣蝦夷に至りては、曾て其子入鹿の、人をして山背大兄王を膽駒山に擧たしめたるを聞き、入鹿の狂暴を誂めて喙狻兒暴戻を逞しくせば其身危ふきにあらざやと爲せしにも似ず、自己の僭虐に至りては、更らに父に劣らず、入鹿に至りては最も僭逆暴戻を極む。蓋し人倫の腐敗は、蘇我一族之代表者にして、同時に一族に至りて、最高點に達したるなり。於此乎、庶民上を怨望し、佛法亦た益々迷信せられ、其弊や多く人心の根底に浸潤し、勤儉の風は漸やく

化して淫靡に流れむとし、堂塔の建設多きに過ぎて、國民漸やく財用に乏しく、國運日に非にして、早晚破裂の期至らむとす。蓋し聰明睿智聖德太子の如き、革新の唱導者として餘ある巨人にして、猶ほ且つ充分の革新を行ふ能はず、佛も能はず、儒も能はざりしは、職として猶ほ自然の彼等に與みせざりしに由らざんばならず。此時に當り遣隋遣唐等、及び之に隨伴して隋唐に赴むきし、外國留學生は、外に全盛の文學技術を觀察し、或は苦學慘憺、切磋攷究の後、歸りて民人の楚痛を目撃し、大臣專横の實狀を視察し、憤慨淋漓、氣躍り、神湧き抑ふる能はざる者ありと雖、而かも微力にして、到底跋扈陸梁の大臣に抗すること能はず、空しく怨を飲みて、巨人の出現を待つあるのみ。嗚呼内勢の急殆夫れ此くの如し、當時の外勢は果して如何。

神功皇后の三韓征服以來、我が國威は遠く高麗に及び、爾來貢獻の禮は、相次きて缺例なき如き盛況なりしか、一朝大伴金村政を韓に失するや、端なく土人の憤怨を招き、茲に始めて外交の蹉跌を來たせり。加之允恭帝の喪時に當りては、新羅を禮遇せざりし之の故を以て、再ひ怨隙を其國に買ひ、仁賢、武烈の朝に至りては外事日に愈々困難なり。當時唐の天下は、上に英明の太宗あり、下に玄齡、如晦、魏徵等の良臣あり、高祖の施設せる事業は、悉とく完備の域に進み、制度文物燦然として具はり、玄武門外太平の氣流溢せむとす。同時に其武威は四方に普ねく、突厥、吐蕃、新羅より頤利、突利の可汗に至るまで悉とく屈服し、高昌、回紇、薛延陀等亦た震懾服威せざるなし。退之の所謂相臣將臣文恬武嬉習熟見聞以爲當然なる評語は、業に既に太宗の世に於きて適當せるを見る。蓋し三韓の全たく唐に服せしは、高宗の治世にありと雖、當時已に多年の藩

屏たる、三韓の、我を去らむとすること極めて明瞭なりとす。今や内外の機運は此くの如く回轉し、其前額には數丈の長毛を垂れて來れり、彼れ若し一步を進まば其後頭は禿にして捕捉すべからざらんとす、嗚呼急機や一髮巨人必竟來らざるべきか、來りて長毛を握攫せざるべきか、果然機運は革新の巨人を起せり。狼狽せず然かれども確乎として、憤怒せず然かれども森嚴に、巨人藤原の鎌足は起てり。

鎌足謹謙にして、銳武斗の如き眼光を以て、能く機運の至れるを觀破し、僅かに一人の中大兄皇子を説きて、三代六十餘年間、空鳥をも墮落すべき蘇我氏の一族を誅戮し、不測の禍根を芟除して、以て大政一新の大業を畫策せる者、彼れ實に有數の巨人たるを失はず。若し夫れ當時の天下にして、中大兄鎌足の二人なかりせば、皇室の急殆筈々乎として累卵の如く、萬世一系の神統も、未だ容易に庶民の僭する處とならざりしやを保すべからず。

之を要するに、鎌足は革命の巨人としてのみならず、誠忠の賢臣として、數多の榮譽を擔ひて餘りあるなり宜なるかな、其子孫の繁榮せしことや、想ふ彼れか功勳は別に大いに稱道せざるべからず。請ふ藤氏の効績は彼れの傳記をして詳述者たらしめよ、(鎌足の傳記は、田口鼎軒先生、史海紙上に於て詳論洩らさず。)而して吾人をして革新の眞相に就きて、竿頭更らに一歩を進ましめよ。

(已下翻出)

時 習 寮 (承前)

時習寮と勉學及運動

河 原 始 二

時習寮に於ける勉學と運動とを下宿屋に於ける勉學と運動とに比較せむに一言以て之を蔽へは時習寮は運動に適し下宿屋は勉學自由なりと云ふを得べし、是れ多數人士が稱道する所。而して予は此れより之を檢せむとす

予と同室なりし某氏は四月下旬卒業試験近づきたりとして退舎せり。其理由とする所を聞くに曰く此れまで遊びたれば自今非常に勉強せざる可からず、非常の勉強は寄宿舎にては爲し難し、是れ退舎する所以。と偶々在帝國大學寄宿舎の一友書を寄せて曰く試験近づきたるに寄宿舎は騒々しくして勉強する能はず、依て左の箇所を下宿したり云々と。予は此二者か退舎の理由を熟考するに何れも其人一個に關する者にして之を以て舍生全軀か蒙る可き損害と見做すべからず、大學寄宿舎か勉強を妨ぐる程騒々しくは予の信する能はざる所なるが我時習寮にては決して左る憂なし勿論白雲堆裡松風颯々たる處に籠居したらむに比すれば幾分騒々しきに相違なけむ、而かも松風の颯々を騒々しと感せぬ人は我時習寮の騒々しき位は少しも耳を煩さるべし。毎朝遅くも午前六時起床の點鐘に蹶起せば授業始まるまでには二時間の餘裕あり、曉に氣爽快なる時に於ける此二時間は他時の四五時間にも優る價值を有し、下宿屋にありては容易に得可からざるものとす。夜十時より朝六時まで八時間睡眠せば睡眠時間不足とは云はれまじ。夫れ入舎の目的他にも理由あらむも日常起居動靜に真習慣を付せむこと其一なるべし、然らば起床就寢の如きも嚴然守持する所あるべく而して唯徒に一時の惰惰に克己心を征服され晏起他の嗤笑を顧みざる人の如き是れ實に在舎利益の一半を放棄するものと云はざるべからず。午後授業後は勉強運動共に自由にして自

在なり、七時に至れば時習時間となり黙記黙誦各翌日の豫習に餘念なく九時半に終り同時に點檢を行ひ、十時消燈す。事此の如くなれば日常の勉強には充分の時間あり、豫習復習とも不足を感ずることなし。若し不勉強家にして入寮せむか、同室員皆勉強するに己れ一人勉強せざるは何となく淋しく知らず識らず勉強する様になるへし。然れども之に反し大勉強家、大讀書家にして入寮せむか或は恐る勉強讀書の時間を減するに至らむを、而かも是れ決して憂ふ可き現象にあらず、浴室備付の天秤は吾人に示すに躰重の大に増加せるを以てすへければなり。蒼白なりし彼の顔色は銅をも欺き、沈鬱なりし彼か性質は快活たらむ。彼の寄宿舎に在りては勉強出來すと云ふは某氏の所謂非常の勉強出來ざるを云ふなり、徹夜勉強の出來ざるを云ふなり、而して吾人は平常決して此の如き非常勉強をなす必要を見ず。况むや其勉強なる者も對机時間の長短を以て論すへきものにあらずして短時間と雖ども精神爽快なる時は許多の收得あるへきをや。而して精神の爽快は躰の健全に伴ひ、躰の健全は運動躰育の結果なるを思へば吾人は時習寮か運動に適せりと世評をして益々真ならしめむことを欲するなり

由來濟々多士の無聲堂、健兒壯客堂裡に躊躇し各嶋を負ふて虎視龍睨し校内の大元氣大活氣は脈脈として常に此に發す、而して日に出入劔を學ひ躰を鍊る者、數へ來れば何ぞ寮生の多きや。請ふ劔道に柔道に其所謂大將椽なる者よりして之を算せよ、如何に寮生か無聲堂に大勢力を有し大原動力たるかを知るに足らむ。通學生か歸宅の途にある時、寮生は既に板踏み鳴して竹刀を揮ひ疊驟散らして妙伎を競ひつゝあるなり。流汗襦袢を濕して溺者の如く、疲憊躰を襲ふて海鼠の

如し、此際此時寮生は直ちに驅け戻りて湯室に飛び込み浴一浴了れば精神爽然又快然、南洲翁か聖人の心は常に此の如くなるへしと云へる者、偶然にあらざるを知る。而して通學生を顧みれば彼等は流汗拭ひも敢えず衣服を着代へテヨ／＼として歸去するなり。若し便不便の地位より之を論せば吾人は通學生か其不便に處して敢て寮生に遜色なきの剛毅熱心を感じざるを得ず、然れども時に限りあり、躰力に限りあるもの、等しく是れ躰育を勵むに當り其便利に就き其誓古を繼續するは學生の正に取るべき道ならむ。寮や實に武道修行に最適す、寮内の各室二三竹刀の備へあらざるなき他推して量るべきかな

漕艇は愉快なり、而かも仲間を要す、七人の仲間之を通學生間に求めむとす、得易しとなさるなり。獨り時習寮に在りては何日何時と雖ども一呼して之を得、即ち端艇會の端艇狂は恐らく通學生にあらずして我寮生ならむ。且つや水上運動の爲め寂寥視さるゝグラウントもロケットニスも一縷の導火を保つもの全く寮生の力にあらずや。其他晚餐後の散策の如き毎夕多くは相率ゐて外出し習性となれるものあり、之を要するに衆評の如く時習寮は實に運動に適當せり、而して時習室は未知の人々か考ふる如く騒々しからず、從て勤學に妨害を蒙ることなし、猶之を確めむと欲せば毎學年試験に於ける通學生寮生兩者か得點を比較對照せよ

時に同室某傍より笑て曰く賞賛實に過ぐるることなきかと、予曰く過くると過ぎざると予之を知らず、唯意に適するもの之を贊し適せざるものは之を却く、此文にして賛意多くは是れ予か意に適せる所以と

(未完)

史傳

國學復興者としての契沖阿闍梨(第八號續)

理木乃翁

結論

寄る年波の數には洩れがたく、翁此頃老病といふものにやあらむ、何とはなくて唯病の床にのみ親み勝ちなれば、筆をとるともものうくおぼえて、千言立ち成りしそのかみの雄心も、今はた昔の夢となりぬ。此のはかなき言葉艸も、あまりに永く根を絶ちたれば、翁自らさへ忘るゝばかりなるを、大方の人々はや忘れ果て玉ひけむかし。今更に賤の緒手巻くだしくくりかへさむ事も、本論餘論などいひのこしつるともつゝけゆかむ事も、筆の命毛みじかき翁にはいと堪えがたく、さりとて焼契沖阿闍梨などのそら長しきわざを眞似ばむも、本意ならねばとて、覺束なくも破硯の塵打拂ひ、ちびたる筆をわななく手に持添へて、側見はなさず短刀直截結論に入らむとす。尙此結論の條には、阿闍梨の上につきて、何くれと翁がおもへるとも精しく論はむとて、さきには腹案を作りたれど、今にしておもへば、才もなく學もなき身の、古の大人の上に加え世評論を加へむと、地下の古人の笑を招かむが恐ろしければ、口惜しけれど皆削り捨てつ。今は唯古人古人を評せし言の葉を借りて、世に紹介すに留め置かむ。

伴の蓄蹊はいへらく。

常に語らふ人來あひて問ひけらく、此頃あざりの説をあげてとかく詰れる言きこゆ、その解言に於ても亦未かやあらむ、翁の見所は如何ぞと。己答へて。其語は必あたりとしもいふべからねど、また稀に思ひ違へられし事なくしもあらじ、されど阿闍梨の功は是等のいさゝけの事もておほふべからず、大とこはのりをこえず小とこは出入すともよしといへるも准らへて思ふべし、中つ世よりこなた詠歌に名たる人々も古の學に暗くしてあらぬ事どもをとりつけていふも慙からず、もや／＼關の秋霧立ふたがりて行人の道たど／＼しきを、さよの中山さやにときあかして千年の夢をさまされしなむ天つ原ふみといろかす神ども神とあがむべからずや云々。凡近世の歌人唯古川の流の説に非れば道の言に非ずとす、是によりて誤を誤にて傳ふるが道なりといふ説さへ起れり、此師此關を透過して一事一語徴を古に取る、其中或は過不及なくしもあらざめれど、一たび此道ひらけてこそ是にツイていふ人も出で來けれ、然れば千歳の一人といはむも過言にあらじ云々。

本居の太平はいへらく。

漢の道は下より根はへ、佛の道は上よりをりて、大御國の大御手振はこもりづの下にのみし知る人もなくなりて代々をし經ぬれば、畏きや神代の御書を釋くにまさかしき漢言振にときまげ、よしなき佛意にとりなしもする世とともなりになる。然るを元祿の頃難波の契沖の大人は、佛の弟子としてその國字を學び、漢國の書をしもよく見渡して、御國の言語のたふとむべき理をなも考へ知りて、かりこもの世々に亂れてありつる假名遣をたゞしみちびき、朝霧のま

どはしかりつる歌の意をもねもごろに教へられけるより事起りてなも、世の中に古事學する人
つぎ／＼にあれつぎて、かのあしどものしみさやれる處々を、とげる心の敏鎌もてかりそげか
きわけ、水底にかく尋ねて、眞珠白珠高く尊き遠つ御代の大御手振神代の古事まで、やゝに光
みえゆく世となもなりにける、うれしきかも、たふときかも

又太平は歌ひけらく

其身こそ法師なれども古言を學ぶ學の祖と仰かむ

代々久に誤てりける假名遣正しおきしは契沖の大人

さばかりの阿闍梨の學そのかみは世に知る人のあらずそありける

契沖の秀てたる學かしくも水戸の君こそまろしめしたれ

その契沖の秀てたる學かしくも、高く尊きわたりに聞しめされて、明治の二十一年十二月、宮
内省より、皇學中興の功績不慙とて、追賞として金百圓を下賜せられ、同じく二十四年十二月特
旨をもて正四位を贈られたり。あはれ此の圓珠の光よ、國學の歴史のついかむ限りは、長へにそ
の上に照りかゝるかむなり。

(完)

雜 錄

能登島の地圖に就きて

漁 翁

能登島は能登半島と如何なる關係に成りしやは少しく地質學上の智識を有するものゝ念慮に浮む
となるべく此島は能登半島と地質學上嘗て一度も連絡したるとなく全く獨立に成りたる島なるか
或は嘗て半島と連絡したるものゝ一旦地震若しくは火山作用の爲に缺損して離れたるものかの疑
は人々の胸中に浮み出るとなり此問題を充分確乎と説明せんとならば能く兩地の地質を考究する
に非れば明し難けれども其乙説の爲に生じたるは疑なかるべし己れ先づ年能登めぐりしたる砌一
ふしの文を草して七尾より羽咋に至る間の平地は元と海なりしが第四紀に到り漸く沖積作用の爲
に埋まりたるを記し置きたれど能登島とは記さざりし其は己れ其地質を調ぶる餘暇なかりし
と又之あるも能く之を爲す力なきを以て此事には一句も及ばざりし然れども或は古き地圖にて
も能登半島と連なれるものありもせばいと興あると思ひ立ち當地は大藩のにもあり殊には古
文書ども多からんと思ひ一日博物館に到り文庫に入り調べもし又聞きもしたれども役員の方に古
き文ども多かりしが維新の際反古となし終りたるも多き故今は残り少なくなれりとのを聞きあ
たら惜しきとしたるよと竊かに嘆きたりきされど調べかゝりて一も地圖を見ざるも餘りに憾なる
と思ひ二三の地圖を見たるに不思議にも皆能登島は半島と連り居れる様認めたるものゝみなり

き此等地圖の調製年月は記しありしか否や今記憶せざれど皆手寫したるものにして左程古きものにはあらずと思へり此島の如きいと古き昔より島なりしとは知れ居るに而も地圖に明に連絡し居るとは如何にも不思議のと思ひしが今日迄別に深くも探ぐらで止みぬ左れど能登島は元と半島と連絡したるもの、後土地の大變動に會し陥落の爲に生じたるものなるとは其地勢上又日本海沿岸の一般の性質上方に然るべしと思へり且つ陸軍省などの地圖に依るも海底に暗礁ありて淺深不規則なる等より推測するも其然るべきとを己が心には收め置きたれども是は只己れの推測迄にして明かに地質學上の證據なきゆゑ公にはせざりし然るに此頃師範學校にて教育講談會のありし際小岩井氏は七尾岩屋の成立てふ題にて其岩屋の成立より能登半島の島なりしと即ち七尾羽昨間に海の連りしとを説かれ終りに能登島の陥落に依りて能登半島より離れたるを丁寧に述べられ己れの思ふ所と符合せり尤も氏の説も只地勢上よりの論にして地質學上のにはあらず其砌氏は天保年度の調製に係る地圖に能登半島と能登島との連絡あるものを示されたり余の疑は茲に至て再び起り如何なれば斯く古き地圖に連絡せる様記しあるか若し天保年度の地圖にある如く陸續きにして其後切れたるなれば其位の大變動如何でか今日の人の口碑に傳へざらん左れば是は製作者の不注意等に依るにやあらんと思ひたれども疑は尙ほ己れの胸中を去らざりき然るに圖らずも當校講師安木田氏に依りて此疑は全く氷解するを得たり氏の話に能登島は當地の地圖には概ね陸續きとなせり是は深き意味あるにして全く當藩公の政畧上に出でたるなりと即ち往古にありて若し能登島を島なりとする時は急ち公領即ち徳川氏の有となる故地圖には之を陸續きとなし且つ巡檢

上使とて公府より檢使參着し土地檢分ある時は急に竹籬を中島邊より對岸に造りて海中に沈め置き付添への役人上使に向つて今日は潮高きゆゑ陸地隠れて斯の如くなるのみと申譯し上使も亦其詐なることを知ると雖も敢て咎めざりしなりと
此とや甚だ些細のとなして益もなきとの様なれど總て地圖など考證とする時は往々不測の誤を生ずるとあるものなれば其が注意迄筆の序にかくなん

貞婦を訪ふ記并二度櫻記

能美の郡上吉谷村に寡婦長子といふ者あり貞操正しきを以て聞ゆ先つとし林某郡つかさの時その行狀を聞たししかる者に褒賞あらむこそ善を勧め給ふ教道のたすけともなりぬべし終身の扶持よねをも賜はらんやとありしに時の執政與村何かしのいかにも聞ゆる操の如くならむにはもとより左もありぬべしまかはあれどあまり年若女の行末いかならむはかりかたしされはとてやむへきにもあらず當座の賞はいかにもよきにあておこなはるべし終身の扶持し給はん事は中年にもおよび其操全からんをはかりてこそ沙汰あるへけれど申されしかはけにもとて先當座の恩賜ありしとかやされは年頃にもなり操いよくかたかりければ歳ことによねあまた賜りて貞節を表せられき其頃行狀をつはらに記し公にも聞えあけしありと聞けど見侍らぬはこゝにもらしつかの若年の頃夫にわかれ幼き子どもを養ひつまありしこと田かへし桑つみなと怠らす扱は野にまれ山にまれ朝な夕なにゆきかへるにもかのつまか墓に必まうてゝ生るか如くつかふること今にまかなりと聞

ことし文政九とせ卯月七日の日寮友鈴木菊英三田村温良を誘ひかの貞婦の家を訪ふおほよそ金澤の南四里はかりにて鶴來の邑に至る是より白山禪定道に従ひて山に入ると又四里はかりにして上吉谷村に至るこの四里の間に河内の庄鳳凰山あり大智禪師の幽棲の跡を見る又雲龍山九十九谷黃門橋飛龍巖など見さへ唐めきておかしき所々あり是を吉野の十景といふなりわつかに其痕のみ残りすへて此あたりは山高く聳え水清く流れて歌人騷客の目とむへきあたりなりかし既にしてその村に至りて貞婦か家居いつくそとひよればもとよりあらはなる賤か家あやしとはかり見ゆむしろめくものすたれのこもかけたるを推わけ誰かあるやとつといれば六十はかりなる姥のこなたなる圍爐裏に柴打くゆらせてよもきうら白なといふ草葉をどかくしつゝどりわけなどし居たりかなたには三十あまりの女の十三四はかりのわらはへのもどうゆひ居たり此山里には見なれぬわなみらのすかたに心ゆかぬにやとみにもいらへすやゝありて何にかおはすや吉野のうりうや見におはせしといひ出たるもかの人にやとまつうれしされは雲龍もこうもり橋も幾度か見つけふはこの里にこそことさらにき侍るそかし公より扶持米たひたるはぬしにや侍る世にありかたき人の操と承るにこそ訪ふなれ何か物かたらひてよといひよるに心おちゐたるやいさ休らひ給へとてむしる打はらひあやしの火をけに火さしそへてたはこくゆらせよなどいひつあるしめきたりぬしのつまや何といひしいつの頃にかおくれし子やいかせし孫やあるなどとふつまは清八といひしか年は三十五にして身まかりぬ二人わらへありて兄は六になり弟は二なりしか兄は今あるごととなり父の名と同じく清八と申すなりおのれ二十四のとしつまにわかれしか此清八とことし四十五になり

ぬれはちのれは六十四にやなりぬらん老さらほひてさたかにも取おほえず弟はちのれか親里に養はれて是も主となり田畑あまたもてるなりこれなるはよめ此わらはこそ孫なれとかたるいつのとし頃より公の御めくみはありしそととへはつまにわかれしよりはたどせになりしといひかなることにかひとりふちすへく米と青銅壹貫を賜しより年毎にかくて又はたどせになりぬいやしき我々にあたへらるへき事とも覺えぬと公の仰ことなりとて只こかしこまり申なりさるは身にあまる冥加も恐ありて其年の師走廿九日かまどより火をやまちて家はやけうせぬされど四となり家居もつゝかなくてうれしく思ふなり其折残りしは此なる戸一ひらなりしか又かゝる家居作り出てすめるにも公の御惠の身におはぬにはかゝるわさはひもいて來ぬと日頃思ひよると打ものかたらふけにありかたき心の人かなかくてこそ御惠もありけらしと我人かんしあへるにおのれは根性のよきにもあらぬそよ人にかはりし事も仕出ぬそよ勿躰なの御惠や恐多の御威光やと言葉少に打いひたる諄朴のさま天性に出たり夫の墓やいつこにかある朝夕出入の折必詣つると聞さもこそはととへばさ侍るなり墓は畑のあなたかのほどりになどいふも聞は程遠きあたりなり何かな參らせ度は思へどかゝる山家のとひつゝせめてはとて指出せるはあやしのうつはものにもりし穂米なりかゝる家の米すそ何にもまさりてめてたけれわなみら歸りて人にもわかちあたへはやとふどころかみに少計つゝみたるをさもし給はんには是みなつゝみ給へどみつから手つから分ちおくれりどかくしつゝ日もやう／＼たけ人々家路におもむかんと思ひ立又折もなどいひつゝ料足少はかりおくりあたへしにうれしどうけをさめたるさまなどよろつ道のまゝなるはかみつ世の人の心すなほなり

けんもかくとちもほゆこより神子清水へゆくへき稻倉越やいつこそとふにそはこの道よりかうゆきそのあたりよりとさまによこをれてさてはなにの街道に出ぬるそ尙此孫に道のないせさせ侍らめとねもころにをしへおのか村のかきり見送り夫よりは孫しておくらせしかこゝにてわかれぬ雙塚西にあたりて縣路あり我丁男をして君をおくり去しめんどかの王建か作りしもかゝるをりの情にこそ有けんかも

因に老るす此日稻倉越より神子清水の村をへ別宮村にいたる某の家に三度櫻あるを聞行て見たるに木高き三丈計にして枝々滿庭に蔭す某いふ祖母年わかきころ此ほとりの山中にして此花を見る吉野の各種と同名なるを以てこゝにうつすと其花八重の紅なるに志へのうちより又白き八重の花を出すひらくにまたかひ紅は外になりて漸々に散る全く老るき花ひらのみになりたるもありいまた紅にして白きつほみを含めるもあり某いふ此花はしめ白にして中頃は白より紅を開今残る所の紅是なり終に紅より白を開ことまさに見處の如し今兩三日を経て終の花盛なるべしといへり咲始しより一輪のうてなのうちにして三たひに白紅白の花を見る故に三度櫻と稱す花凡三十日計をへてはしめてはらへるかことし都下の花三月中旬を滿開とす志かるに此花四月七日に尙かくの如し是をもて盛久しきを説其言のあさむかざるをしる實に海内の各種といふべし予おもへらく伊勢の白子の不斷櫻と稱するも四季咲花卉に類す墨染櫻淺黃櫻も又色の紅白あるに理ひとしひとり此花の如き他にありやきかす嗚呼物の隱顯も時あつて志かるか此花曾て吉野十景物の一にして其名口碑にありと雖も元是北地山中の事又他邦の人の必志るへきにあらす况や今は枯朽星霜の久しきを

以て都下の人士すら此種の此地にあるを志らすなんそ其不幸なるや此日花數枝を紙におしてかへり好事の者に示と雖も久しく貯へかたきをいかん物微なりといへとも其美のあらはれざるををしむ故にこゝに志るして貞婦の操ととも其名の長く朽さらん事を思ふのみ 蘭所原典

右一卷者榊原守典より借寫置ぬ

佐藤元知

世に物の絶なんとして絶さるは神の守れるに似たり此書もさる類とやいはましざるは明治聖代の美事として皇國地誌編輯の擧あり夫かために石川縣廳にては地理課に地誌掛をおかれて縣下の諸郡誌諸町村誌を編輯せしめらるおのれも其員に連れりその参考の書類はひろくあつめらるなるに此文はある書あき人の手にありしをかひあけられたるなりけりかゝる文は時世につれてうる人おほくかふ人いとまれにてともすればすきかへしどもなりぬめるを幸にしてそのまかをまぬかれたるは此文の幸とやいはん此文の幸は此文に志るせる貞婦長子の幸なり因に志るせる名ある櫻の幸なりはたちのれ此文によりて別宮村に此木のあるを志れるはおのれか幸なり昨年八月能美郡の村巡回せし時七日此村に至り村用掛後藤五右衛門にあひて此木の事尋ねしにいとてあなひして見せたるは某の家にはあらて村の北端より白山別宮神社に行道の東傍にある木にてそありし此木は六十年のむかし文政九年の頃高三丈計にして枝々滿庭に蔭すといふはかりの老樹にはあらて幹の周り壹尺五寸はかりもやあらん丈は高く直に延ひたれとさしも枝葉茂からず猶若木と見えたりかの某の家なりしは枯たるにや志らすかゝれは名たゝる吉野村なるは人たえはて此村の某の家な

るも志られざるにたゞ此一本のみ残りて其名とその花との世にうつもれぬはなほ神の守れるにや
 とこそ思はるれかくて地誌は金澤誌石川の郡町村誌は前つ年既に成り能美郡の諸誌は今一月にて
 全く成ぬへくなりたり餘郡は未しけれと今年七月よりは内務省にて直に編輯せらるゝ事とさだま
 りたればその書類は残らず贈らるへくなりたり此文も其内なりけりおのれおもへらく此書他に
 いつとも作主の家につかはいつにても見ることを得へけんと思ひけるにはからずも一昨日河波有
 道か櫻遠にて柳原思齋翁にあひたるにあにはからんやかの家にもはやくうせて今はなしとそいか
 て寫しもたらん人あらは再ひうつしてうみの子にもつたへまく思ふをいまた誰うつしもてりとも
 きかすといはるゝにさては此文ならて世になきなめりいてうつして見せんかしといひちきりてか
 へりぬ今日は我家の源氏物語の會にて田上課長をはしめ同寮の人たちも來給ふへかりしを此頃の
 洪水にて事繁ければとて來給はずおのつから暇を得たればかくはうつしどりつかうてかの家に再
 ひうつしとめたらんには作主の本意の如く貞婦の操ととも櫻の名も長く朽すして祖先の厚き志
 も空しかららんかし

明治十八年四月廿四日古學舎のあると

高橋 富 兄志るす

文政九年は丙戌のとしにておのれか二つのとしにあたり

ひと度は行ても見はや一春に三度さくてふ山さくら花

春來何の獲る所と問はれなば啻これ。敢て山水の奇を傳へんとは申さじ、聊後の遊者

に資る所あれかしとて斯く南無。恐看官之倦讀笑譚刺話
併愚吟悉削之了諒焉

富士川舟漫遊漫筆 ***は省略の符、
...は引用の文と全行の名、

白 榆 太 瑯

三月名残のまたき兼て約せし風來行脚男俄に全勢一人増して元靜、太瑯の三人、思ひくゝの扮装に
 て甲斐が峯わけんとたつ。二分間の違にて三崎町の涼車に乗晚れ無駄云ながら十二社觀て中野の
 停車場に骨牌どりしは開關以來ののん氣沙汰、漸う涼車待つて八王寺迄走り柵田にて飯喰ひ淺
 川村より高雄山に登る。峻坂一里、楊を路傍に設けて休憩にあつるもの二ヶ所、一は谿路轉ずる
 所、莓苔に滴る水の音寂て老鶯の逝く春悼むも床し、一は山のかけに臨みて近くは八王寺遠くは
 筑波峯を望み武藏野の平原靄霞罩むるも興あり。山頂の古刹を藥王院といふ、天平十六、行基の
 草創どかや、護魔堂大日堂杯萱萱なるもめでたし。仰見て青空に昇るかと覺しき程峻しき石階登
 りつむれば、金碧燦爛たる飯綱の社、俊源法師の不動明王の化
身彫みていつけること 極端の人工と天然と相反映して繪に描
 きし小喜見城とやいはむ。丹澤、大山などを目ぼしきものにして甲相の連山波の如く脚下に起伏
 せる何となく偉大崇高の感湧きぬ。山中に琵琶瀧、蛇の瀧あり。又松の尾の峯の曙ならぬ共茲にも
 佛法僧啼くどかや、迦葉二荒醒醐高野などと共にやがて名山の一ならめ。茶店の爐とくさくさの
 物語せる中空模様只ならず變れるに驚かれて山後の樵路傳ひて下山し相州津久井、千木良にい
 つ。小原の谿川に桂橋といふあり、構造の奇しき其道の人に見せなば談柄もあるべし我等はた

面白く見て過ぎぬ。***與世にゆき桂川の渡こゆ、此處流急なればにや川面に太き鐵線わたしおき水夫は棹操らで此線を手繰りてわたす。珍らし。此川は相摸河の上流にて此邊一面の高臺なれば川深く岸聳えて何となく物凄きに空黒み行けば川霧こめて天地は沈まんばかり静之。日連の里に灯點す比又も桂川の上渡りて吉野の坂本屋に宿りぬ。高雄、桂川、吉野、優しくも誰が名つけしむ此塵の外の小寰宇に。水の音枕に聞きてこゝに旅の初夢。

降りかけて今日になりけり四月朔日は雨。何とやらをかしからぬ。是風流と云ひしはえせ我慢歟。思々の雨準備に最困りしは傘たぬ我なりき。上野原といふに市たちて傘に街埋めしは絹の取引の盛なるを看るべし。鶴川、大栢など過ぎて野田尻にかゝる頃は道につかれ雨にそぼちたるは未しも物慾しくなりても愁ふべき檐さへなきに、さしも口達者の三人も今は無言の行殊勝に、泥を叩く切草鞋の音に詞譲りぬ。犬目にて馬鞍、簞、臼など所せく並べし田家に押入り駄菓子一筥あけて飯に代へ、鳥澤過ぎて、扱も甲州の名所、三奇橋の一として名に焦れし猿橋の春雨と怪我の高名をかし。桂川の流此數町の間兩岸急に迫りて巉岩峭立、淵は藍よりも碧く瀬は雪よりも白し、玉輦び煙立つ裏、雨を添へて一般の妙趣。橋は長十七間、幅三間、支柱なく框を兩崖に疊みて層々相望みたる上に架す。橋と里とは全名、音訓を以てわかつ。駒橋にて草鞋買ひしに茶店の主對岸の山を指して彼小山田が城跡岩殿山といふ昔想へば小腹の立つことなり。田野條下參照、甲州は藪少く草鞋高半宛なり、大月橋過ぎて笹子川の右岸に沿ふて溯り初狩にあやしき宿もとめぬ。濡たる衣乾しなから相宿に明日の路尋ねなどし日和氣遣ながら華胥へ行脚にまかりぬ。宿の主をかしき奴。***

二日。はね起るより早く窓押せば霧海の如く白濛々。これは日和の徴なりと見巧者の天氣通氣取る静もをかしや、空は平曇ながら霧霽れて雨も降らぬに稍力つきてたつ。白野にて都なる清香の許へまらせの手紙郵に附して、大鹿越にかゝる。吉ヶ久保、黒野田より笹子超ゆるが本街道なれど少しく譯ありて此樵路たどるにさだめぬ。抑笹子三四六九尺の海拔と小佛海拔一五八五尺、との二嶺は甲武街道の二大關にして峽門を爲す、而も三人は小佛の街道を超えずして却て高雄峯に攀ち笹子の大路をすぎずして日野山の後にわけ入らんとするは多少好奇心より出たるなり。朽葉徑路を埋めて苔滑に枯木に風吹きて水岩に哽ぶ、鳥も啼かぬば自己が足音高く殘の雪噛みて漸う山のせに登れば右に天目の山黒く左に御正躰の峯雲白し。鹿子班の日野の山路に陰雲低く霧深く、山嵐颯々淡雪を捲てすさまじ。峯超えて下坂になれば來し方は早雲に入りぬ。崩れし崖に丸木橋危く見下すたに、水細し。田野に出で景德院を訪ふ。往昔武田氏の亡びんとするや小山田信茂異志を懷き母の質たるを奪はん爲勝頼に勤めて新府を捨て、其居城岩殿に入らしむ。勝頼一族二百餘人卒五百を率ゐ之に赴く婦女皆徒歩にて従ふ。笹子の麓駒飼に到るや信茂母を奪ふて去る。勝頼歎かれたるを知り主従四十人天目山に走らんとして此地に來り民舎に據りて追兵と戦ひ力盡きて自裁す。天正十、彌生十一日なり、院の草創は實に此時にあり。明治廿七年全村火を失して院亦災に罹りぬ。寺僧餘燼中に獲たる斷鎖兜片を出して示さる、其色瓦の如し、曰く焼けぬ前は立派なものでござりましたとサ、と何等斷腸の語ぞや。時方に午、僧則大鹿の時はよし超やうと此なもの咽喉は超え

まいがと麥飯を饗せらる。中々のこと。碑をたゝき共に昔を語れば愈心しれて遂に一泊を強ゆる僧に強面く辭せしも日を限れる身なればなり。因に云、勝頼生害の地を天目山とすは天童山(景德院の山號)を附會の説を爲すも鶴世にて蛭石を購ひ、勝沼に大善寺を訪ふ。寺は生藥嶽の麓、日川のほとりにあり、さるに足らず、勝頼に從ふて田野に走りし理慶尼が武田氏の末路を志るしとて、理慶尼の漫昔の忍はれぬ、下栗原にて始めて富士を見る、いと嬉し、一夜假寐の草、菴鐘を枕の上にくくつるの郡のあさ立つも日たけてこゆる山道をすぎて石和に着きにけりと江波左衛門が謠曲に傳へし鶴飼勘作が古跡遠妙寺

文明十一、石に日蓮が昔を想ひつゞけ日くれて甲府に着きぬ。****

四月三日、都の空はいかならん賤がくづやの軒にも日の旗、空も麗なるに行手いそぎて岩窪なる魔縁塚法性院大僧正機山信玄の墓に詣で、英魂を弔ひ、また古府中の躑躅が崎信虎城並信玄居之天正九勝頼移新府城にゆき見れば松は

千年の緑ながら野草芊々、永正の昔はたゞ俚人の口に残る耳。相川、塚原よりキンスの峻坂越えて千代田に富士を見納め、荒川の左岸下帯那天神平の一ツ家に晝飯をたゝめて御嶽に向ふ、之を新道とす。其間造化を弄し石に神あり水に聲ありて直に人間を把て天地に冥合せしむる處則昇仙峽なり。不動瀧、轆轤瀧水、登龍岩、猿岩、蟾岩、石、羅漢山、一、二ノ嶽、山、皆奇、漸く北行すれば農圃右衛門天保十一年初開鑿此道者の碑あり、石門あり兩岩相擁して危欲崩れんとす、過れば境愈奇、中に就て雪白の巨巖豁に臥して大象の水を渡るが如きあり、元氏筆を執りて辭を題す、此間に立て仰で天を觀れば虹輪日を繞るを見る、俯て流をみれば雪飄り虹湧く、蓋水煙漠々たればなり、雪虹瀑と叫ば。また磨崖碑あり、千尺の斷崖水に臨むもの中腹を截りて一橋を架す、昇仙橋といふ、

之を渡りて數間、路傍空屋ありて飛瀑を見るに供す、瀑は矧川が所謂銀繩條落半は潭に落つ時灑灑として一束の碎雨に異ならず雨下り湍飛び奔りて橋外に出る所雄快、一番人目を壯にするもの、仙娥瀑とは是れ、矢立の禿筆ぬきいで、不觀昇仙峽者未足與談山水之奇、元、靜、太、瑯と書して哄然一笑、去て巨巖中腹の孔門に入る、門を過れば猪狩の閭里、山少しくひらけて茅舍十數、水緩かに麥青き一寰宇、淵明が武陵に桃花運きまでなり。三時すぎ宮本村に宿る、御嶽の南微東にて金櫻神社所謂御嶽山あり雄略天皇十一年の創建、老杉轟轟天を掩ひて暗く石階年と共に荒れて神寂し古祠、金銀を鍍し五彩を施したる殿宇の、雨に風に洗はれ褪せての古色言はん方なくめでたし、祠前に櫻の大樹あり金櫻とよぶによりて名く、名物の蕎麥喰ひて、灯點し比太瑯獨社務所を訪ふ、祠人のいふ、元祿年間寶藏火を失して貴きもの多く失せぬ、史料の如きも存するものは主として足利末以後のなりと、噫、祝融先生胡ぞ然く名所巡を爲すや去る十八年も此一村を荒らしとてか。

明れば御嶽の土門抜けて舊道より荒川の支流に沿ふて下り龍王に慈照寺信玄創建見て釜梨川の堤防を走れば左に八葉芙蓉峯、右に白根駒ヶ嶽、振顧れば八ヶ嶽の峯體し、漣寄する長堤草花々として、落々たる礫土吹捲る風袖に寒く枯木の烏啼悲げなるも旅、西花輪の橋渡り絲によらる、青柳のさどに日傾きぬ、四月四日の夜を音をのみ忍ばる、鯉澤に、強面き宿の情は薄き懸布圍も旅ぞかし、靜氏心地例ならずと聞て心痛めぬ。****

あくる朝は天空きよく兼てこがれし富士川舟。****舟は長三間計、側高く底平に板薄く舳舻天に朝して舟首別に一孔を穿つ。長は棹を操りて舟首に、舵取は舟尾に立つ、他に二人の壯

漢ありて櫓を操る、櫓動く度に舟側ゆらぎ岩をすぐる毎に舟底躍る、是下り舟、白帆を懸けて列を爲し長竿をもて舟端の孔を貫き長之を推して進み、幾條の綱を結びて懸聲に力を併せ足半うしひかに砂礫を蹴りて十八里の急瀬を溯るは上り舟なり、下るものは六時間、神の放つ箭に似て疾く、上る者は三日、僊に伴ふ鷗に類て閑なり、共に是一舟四人、七百隻、通じて二千八百人、妻孥を併せて數千の生命は擧て此急流の水馴棹に懸れり、舟中談笑の聲湧きて平和の神此處にゐますが如し、乗合は多く是身延詣、中に保村の金山にゆくといふ洋服男あり、善く語る、舟中より指して曰く、彼峯後は信立探金の跡なりと、峯は則鈴森の支脈にて早川の濱、京ヶ島の邊歟、蓋戰國の時に當り甲州富源の一たりしもの、八日市、伊沼、さては下山より上陸するあり、予等は則波木井なみきより身延山久遠寺に詣る 文永十一、波木井の南部六郎實長日蓮に歸依し此山を寄附す、弘安四年の開基なり 大門内に身延村あり、祖師堂、位牌堂等は丹青を施し彫鏤をきはめ満山の閑寂と妙に反照して箇中趣言はん方なじ、ましてや檜椶蔭黒く鳥聲さびたるに、吹くとも見えぬ春風のまに、ちらく山僧の衣手に散る花の影、燒筆捨る人あるべし、其ほか堂宇山に滿ち峯にわかれ寶淨龕、水明樓はもとより、十町にして西ヶ谷、五十町にして芽陀利峯奥ノ院に達し四里半にして七面山海抜五七一尺の奥ノ院に達す、實に一場の靈域たり、開會關前の茶店に晝飯して大野の本遠寺前より下る川舟の便もとめて南部に宿る 有三郎光行蓋之古跡 富士川の流は早川と合して後川底急にして水愈激す、****四月五日、六日のまだき舟長來りて催がす儘にまた同じ舟に乗りぬ、全舟の客は昨より少し而して川流の奇は昨より多し、急瀬箭の如きところ舟底水裏の岩を摩して舟舳躍り激湍渦捲くわたり飛沫雨を降

らし珠璣亂れとぶ裏に舟は落葉の秋風に舞ふが如く忽にして巨巖峭しき處に到れば煙霧起り白龍躍り波浪澎湃ながら飛瀑聲雷に似たり、一瀉千里山搖ぎ樹奔る、あはや巖巖を衝きて粉壘せられんとする一刹那優然たる舟長棹を操て舟首を一轉し去れば碧潭蓋の如き處水油の如し、一緩一急曲折婉轉或は菜花金を銷するの村をすぎ或は蓮花をかしき岩邊を走り其間忽隱れ忽顯れ前に後に白衣美人の迷鬼戯を爲すものは「火の女王」なり、葛籐を編みてつくり鞦韆動搖絶壁に架りて危歎墮ちんとするは藤橋房内なり、六稜紫潤の岩柱轟々駢列して殘崖を爲すは俵岩是れ、巨巖削りなして層々斜に相依り直に水に入るものは所謂屏風岩北松野なり、其他何の瀧、何の岩、指を擧るに違わらず、十時岩淵に着く、停車場前の茶店に入りて晝食に別宴を兼ね我のみ俗用あれば袂を茲に別ちて瀛車栗毛にて都の紅塵千丈裡に墮落しぬ、靜、元の二氏はなほ三島熱海に可笑き夢見しとかや。

(完)

蓮湖週航の記

豊 泉

同室の豊泉子先きに他室のボート狂等と蓮湖にて半死半生の苦境に陥りし物語、時節後れなれば辭むを向暑のりから涼しき思やせむと強ちに勸めて此に載す、固より文章を味へにあらす、一難を経る毎に一倍し來る大丈夫の精神修養、讀む人も得る所あるへしと

時習寮生 義 山 識

短艇會成つてより既に半年、爾來塵風砂を捲て白烟天に漲るの旦、雲雲雨を呼んで激浪岸を嚙

むの夕、苟も學課寸暇あれば、則ち輕裝單衣、二里有餘の路を遠ともせずして、蓮湖の濱に操艇するの士、陸續相接す、猗猗又盛ならずや、然れども未だ一人の立て湧騰を澎湃たる北海に洗ひ、鐵腕を洶湧たる怒濤に試みたる士あるを聞かず、由來我校斯道のチャン少からずと稱す、而かも、未だ曾て此雄圖を耳にせざるは何ぞや、若夫短艇會なる者をして、徒らに技術の巧拙にのみ之れ拘はり、メダルの犠牲にのみ之れ供する者たらしめは則ち止む、苟も健腕を練り、膽力を養ひ、并せて海事思想を發達せしむるの要具たらば、何ぞ進んで海龍浪蛇の窟を發かざる、見ずや北海の怒濤は齧牙を鋭にして、諸氏が權尖に砕くるを待ちつゝあるにあらざや、其他能水越海、亦皆諸氏が舵痕を印するを願ふや切なり、而して吾曹の遺憾とする所の者亦實に茲に在て存す、然れども千里を飛ばんとするの大鵬は、先づ一里の近きを試む、大海を跋涉せんとする者は、先づ小湖より試みざるべからず、吾曹ポート狂の約して、蓮湖の週航を企てし者、亦偶然ならざるなり、夫れ河北の濁や、小なりと雖も周圍尙ほ八里に餘る、實に吾曹初心者囁強の修煉場なり、今や三冬嚴寒の季は既に過ぎたりと雖も、固是陰晴常なき北國の天、繽紛たる鷺毛は時を擇ばずして來り、漸瀝たる北風は寒を送つて止まず、運動場裏頗る寂寥の感なき能はず、况んや冷水の邊、凍水の裏、寒櫓を操るの短艇をや、人の擇ばざる處は則ち吾曹の欣ぶ處、如かず留て田單の故事を學ばんよりは進んで政宗の快輿に倣はんには、幸ひ今廿九日は恰も満月に屬す、寒月の下、東坡の亞流を汲んで窈窕の章を吟じ、枯蘆の間、寒櫓を打て白鷗の冷夢を破る、亦快ならずや、約に加はる者總て八人、曰く蓋世、掛水、白郎、有恒、如鐵、守行、秃山、及愚、

翌くれば則二月念九日、只見る雲脚低く四山を蔽ふて天地迷濛、醫王嵐は颯として冷風を送り、無情なる雨は屑々として一滴、二滴落ち來れり！、加之測候所上、赤球の高く竿頭に懸れるを見ては、吾曹焉ぞ忸怩たらざるを得んや、然れども、吾曹の快心は猶ほ三冬の池水の如く、寒颯飛雪の烈きは、益々以て其志を堅くするのみ、斯くて一行の輕裝、校門を出でしは實に午下二點鐘、各自今夜の快輿を樂み、周航の前途を豫想しつゝありし間に、身は早くも郊端、青松白野の裏にあり、見渡せば濃霧深く水村山廓を閉ざして寒村烟稀に、自ら畫中の人たるを知らず、歩す少時、果然北風一陣北より來り、松籟颯々遙に怒濤の聲と相應じ、颯々の聲は遂に嚙々の音となり、而して霰、而して雪、相踵で來り、轉た征夫の心をして凄然たらしむ、四時漸く大野艇繫場に達す、時に雪僅に霽れたりと雖も、凝然たる數團の黒雲は簇々として南走し、西涯北隅、暗きと墨の如し、蓋し暴風にあらざんば、則ち雨雪大に至らんとする前兆か、偶々二三の漁翁側にあり、則ち問ふに今夕の天候を以てす、抑も彼等は常に雲の形狀、風の方位を觀て、巧みに天候を豫測する者、所謂活晴雨計なり、凝視するもの暫時、徐に答て曰く「黒雲が山手の方へつき上げて居るからど、セアレダ瀉でも波は中々高ひぞ」と質朴なる彼が答は、如何に吾曹が胸中に波瀾を起さしめし！、衆相顧みて茫然たる者少時、然れども此無慈悲なる一語は、反て一行を激勵するの興奮劑となれり、斯くて發航の準備は成り、漕手舵手各其處に就き、今や權翼盛に張つて艇長が一令を待つのみ、忽然「ゴー」の聲は艇長の口を衝て來れり、健兒の鐵腕は鳴り出せり、噫、大鵬の翼を張つて波を蹴るは何をか圖らんとする、艦端の四線旗、寒風に吹かれて翻々たるは、抑も如何なる活

劇をは演ぜんとする、壯亦快、意氣凜として北海を呑む、呼んで蓮湖通航と言ふ、而かも艇中一椀の糧をも携へず、一壘の水をも貯ふるなし、無謀も亦甚しからずや、時に西風吹て背より到り、艇の快馳箭の如し、守行則ち欣然白布を擴げ、謂て曰く、「順風帆を漲らして航す、又快ならずや」、と則ち糧を立て、櫓となし、帶を解て繩に交へ、意匠慘憺、假帆漸く成り、守行頗る得色あり、衆亦竊に以爲らく、一夜の航程一夢の間と、然るに何事ぞ、冬時風位の定まらざる、嚮きの順風なる者は忽ち逆風となり、反て妨げをなすに至る、守行頭を痒て歎じて曰く「塵世の度し難き萬事其れ斯の如きか噫、」と長嘯一番、氣霓の如し、然れども失望せるは豈啻に氏のみならんや、於是復た帆を撤し、臂力を盡して漕ぐ、櫓頭銀輪を盡きて音洶々、舟は風を剪り企々として走る、粟ヶ崎橋下を過ぎし頃は、時既に六時、暮色蒼然、湖を渡つて至り、乾坤杳迷、雲山水廓、矇矓只一色、而かも艇を橋下に捨て、悠然口腹を満すに汲々たり、大膽斗の如き者にあらずんば能はざるなり、湖中に進むに従て、北風益々強烈を加へ、激浪高く舷端を打て、飛沫衣を濕ふし、六花蕭々横に面を打つ、手足冷凍、殆んど感なし、然れども操櫓は止むべからず、舟は進行せしめざるべからず、手足を暖めんか舟進まざるを如何せん、操艇に意を用ゐんか手足の冷凍を如何せん、漕手の苦其れ如何ぞや、加之、天に燦星明月のあるなく、地に燈臺目標のあるなく、所謂咫尺を辨せざる眞の暗、而かも羅針の設なくして巧みに亂杭蘆洲を避けて舟を進めざるべからず、全艇の死活一に舵手の意に由て之れ決す、舵手の苦心其れ如何ぞや、然るに漕手舵手皆平然として艇を進む、匹夫の猪勇にあらずんば、則ち丈夫の眞勇のみ、忽然ア！の聲は整調に由つて叫

ばれたり、顧みれば無殘!!艇は蘆洲に乗り上げたり、亂髮蓬頭顔面朱を濺ぎつゝ、バック、ヘビーを叫びし舵手の眼光の鋭さ、恰も魔王荒れて群鬼を呵するに似たり、幸にして命令其功を奏し、遂に繆澗覆没の禍を免れたるも、蓋し皆天祐ならん、既にして楫水交て舵手となる、風は愈々激して波益々烈に、洶々鞞々、或は高く、或は低く、飄々亦翩々、打ては來り過ぎては又行き、一上一下動もすれば輒ちチャールを奪去らんとし、鳥返の醜軀を演ぜしめんとする者屢々、波と戦ひ、風と争ひ、而して雪に抗し、寒に勝たんとする漕手の顔、恰も夜叉の荒れたるが如し、事態斯の如し、行路難を叫ばざらんと欲するも得べけんや、然れども之れ吾輩の最も苦心せし所以にして、抑亦最も特意たる所以なり、顧ふ先年「ノルマントン」沈没の當夜、七十五の同胞が、無殘にも紀州洋一沫の藻屑と消えしは果して如斯の夜なりしか、等者へつゝ暴進する者半時、嗚呼無念と豆の如き舵手は叫び出せり、而かも聲は破鐘の如し、見れば艇は又もや淺瀬に乗り上げたり、慨然として立つ者、猛然として怒る者、櫓を採る者、鉤を棹す者、綱を手にする者、舵を動かす者、而かも艇動かざる磐石の如し、守行赫然氷より冷なる水中に飛び込みぬ、而して一人亦一人、盖非常の際には又非常の勇氣出づる者か、則ち一同協力、櫓を押し、舳を壓し、又舷を突くと雖も出る者は只懸聲のみ、然るに、風伯は益々白龍を躍らして來襲し、蒼然として觸れ、洶然として鳴る、來襲する毎に舷を踰へて艇中を侵し、脱き捨てたる外套上衣、悉く濡る、一行剛なりと雖も焉んぞ懼然たらざらんや、方此時、議恰も二派に分る、守行頑として曰く暫らく風浪の靜まるを待て、更に宇之氣に直航すべしと、而して白鬪頻りに之を贊す、他皆曰く風の貌、浪の

態、少くとも今夜中は止むなけん、徒らに進んで大方の嗤笑を受けんよりは、退て寒を凌ぎ、飢を慰するに如かずと、議遂に後者に一決したる幸か不幸か、時實に午後八時、天地暗憺として、風物自ら悽愴、噫之れ何の地ぞ、枯蘆の尖株、僅かに影を止めて波の洗ふに任せ、水田荒畔漁介の棲むに任す、則ち一同舟を捨て、上陸す、余艇公に饒して曰、艇よ吾曹が無情を訴ふる勿れ、訴へんとならば乞ふ風と浪とを怨め、と泥畔を拾ひ、水田を互り、右曲左折倒る、者、落つる者、身に着る所悉く泥と水とに浸れつゝ、跟踉として南進する者殆ど半時、忽ち泥江前に在り、廣くして飛ぶべからず、深くして又渡るべからず、忽ち見る右方腫脹たる暗中、林影の如きを、則ち走て其處に赴けば、豈に計らんや一團の濃雲地に垂るゝなり、而かも林家と思ひしは全く之れ湖水、岸打つ浪の聲は愈々高し、更に踵を轉じ、冷柱枯骨の如き足に鞭して、左方に進めば、徒に波浪の激々として岸を打つを聞くのみ、前に小江あり、右も瀉なり、左も瀉、噫、又怪訝ならずや、地圖を探らんもマツチ濡れて燈明を得るに由なし、於是心神龍爾として、恰も魑魅狐狸に誑されたるが如し、斯の如く苦境に彷徨せし者殆んど時餘、勉めたりと云ふべし、而して遂に一路を得ず、不運にあらざして、何ぞ喟然として歎ずる者あり、悵然として憂ふる者あり、一人曰く徒らに迷路に逍遙す、勞して功なけん、如かず歸て艇中に露營せんには、吾曹固より寒袷濕衣を抱きて露營を欲する者にあらず、然れども此時に及では又如何ともするなし、則ち泣哭涙を呑んで踵を繞らす、然るに又もや艇の捨所を失ひたり、行けども、探せども、艇は微影だも見せざるなり、蓋し初め吾曹の上陸するや、一意只だ民家に達するにあり、暖をとり飢を慰するにあり、豈に歸

艇を之れ思はんや、徒らに深入して斯る奇禍を招きしも、固より自業自得のみ、呼んで答ふる者は波なり、叫んで應ずる者は雪と風のみ、噫當時一行の心中果して如何なりしぞ、進まんか路なく、歸らんか艇を失ひしを如何せん、而かも寒風は益々浙瀝として手足剪らるゝが如く、飛雪は絮乎として仰く敗兵の顔を打つも無残なれ、百方探索、漸く艇に着するを得たり、則ち一同舟中に踞し、膝は膝を重ね臂は臂と相接し、前の廢帆を被ひ、相牽引密坐すると雖ども、外套は濡て氷の如く、上衣は濕て納々焉、全身徒らに風雪の侵すに任す、嗚呼東坡の亞流を汲んで窈窕の吟は誰か口にする處ぞ、遙に想ふ金城々畔、時習の寮、時に我時習寮恰も茶話會に屬す、幾十の同友は、茶に酔ひ、菓に飽き、或は吟詩に劍舞に、或は音樂に壯談に、各々獨得の技量を振ひつゝあるならん、顧みて吾曹現時の境遇其れ如何、同窓六百此苦を夢る者ありやなしや、吾子思ふて茲に至る、惘然たらざらんと欲するも能はざるなり、一行の中或は健腕を以て鳴る者あり、辯口を以て優るあり、剛膽自ら任ずるの士に又乏しからず、然るに今や一人の鳴る者なく、慢なる者なく、只默然僂居、齒を震はして戰慄し居るのみ、宜なり、古今幾多健剛の士も、一旦世路の逆境に遇へば、則ち窘蹙萎靡たる者、又理ありと云ふべし噫。夜更くるに從て寒一層寒となり、飢亦迫り來る、布下艇中尺寸の間に割據して、手拳を戦はすあれば、柔軟躰操を試むるもあり、奇にして又妙、月下の清遊、圍碁の快樂、悉く金城一夜の空夢と化せしとの無念よ、若夫此儘にして放棄せんか、可憐有爲の健兒をして、無殘や河北湖邊、一片の泡沫と化せしめん、語に曰く節は難あるときに見はる、と、吾曹今や非常の苦境に沈淪す、豈一人清節高義の士出づるなからんや、果

然二人の高士身を挺して立てり、高士とは誰、如鐵、楫水是なり、二氏誓て曰く、天に陰晴あり、人に吉凶あり、吾曹偶、壯圖を企つれば、則ち風浪雪雨の妨を受く、固に天の命のみ、然りと雖ども今此苦患にあつて徒爾なすなからんか、遂に嗟蹇の悔を殘さんのみ、生等豈に之れを見るに忍びんや、進んで道に斃るゝも、坐して風雪の犠牲となるは願はざる處、卿等爾今一時間を待て、敢て卿等の意を滿たす時あらんと、語句凜として鐵馬秋風に嘶くの慨あり、顧れば双影既に去つて痕なし、時實に午後九時、轄々たる怒濤は舳を打て雷霆の如く、凄々たる逕塵は、蔽布を拂つて聲潮滂たるのみ、噫一塊の飯あらば、一團の火あらばとは、各人が腦中に描きたる空想なるべし、斯くて風に吹かれ、雪に打たれて待つと殆ど時餘、嗚呼、此時餘こそ實に吾曹が最も苦を感じたるの時なれ、さるにても探檢に上りし二高士の消息は如何、健在なれや二君、倏忽燈火見ゆの快聲は余と對坐せし蓋世の口を借て出たり、蓋世獨り被布の隙を窺て叫ぶ、而かも余等仰ぎ見る能はず、徒らに俯して其信を祈るのみ、既にして「そら見えんぜ」の聲は如何に吾曹を驚かしめし、或は見え、或は隠れ、一喜一憂交々至るの後、此叫聲は遂に眞となりぬ、見れば二人の勇士、高く松火を擁して前にあり、農夫一人藁束を荷んで、其後に扈し來る、之を見し一行の喜悅は抑も如何なりしぞ、欣舞雀躍二氏の功勞を謝し、一行の萬福を稱す即時携へし所の藁を焚きて暖を取る火光一閃衆皆、顔色蒼白、土の如し、相見て愕然、於是農夫に従て行く、此時や實に身に着せし者一として濡れざるなくゾボンズボンは落ち、脚半は脱し、草靴は泥中に葬られ、稜々たる寒風は顔足の嫌なく、吹きまくりて劈くが如く、手足凍憂、潰然摺木に似たり、而して田畔は泥滓を止

めて糊の如く、左倒、右轉蹠跟として、醉人の如く、蹠蹠として啞者の如し、小徑を傳ひ、小河を渡り、橋を起え、氣息奄々、將に困倒せんとする頃、始めて一村に達す、之れ實に河北郡才田村とは後にて知られたり、則ち鬪を排して農夫の家に入り、柴草枯木を焚き、暖を取り初めて生色あり、更に飯を命じ、羹を作り、以て空腹を滿たす、美得て謂ふべからず衆皆健啖鯨吸能く斗米を盡し、汗數鍋を傾けて猶平然、衆相顧みて阿然、時實零時、徐ろに過去を想へば茫乎として夢の如く、一時間前迄は啞者の如かりき一團は、今や悪口雜言口を衝て出づるも可笑けれ……只見る井爐の邊、柴火焰々たる處、襪襪を纏ふ者、片布を懸くる者、破蓑を被ふる者、或は衣裂けて纒絡の如く、或は拭布垢きて古禪の如し、阿然として笑ひ、洪然として嗤はるは、廉く見ても、乞食一派の集合としか見えざりき、今に於て之を思ふ、甚だ奇なるが如しと雖ども、當時非常の饑寒に遭ひし、身には無上の珍物たりしなり、着るに一物なく、寝るに一衣なしと雖ども、夫婦が眠を犯し、寒を堪えて待遇せられたる親切は、吾曹豈に謹で奉謝せざらんや、既にして夜は益々更けて鷄鳴曉を告げ、朝來の疲憊亦一時に襲來せりと雖ども、寒夢成り難きを如何せん、則ち終宵爐頭に安坐し、寒鴉宿を出で、霜氣人に逼る頃、夢僅かに成る、醒むれば則三月一日、雪霜僅に地に積で蒼穹青きと藍の如く、旭日瞳々東山の霞を破て出づ、壯快得て謂ふ可からず、則ち空囊を探り大札二枚を禮謝して去る、屋前江あり、即ち巖して下る、舟湖に入る處、數十の漁船隊をなし、一隊は悠然煙を吸ひつゝ網を下し、一隊は舳を敲て歌ふ、吾子其狂にあらざるやを疑ふ、漁父曰ふ之鮒を漁するなり、と吾輩其奇に驚く、既にして舟を轉じ

て昨夜遭難の地に至る、襪折れ、船外れたる處、一團の燼灰、微かに昨夜の苦境を残す吾子觀て悚然たる者、之を久うす、既にして輕舸一番權して出づれば、乾坤清爽、小波起らず快走飛ぶが如し、吾子頻りに其景の美を説て止まず、指て曰く北方青松白沙遠く連なる所、蓬焉たる白煙村腰を掠めて縷の如き者は根布附近にあらざや、東方千山突兀たるの處、遙に雲霧杳靄の中に一峰巍峩たるは越の立岳にあらざや、其他蘆汀に打上げられたる白魚を拾ふの小童、漣波碧水の裏欣然として遊ぶの白鷗、往く舟來る帆、一として美ならざるなし、と、獨り放然舳を敲て吟ず、衆亦陶然として樂む、快帆迅馳時餘にして、能州宇の氣に着し、晝食午後一時出發歸航の途に就く、快權數十本少しく勞せば則ち航を止め、艇を清波の行るに任して、餌を舐る、亦一興、或は漁舟と競漕し或はサイドレースを行ひ、昨夜の難所を横に眺めつゝ、悠然として漕ぎ、午後五時大野艇繫場に安着し、一同其無事を賀し、暮靄春霞を踏んで七時頃金城に着し、直に牛店に入つて昨來の勞を慰す、終て出づれば鷺毛續紛として滿街爲めに白し、

松原神社に詣て、

不 眠 坊

敦賀の地、江山秀麗にして翠黛幾重々、天風白浪を翻し松蔭水よりも冷かに、港西一帶、白砂銀の如く青松之を點綴して、千濤萬波、去來徐に颯々の天籟を吹奏する畔、墓碑纍々、寂然沙磧の墟に立つもの之を松原神社となす。實に慶應の初、水戸藩士武田伊賀守藤田小四郎等四百の志士が、幾多大望の恨を吞んで、斷頭場裡秋霜一片の冷烟と化したる白骨を埋むるの墳なり。

廿八年の暑假、吾平安の山川に放浪し、途敦賀に泊して、親く其墓に謁するを得たり、時恰も早曉、赤鳥漸く扶桑を出て、層巒連嶂の頂に昇り、霞光山水を映じて鮮紅一段の美明を加ふ。見渡せば、一葉の白帆幽に煙霞緜漫の間に見え隠れたる、金ヶ崎城趾の近く懸崖に聳えて、智畧一世の英雄が榮枯の夢を啣ち顔なる、遠山遙峰、平砂曲岸の光景、兩つ乍ら冽肅の情に堪えたり、余れ嚮導に伴はれつ、露草萋々たる砂徑を辿りて墓に抵り、徐に進て携ふる處の蜜花を手向け、瞑目墓頭に額つけば、油然身は當年の纏綿困厄の狀を憶起して、低頭沈吟愴然として俄に去るに忍びず、輒ち更に薜苔を洗ふて水を灑ぎ、吊向揮哭覺えず刻を移して起ちぬ。磴を降り柵を繞りて、旌功の豐碑を瞻睇し、海岸に沿ふて又一個の紀念碣を觀る。一は即ち有志其の精忠偉勳に感激し、官に請ふて威靈を祀り、永く赫々の功烈芳芬を千載に傳へんと欲するもの、雄渾の文、遒勁の書、有栖川故大將宮の篆額を俟て、潑々活躍し、人をし、益志士當年の峻節を想はしむると頗る切なり。他は即ち車駕北巡駐驛の砌、陛下深く其の丹心孤忠を愍み給ひ、祭資を賜ふて厥の禋祀を存するの紀念にして、海舟伯の七絶を刻し、優渥海の如き天恩を萬世に留むるの美舉なり。余れ彼の碑文を讀み、此の紀念の詩を誦し、顧て更に端然駢列せる墓表に對ひ、幾多殉難の領將從僕の名を佇視し來れば、惘然悽惋の心太だ迫り、俯仰懷古の情轉た深く、慨然として獨り感に堪えざらんとす。低徊多時、去て墓守を茅庵に叩き、血花硝烟の間、躍て敵營を斫り塞壘を屠りし戦鬪より、圜圍楚囚の酷遇慘况を聽取するに及んでは、悚々惻然同情の涙、潜々險蓋を傳ふて落つるを禁ずる能はざりき。庵主怪み問ふ、君夫れ或は水戸人士に非らざる無きか、對て曰く然

り翁媯然微笑、禿顛を撫し謂ふ、君の國音郷語燎々炳焉として終に蔽ふ可らずと、慇懃坐を分て、一椀の苦茗を薦め、猶務めて休憩を緩ふせんとを乞ふ。折しも涼笛啾々、嘯然山峽に響きて發車急なるに促され、餘情纏綿、蹣跚の裡に強て割愛すれば、車夫の疾駛兔の如く、轉眄一顧の猶豫もなく、駸々として吾を停車場に驅る。纏て鈴鳴鏘々、烟騰り車動き、瞬時驅は柳ヶ瀬の隧路を抜け、琵琶波白く風萬莖の稻田に戦ぐ長汀を駈せて、亭午平安城に入る。

吾郷に在るの日、是等志士が唱義割據の地たる筑波山に登りて、所謂其の陣營なるものを尋ね、又屢那珂港(死守の地)に遊んで、血戰奮闘の殘趾を探りし毎に、未だ嘗て怒浪澎湃たる北溟の濱に、斷烟石廟を籠む鬼火啾々の墳塋を吊慰せんと想はずんばあらず。偶甲午の秋、遠く書を載せて金城に驪客となり、一日博物館上、當時の裨將山國喜八郎の、莊嚴華麗なる戰袍佩刀の遺物を看、竊に懐へり、八郎は是れ精悍豪猛の武士、渠か此の華鎧を着し、此の霜刀を横へて銀鞍に跨り、雄風凜々、塵下を督して馬嘶一聲陣頭に馳突したるの日、信野尾濃の列藩は、如何許りか是の驍將の蹂躪を惶駭震慄したりしやを。爾來雪晨雨夕、無聊讀書に倦めば、恒に半白の遺老を歴訪して、其の實踐閱歷を敲聽し、又市井の雜話に歛耳して、裨益收獲する處あり、湧然として愈々吊墓の念を嵩めぬ。

嗚呼因縁遂に淺からず、孤杖飄然來りて茲に埋骨の域を履み、英魂を哭し、宿年の懷抱を陳ぶるを獲て、今や反て益々追想景慕の感慨を切ならしめぬ。嗟吁感や甚た切、然れども吾曹をして、揣摩牽強、徒に卿等か雄志宏圖を喟々するの愚を止めしめよ、多憂多涙、憤懣淋漓燃ゆるか如き一片の赤心熱誠は、直に之を歌聲詩吟に吐露して、朗々發揮さるゝ者あるを見ずや。看よ世は千代田城頭、三百年の祥雲紫霞に謳歌して、士民優遊花月に眠り、弓は囊裡に刀は篋底に、衣冠彝倫浪滅頽廢して、蠢々たる浮學虛文の徒、揚々爵祿に媚ひ、威權を弄するの時に當り、決死躍起、慨然として之を罵殺し、征馬戎軒、劔に杖つきて王室の式微を扶翼し奉り、狡虜碧奴の垂涎覬覦を掃蕩するの急なるを、喚醒したる是等志士の熱淚は、爛熳流露、濺いて遂に二十八字の韵となる、曰く、

畦、山、沃、血、汚、乘、輿。 禮、樂、衣、冠、拂、地、虛。 却、怪、經、學、文、章、士。 年、來、畢、竟、讀、何、書。

是れ伊賀守の吟、何ぞ其辭の痛楚激切にして、然かも當時の深痼世疾を道破するの甚だしきや、百載の下、是の詩を三唱し、猶奮然慨惋扼腕の想無くんばあらず、又、

憂、世、慨、時、真、無、用。 嘯、花、吟、月、反、有、情。 營、外、今、晨、人、若、問。 軍、將、醉、臥、未、全、醒。

詩は是れ實に、近古希世の俊傑藤田小四郎か、僅に十九春秋の紅顔を以て、筑波唱義の首領となり、三千の熊羆を操縦統帥して山頂に據り、防戦半歳、馳騁襲撃、連りに克を奏し、今や十萬の敵帥を睥睨して、勝算歴々、腥風砲雨の裡、陶然酒を被りて醉臥し、嘯花吟月、意氣軒昂方に斗牛を呑むの壯懷に非すや、律調固より未だ神韵に入らずと雖も、花は櫻の敷島武士か、馥郁たる香芬と旺勃たる慨世の熱血、蓋し見るべし。

あゝ憶ふ、卿等落々豪懷の士、國勢の非運に際會して、悲歌慷慨措く能はず。忠憤の激する處、凝て筑波山頭尊王攘夷の烽燧を漲らし、八州の野を塵動して、天下の士氣を鼓舞振勵せしか、時

利ならず馳逝かす。宿志蹉跎し、積謀跌躓し、遺憾、罪を闕下に待たんと欲して、死士八百遠く、郷藩を脱し、孤軍長驅、轉戦百里、風に臥し雪に凍え、刀折れ糧竭き勢窮りて、出て、加州の轅門に降りしを、悲惨痛恨、終に無冤の白刃に斃れ、軀は忠義の鬼と成て骨を北溟の砂礫に曝らしたるもの、豈に至悲斷腸の最後に非ずとせんや。雖然古より志士多く蓬蒿に困み世と遇はず、英雄の末路甚た崎嶇慘憺を極めて、打雨晚風恨み長へに盡きざるもの比々皆然り、焉んぞ獨り之を卿等の孤操に悲まん。それ卿等、功名場裏巋然風に抽んで、維新風雲の先鞭を擧げ、身を抛て先づ國難に殉し、徐に奏功を後人に俟ちしもの、事遂げず雄志酬ひすして、刑辟に就くも固より其志なり。然るを矧んや、其英風を欽慕し其宏圖を繼紹するの士、彬々輩出し、雲蒸龍騰、雨を呼び雲を起し、縱横畫策善く中興の鴻業を濟して、世潮茲に革新し、風物頓に霽收して、天日麗麗皇基盛徳、萬古英嶽の皓雪と俱に渝らざるに臻れる、一に皆卿等献身の盡瘁鼓動に出てしを想へば、冷骨鬼魂、それ應に快く千年の長眠を靖んずるに足るものあらん。矧んや又、祠を營み靈を祭り、永く峻節を彰表せらるゝに、聖恩無窮、惠風更に黃旅の枯骨に及び、廿五年伊賀守以下四將に正四位を追贈して、悉く靖國神社に合祀し賜ふの至榮至典ありしに於てをや。嗟呼此の餘榮冥福を荷ふ、卿等若し靈あらば、須らく地下に感泣せよ、卿等若し靈あらば、願くは神と成りて王宸を庇護せよ。

あゝ、首を回らせは、如今東亞の形勢日に黯黯、鞅鞅の野、渤海の灣、鷲影參差月は黒く風悲み、壯士逆髮眦を決し氷刀を撫して易水を賦するの秋、知らず、遊魂漠々いま猶九泉に彷徨ふか、抑も亦九天に翔翺するや否や。

籠 庵 記

湘 浦 庵 殘 雪

杜鵑一聲山くれて壁の乾われの風白く、夜嵐に散り敷く花吹雪、木下蔭に宿かりつゝ、斷雲をもちて天照る月影を、百億を超えて端坐瞑目ふかく三昧に入り一の如意珠を解せば、こゝに初めて天地萬有の極致に魂神遊はん、我心既に盈欠開落の境を出て、別に月花のうつろひを觀じなは、一切の聖賢衆生は唯是大千沙界の電拂と閃めき、美人は悉皆これ髑髏、社會はこれ小器の俗兒が自作せる自縛の牢獄、大人といふも局量、英雄と唱ふも小兒、喜歡といふも悲哀を隠す蔽巾、誠義といふも血惡を包む殼皮、なんの／＼浮世は一旅舎に異らずと、一朝頓悟の蒼迂に立て昨の吾を顧盼は、胸腔は垢芥の捨所、吾は塵埃に泥みたる一個の醜鬼のみ、清淨りしと思ひしも昨日の非事、邪險と考へしも今日の善事、苦に苦みて内に沈靜し、悶に悶へて外に融化し、僅に解脱の一路を辿り、浮世はこれ火に焼け水に溶け去るも、此身悲惨絶望の極に沈淪するも、よしや虚無恬淡の淵に眠るとも、豁然として物界の區々を看破し、陶然として幽に人世を微笑は、雜翳なく密邃幽鬱の栴檀林中に蟄む王大蟲ならなくも、一切の眞理は吾腦中に雷顛を結んで、玉璞の如く亦金粒の如けん、想へは／＼「寒鴉枯梢に息ふところを寒月麗々と照すか如き此人世の戀愛は、世を通るゝ程愈、俗に近つき、世を厭ふ丈益、天を樂む、現世は必竟迷也惑也溺也、人世の幽玄道を知らんと欲せば、須らく人世皮肉の虱蚤となる勿れ、虱蚤は到底垢の子なり名利の奴隸たら

ずんはあらず。」と叫びし人は實に現世の道理を辨別へし漢なり、

开もやそも、月の虧くる處白骨紅顔を嘲り、花の落つる處英雄墳墓と戦ふ、洞底暗き處清彩の藏かれて明珠長へに滄溟の海に老ゆるもの幾千ぞ、貧寒徒らに天火の炎々を抱きて靈質空しく無聞の地に埋るゝもの幾何ぞ、茄子の蔓に胡瓜は果らずとも、人に貴賤上下の種粒あるべきや、と眦裂いて朱門白壁眺みつめ、丁と角鏢たゝいて鏘々と腕鳴せし元祿姿の六方付もあるめれど、まこと榮枯や盛衰や、共に之れ初産終焉を及互る漣波の波臺波谷に過ぎずして、クリンピヤ山上に焔ゆる無限の燈火に照しては、春宵野邊にもえたつ果敢き陽炎に髣髴たるかな、六百年の壽を誇りし彭祖も八百歳の長を慢りし東方朔も、メサセラ千歳の長夢醒め果てなは、共に無限の火花のみ、げにや生死も如露如電、不老不死の仙丹を探ねて西王母の桃に渴くは、五慾六塵、煩惱愛憎に驅らるゝ白痴の浮氣姿ぞ、七十二の僞塚に果敢き現世の味氣なき狀を頼み諏訪の湖に吾面影を止めんと迷狂ひし孟徳信玄が爲業は、吾が千萬年の賜物を知らずして人世五十年と喘息つき、無形といふ安樂椅子に終生を満足し難く、姿てふ母懷にひたすら安眠せんとを望む姿の兒の好模範なり、旅寓一夜の幻現を百年に保續せんとする愚物奴らは、姿に姿の致、偶像に偶像の妙、肉慾に肉慾の韻あり、妄執の炎燃えては一片の木のはし一塊の石きれもなとか執着の面影刻みどめざらんやと唱ふるれど、北邙山下骨に魂よぶ茶毘一縷の白煙、榮枯は來りて雲と消えん、盛衰は去りて霞と散るらん、實に實に浮世三界ながむれは、天使どほのめかす大聖の情淵に半百の粹の魂膽まします深く、人間百事煩惱と極めこむ御祖師の杖鞭をつれなしと恨む惡魔の住家なり、秋風に尾

羽うちからしつゝ、招く瘦細のすゝきを見て郁靄の春野の花にうかれんと思ふは汝惡魔の情ぞや、寒月泥地に冴えてはちすの骸骨を照すを哀かり清き蓮華の露を風にはぢく音を忍ふは汝惡魔の涙ぞや、榮枯も盛衰も汝が所爲ならずや、乾坤も汝の一吞に任せん、運命も汝の一嘔に委ねん、はては生死の權をも汝の足下に捧げん、汝の百竅に潜む惡魔羅刹跳り出で滿山の花下に打ち集ひ、而して人生腹裏の自然劇を演ぜよ、吾は黙して其を聞かん聾して其を眺めん、汝等劇を演じて快の快最快、嬉の嬉最嬉の頂に至れ、吾は高野の荒瀑に難業苦行つみし文覺上人、俗遠藤ならなくも、樹陰一莖の花、戀の姿をよそふて天光に微笑む現身や、「あはやいみじき女神のかちどきに、枯梢の一蕾純美を全ふして三煩惱一時に粉碎され、天美は終に三大悲泣を放つて五慾六塵を拂ひ、三佛徒を興して舞臺を閉つる」、の奇を見はせし神機妙變の發露刀だに得は、汝等を靈魂の清水に浴びさしめん、

然なり然なり、人世は天地に飄ふ浮鴻の如し、萬里浩蕩いづくに行いてか其形軀を容るべき餘地なからんやは、俗情の魔界に墮落し世情に絆されて心を名利浮沈の境に置かんより、むしろ歸らんかな、孤笛に宇宙を吟みつゝ、一笠に六合を包みつゝ、かの限なき天地に歸らんかな、歸りて無言の雄辯家と宇宙を説かんか、歸りて無吟の詩人と天地を歌はんか、茶煙松風安らけく永年流浪の軀骨を慰めんか、靈魂の幻影は纖手もて我の勞を慰めん、靈魂より湧出する清水に我は浴して廿年の創傷を癒さん、善哉々々、吾の悟脱、一笠一蓑孤劍啾々の旅姿、名のみは立派に都と稱ふれど其實濁流滲々たる城下を后踵に蹴つて、南鏡一片飛はしたり飛はしたりとは全盛姿

の昔の夢、これも醒めはて日中弊裘きて歸る一個老窮措大が廿年の枯骨を投げし湘水の庵、月下湖上に釣をたる時、七輪をあをいで水を汲み茶を煮、酒に驚ける惟然の風狂吾にありて月に嘯ける丈艸の姿吾になし、小波潺々とさわる船舷に叩いて臚々と聞ゆる村童の笛音も、赤壁に歌ひし坡翁が風流忍はれてライオン河畔の草露を思ふ、さては十五年の筆折りくべて無言のコメディーを作らんとす、湘水の眺瀟湘五湖に恥ぢずと傳ふも、其をたのしむ其人にあらざれば、足を滄浪にふみはづさん許りの覺束なき風流に嬉む似道厭、方丈の室に一炷の香煙吾が面影を臚々につゝめど、細くすねたる禪心に大空一輪の月を洗はんとするホーリーは蓮胤が觀念堂、門口に五株の柳植ゑてながめん吾ならず、僅に草堂の破壁より首さし出し、一輪の名月を仰いて木魚の鑿音に、國破れし古き山河の姿には花にも涙を濺ぎ、城春にして草木の荒るゝに別を惜みて空しく鳥にも心を驚かす、杜子の情の優なるを慕ふ外道の糟粕、われ殘雪は、峨々たるシホン山下に寥乎と佇み、溶々たるシロアの流を汲んでシナイオレツアの詩神を呼び起したる、失樂園の作家詩人にあらぬど、アルピオン島裡琴を抱いて、エオリヤの詩聖を吊ひ高く天外の偉音を求めし、ケムブリッチの詩隱は、吾の好んで擬する所なり、あな後生恐しや吾身の罪業深さ、せめて三年籠庵の由來を記し現世の賢者徒に誹り諍られ笑ひ嘲られん、外道に狂ひし昨の吾が非事よ、死馬の骨五百金、さらは外道の生魂幾金ぞ、愁風萬里天高く恨泣千涙情熱し、玉兔は大空に榮めきながら暗夜の曉は鴉の聲に明け渡りぬ、鬼の火は消えて三年の迷狂は鎮まれり、惡夢は良心の叫聲によりて破れ冷汗滿身に溢れたり、吁鬼火は盡きて星光は道に映れり、斯くして吾は再び現世のものなり。

夏 を 迎 ふ

奮 庸 生

見渡せば、爛熳飄飄たる一簇の香雲、きのふは蟬鬢蛾眉、春に堪えざる美人の寵賛を擅にし、けふは新緑蓊蔚、蠢々たる滿梢の毛蟲、逆迄として獨り匍匐するに任せり。有爲轉變、柳條にこぼれし九春の景物も、可憐、雨に妬まれ風に碎け、空く落花流水の情けをとめて逝き、山吹の黄葩芽々たる、牡丹の豊姿嬌艶なる、杜若の鮮妍婀娜たる、あはれ又、殘紅零紫の嘆きに葬られ去りて、杜鵑血に啼き盡し、簷滴絲の如く烟ぶり、螢火點々、ゆるく江を渡りて終に夏來りぬ。夏や來にける、余れは、瓊天瓊地、瓊簾をかゝげて、瓊峯を眺むる冬よりも、悽風悽雨、悽月を仰いて、轉た悽腸を絞らしむる秋よりも。はた、花晨花夕、花樓に上りて、花景を賞する春よりも、むしろ好んで、赫々たる酷炎、焚くか如く煮るか如き夏を驩迎する者なり。

それ、蝸蟬聲やみ、紅霞落暉を送りて、蟬蟻皎々嶺上に躍れば、松影娑婆として前庭に落ち、飛泉淙々、蘇滑かなるの處、偃如清榻に臥し、月を迎へて、夜涼を團扇に納る、これ夏夕の至樂なり。連山雲を吐き奇峯を操りて、篠雨冥々、霹靂般々、まばらくにして雲は霽れ雨歇み、七色の光彩燦々燦然として、東天に顯はるをみる。この時や、山遠く翠深く、嚴蒼く氣澄み、涼風一陣颯々衣を透ふして、塵意とみに滌灑し、淨然として身は神境に登るの想あらしむ。これ夏天の至快なり。或は曉星數點、熒々として曙色未だ動かざるの朝、爽起步して、籬落露に媚ぶるの朝顔をながめ、坵中玉を捧ぐるの荷葉を攢し、或はまた、蛙鳴噪調を鼓し、疑の蘆花に入るの畔、一竿の風月、舟は軽く綸緩るく、超然として、「萬事無心一釣竿、三公不換此江山」を吟する風韻

閑雅の如き、或は暑を山幽水紫の靈壤に避け、蒼波浩渺の海泉に浴する高遠優逸の如き。これ悉皆な世人が採て以て、消夏養神の好娛樂好遊逸となし、泛々として此の娛樂を懐ひ、此の遊遊を趁ふものに非すや。然り、然れども是等の優逸風韻閑雅は、未だ以て吾曹か夏を歓迎する所以の最大標目に數ふ能はざる者となす。

言ふまでもなく、吾曹同學は、皆絶大の冀望を抱きて、茫洋千里、香舟の鱗潜み、掀海の龍蟠する學海を航するもの。前途迢々、彼岸の遼遠なる固より覺悟する所にして。克己精勵、能く幾多の崢嶸たる嶮坂腸路と、失膽跣の危巢を攀つるの軀なり。されば、嬋たる春の花、玲たる秋の月、體たる冬の雪、みな優々怡然吟眸を弄するの餘裕を許さずれど、唯獨り嬋々たる夏天の薰風に臻りては、豁然滿懷の想紐を發して、十二分の行樂を獨占するを妨げざる者なり、茲に於てか眞個七旬の校暇存す、嗜七旬の校暇、吾曹か汲々砢々、研鑽琢磨の克捷を收め、雄健なる豊驅と榮譽ある學蹟を荷ふて、欣然郷に歸るは、征清の軍人か、燦爛たる金鷄勳章を輝かして、凱歌場裏揚々濶歩國に入るよりもうれしき。

夏來りて試験來る、ついで來る者は休暇と歸省と旅行、あゝ休暇と歸省と旅行、天下の愉快何物か之に如んや。看よ、映雪聚螢、焚膏繼晷の切磋を積み、あらゆる智囊腦漿を傾盡して、縱横馳騁したる學年試考終れば、忽にして輕褌短裳、旅裝の簡易なる。一杖の洋傘、一提の行李。君は關西へ僕は東國へ、去らば！秋涼墟に入り、梧葉梢上秋を報するの日は、又恙なく金城に、君去らば！……。嫣然靄然手を握りて埠頭に別れ、黒烟一抹、船は搖々南天を望んで駛せ、鐵車一轉響

き轟々北路を指して歸る。遊子這般裡の歸心、獲て語る可らず筆す可らざるものあり。かくて夢は幾度か旅魂を載せて故關を逍遙し、郷景鄉音、恍然想望に浮ぶもの連夜にして、終に恙なく家衝につけば、弟妹歡びて門に待ち、慈母莞て堂に迎ふ、相顧みてまづ嬉々欣々、洋々たる團樂の和氣、宛然春暖かに鳥歌ひ蝶舞ふ。遊子這般裡の愉悅、獲て語る可らず筆す可らざるものあり。既に歸りて姻戚知家に伺候し、東遊西笑、會心の盟友を歴訪して、疎を謝し舊を語り新を談すれば、友情脈々又融々として、漆の如く海の如し。やがて一簣一笠、飄然柴扉を出て、野外の月溪上の風に長嘯し、松露隕つるところ、臂を曲けて眠り、涓泉洩るゝほとり、掬して以て渴を醫す。遊子這般裡の行樂、獲て語る可らず筆す可らざるものあり。此の如きものは、即ち吾曹が翹首夏をまち、贊々として是を離迎する所以の一なり。

あゝ夏來る、綠樹蔚々、江山颯々、讀書聞くべく、舊交語るべく、奉養致すべく、鐵脚須らく跛すべく、軀幹須らく鍛ふべし。誰か炎帝の柱駕に辟易し、追々として猥りに惰眠耐睡を貪り、嚙昏僅に蝙蝠の如く爬行して、「樂みは夕顏棚」の裏韻卑調を漁らんとする者ぞ。宜く振衣一番、孤杖孤鞋白雲の奥區を跋渉し、曠漠の森野を穿踏して、浩然の氣を養ひ稜々の筋骨を練り。時に沛然驟雨一過すれば、「孤鞍衝雨叩茅茨」く可く、而て又、

急かすば濡れざらましを旅人の、あどより晴るゝ野路のむらさめ 太田道灌
を謠ふの風懷なかる可らず、あゝ謠ふの風懷なかる可らず。敢て迎夏の辭を綴る。

文苑

暮春

長谷川福平

皆人のをしむをよそにあつさ弓心つよくも暮るゝ春哉

首夏月

みつ枝さす木ぬれの露に宿るなり月も霞の衣かへして、

卯花

腹黒の人に見よとや卯の花は雪より清く咲き匂ふらん、

花の下を篋こき行く形に

草野正義

篋士かひまなく棹をさすかにも心うかるゝ花さかり哉、

實盛公家を経て義貞公を祭れる神社に詣づ

よしまげ

いにしへを篠原とほく過りきてまた袖ぬらす藤島の里、

首夏風

木かこれ生

芳野山青葉も春の行き暮れて花の跡とふ風そまづにき、

待子規

子規きかまほしさにまどろまで待ては今宵も有明月、

聞子規

山彦のもらす許りを情にて行衛を見せぬほどゝきす哉、

夏月

五月雨の晴間もりくる月影に光こほるゝ木かくれの宿、

葛蒲

さみたれにうみはつ軒のあやめ草車もかほる蓬生の宿、

水邊夏月

夕風に浪こす池の蓮葉をきよきうてなどやどる月かな、

蓮

蓮葉の濁りにままぬ心より置きぬる露も玉と見えけん、

軒の雫

淡翠 迂人

胡蝶のやどり(一)

あたりし暗くなるまゝに

かすめる森のかなたより

白くぬひゆくいさゝがは

春の日かげはくれそめて

ながるゝ水のあざやかに

うすき光りのゆらめきつ

きよき聲もてうたふなり

ひろけき野邊にかくろひぬ

なよゝ風のかくなべに

けがしき塵もまづまりて
みどりのうへに露しけば

あはれ胡蝶のいかにして
いづこに宿やもどむらむ

ふまれし葉をばもたけつゝ
すみれの花もにほふなり

かよわき蝶のやどりにほ

このうるはしき春の野邊

きよき小川のうたそへつ

このまづかなる春の夕べ

すみれの花のどこをしも

ひら／＼ひらと蝶てふの

ミューズの神は撰みてむ

風にゆられてまひこしが

やがて胡蝶のひら／＼と

ひく／＼まひてはまた高く

たゆたひつゝも止りしが

羽おもたげの風情なり

花よりはなにあくがれし

鳥はぬぐらへかへりゆき

あのが疲れにすや／＼と

樵夫も家にもものしつゝ

ゆかしき夢やむすぶらむ

ひと日の疲れやすめむと

今はねむりにいるものを

よろずの者はおしなべて

山はかすみにつゝまれて

かくてやすけく眠りつゝ

花さへどぢてねむれるを

匂ふあさ日にさむるまで

われらが神はまもるなり

さそはるゝ 無常の風に

みそらの星ともろとも

はなの散る 春の夕ぐれ

まづかに夜をばたもちつゝ

果敢なくも 烟のぼるは

山寺(二)

さどびどの 野邊送りかも

谷ふかき

みやまの奥に

まら雲の

松すきがくれ

ふりにける

やま寺たてり

ふもとには

たに水ながれ

いとひろき

野邊につゝきぬ

春くれば

水ゆるやかに

草もえて

桃のはな咲き

野原には

牛のこゑして

うた謠ふ

里のわらべは

さゝめきつ

こゝに集ひぬ

まづみたる

鐘の聲して

わらべらに

かくは教へつ

足びきの

やま寺まもり

松かぜに

塵の世をけさ

静かにも

閑伽の水くみ

里びとを

めぐしむ僧は

あしかびの
きしねかし
かの墓に

やよわかごらよ
つねにたはるゝ
なもゆくものを
なれは知らずや

いま笑ふ
なが上に
うたはるものを

琵琶の曲

此篇獨乙「ホルン」氏原著「ツロイ、ガイグル」を假りに我國の事實として譯述せるもの讀者幸に諒せよ。

雪かどまがふ卵の花の
今を盛りと咲き揃ふ
古き都の跡訪ひて
男女の別ちなく
大路せましと浮れ行く
かくも賑はふ其が中に
盲目の親の手を引きて
背に叫べる赤子あり
維新の風に吹きそめて
珠の運びの覺束な
一二度ならず度毎に

残り少なになり行きて
日は明かに蝴蝶舞ひ
春日の森にきて見れば
老も若きも我一と
其樂しさの狀態は
神の惠のこゝ計り
情を請へるわらべあり
されど哀はこれのみか
腰の朱鞘の色變り
多くもあらぬ貯蓄を
いすかの嘴と喰違ひ

紅を欺く杜鵑花
風は靜に塵立たず
今日は神社の祭とて
きぬを着飾り打連れて
何に譬へん様もなし
薄きは最もいぶかしや
瘦せ衰へし袖乞ひの
彼處に坐せる翁あり「(二)
慣れぬ手にもつ算盤の
貢ぎてなせし商賣も
負債の山のみいや高く

小武横行

貧苦の淵に身を沈め
たよるべき子もあらばこそ
昔習ひし琵琶琴の
拙き業に身をゆだね

うかむ瀬とてもなさけなや
氣のみあせれど老の身の
あるにまかせて其を取りつ
哀れ昔の武士も

妻は早くも身まかりて
からき浮世を渡りかね
遊びがてらに覺えてし
星の遷りに遅れては
耻をも外見も打捨て、

露の命をつなぎけり「(二)

「琵琶の翁」と呼びなされ

霜を戴くかの頭
思ふ計りにつぎはへる
眼に入りて何どてかは
力を限り琵琶弾きて

よしや調への拙くも
木もて作れるかれの足
彼の衣の何どてかは
情の心惹かざらん
聲を張り上げ歌ひける
主の片側にうづくまり
洩さず受けんと構へたり
又かしましく罵りつ
たえてあらぬぞあはれなる「(三)

人の翁を見てん時
つれれの錦かくもやど
人の眼に入らざらん
翁はかくも思ひてや
かねて馴せし黒犬の
口に古びし帽をかみ
されど往き來ふ人々は
藥を聽かんとする者も

「熊」呼べるはいじらしく
道行く人の惠をば
互に笑ひさいめきつ
翁を顧んとする人も
つどひ遊べる人々も
金も帽子に落ちばこそ

望の糸も今は、や
暗ふなり行く胸の中
折から一聲音高く
我小屋さして走るなり〔四〕

されど此時はや永く
樹蔭に身をば隠しつゝ
視るとは知るや知らずてや
頭をたれて息をつき

飲むは無情の土なるぞ〔五〕
すぎし昔の武勳の
やうく三つを残すのみ
樹蔭にありし彼君は

翁の側に投げ遣れり
脚下近く轉び落つ
言はんとすれどせきあへぬ
君は翁を押し止め

我れ試みに弾かんとて

失せんとすなる夕日影
翁は深くかなしみに
角笛森をつらぬきて

なりも姿もいと高き
深き情のおももちに
翁は琵琶を取り下し
見せじとすれど眼に結ぶ

紀念は獨り足のみか
翁は不具の其手もて
耐でや忽ち馳せ來り
斷て見ざりし山吹の

翁は夢かと驚きつ
涙に袖をぬらしつゝ
語り曰へらく汝の琵琶
翁の琵琶をかり取りぬ〔六〕

照る西山の漸々に
沈み迷ふも道理や
牡鹿牝鹿のこゝかしこ

一人の君の程近く
翁のふりを心して
疲れし腕を組み合せ
露の車の二つ三つ

琵琶弾く右手の指も亦
密に涙打拂う
囊搜りて金出し
花の一ひら散り來り

又喜びつ跪つき
仰きかねてぞ伏し拜む
暫し我手にかせよかし

あな此君のいぶかしや
ひくや秘曲の撥のおど
つれて歌へる其聲は
梢まらぶる夕風も
鳥のむれく聲なくて

歩を留め佇みて
黄昏時もはやすぎて
高峯の松の影長く
君の命にかしこみて

聽者の上にさし出せり
持つ手も重くなりければ
空の帽子を捧げたり
年頃なせる身の業を

こゝろゆくらんほゝ笑みて
糸の音強く響く時
光りにかみも鳴り出で、
碎く白浪凄しく

天の使か神の子か
世にも妙なる音色して
いと朗らかに高くして
まばし息をや止むらん
翁は獨りあきれ居る

心を樂に奪れつ
三笠の山に出る月の
餘音を傳へ鳴り過る〔七〕
翁はやがて我犬の
忽ち黄金白金の

翁は布を打廣げ
「熊は何をか唸るなる
取り去られしを怒りてか
いや勵みつゝ奏つなり
よそ吹く風は早や嵐

雨うちしきる程もなく
魂も消入る心地なり

手にとりあくる四ツの緒を
春日の森に澄み渡り
遠く雲井に響くゆり
ぬぐらに友を誘ふなる
道行く人も何時となく
吾を忘れて聞く程に
牙を渡りたる夏の夜に

口より帽子取り上げつ
財貨なからは中に山をなし
移し變へては二度三度
主の笑顔を祝ひてか

琵琶弾く君は其様に
忽ち聲は高まりて
くもるみ空に稻妻の
荒くもよする荒磯に
忽ち音は静まりて

五十七

餘韻に淡くはた低く
澄み行く音にも通ふあり(八)

夢か現か吾あらず
狂ひ叫びて譽めたふ
此時君は琵琶下し
人の垣間をかいくもり
つとふ者共前見れば
群れの人々怪みて
翁も知らでありけるを
君は都に名も高き
居ますと聞けど今日までは
見るにつけても思はるゝ
琴の音色もくさくさに
げに有りがたき事にこそ
翁のために恵まばや
或は羽織をぬき捨てゝ
森の大路を彼方へと

岩間をくゞる溪水の

山なす人は帽を擧げ
聲は一時に裂け破れ
言葉をかはず間もあらず
森の彼方へ消え失せぬ
こはそも如何に君なくて
彼の君そもや何人と
片側の一人進み出で
「琵琶の法師」にあるぞかし
妙の調も聴ざりき
貴き御身厭ひなく
夜露おきそふ木の蔭の
足らぬ吾等も彼の君の
聲に應じて人々は
我劣らじと投げ與へ
歩み去れるを見送りて

玉なす砂打洗ひ

帽なき人は手を打ちつ
天地もゆるぐ計りなり
翁に軽くうなづきて
漸々鳴りも静まりて
翁の琵琶をもちて立つ
問ふ聲いとも囁し
我語らんと呼へたり(九)
いぬる月より此奈良に
此處に計らずかの君を
翁の哀れ助けんと
人に知らさぬ御恵は
徳にならひて今一度
囊の底を打拂ひ
月影白き一筋の
翁は萬感胸に満ち

うれし涙にかきくれつ
時は漸々更け行きて
翁はやをら立ち上り
背に負ひつゝ「熊」をつれ
あやしの鳥の木の間より

物をも云はず伏し沈む
森のかしこに妻戀ふる
積み重ねたるみ財寶の
賤が伏屋をたどり行く
叫ぶ一聲もの凄く

まだ宵ながらみじか夜の
鹿の鳴く音も微なり
手にあまるをも辛じて
やしらの燈火臙げに
東大寺鐘音高し(十)

(終)

俳句 春季雑詠

銀鞍に花かさしたり春の月 弄 界
むら解の雪や菜畑のなかな短 鳥 溪
春雨や衛兵劔をぬいて立つ 横 行
風雲や麻かゝりたる五本松 蕉 雨

夏季雑詠

短夜を木曾路の奥に明し鳥 不動郎
杜若亞の字の池に咲にけり 臥 松

鬼の住む戸隠山の若葉かな 豆男
 若葉せり稻荷の崖の一軒家 球江
 夕焼や若葉の向に海見ゆる 長風
 夕焼や若葉の上の天主閣 吐虹
 見上れば淺間火を吐く若葉哉 秋竹

送鷺津文豹赴任岩手縣序

村上 函 峯

文豹者。吾先師毅堂鷺津先生之子也。嘗與講易於先師之側。先師曰。易三才之道備矣。人之處世。推其吉凶之數。明變通亨屯之理。足以臨時應物矣。汝等曉之庶乎其不差矣。於是講究累月。頗有所得。去年十月。先師見背。越一年服訖。文豹乃應辟岩手縣。來告余曰。我將羈官千里。子其何以贖我。余曰。嘗與子受易於先師。請贈以易說。夫吉凶之數。亨屯之理。備於剝復二卦。剝之六二曰。剝牀以辨。貞凶。說者曰。辨分隔上下者。牀之幹也。陰漸進而上。至於於辨。愈震於正也。蓋親喪者。人之大故也。文豹之遭大故。懷罔極之恨。豈非陰漸進而上。剝至於辨者乎。凡陰陽之數。剝不極則不復。故受剝以復。剝復之際。陰除而陽乘。吉凶之數。亨屯之理。所由見也。復之象曰。反復其道。七日來復。利有攸往。說者曰。陽之消。至七日而來復。文豹之羈官千里也。遭大故。剝其哀。欲以立志効力於國家。豈非陽消至七日而來復者乎。語曰。大不幸之後。必有最大幸。乃其羈官千里。安知不復有最大幸之兆乎。且夫

國家之隆替。亦莫不由於剝復。今國事多端。黨議紛如。雖未遑見雍熙之化。然推剝往復來之數。文明隆治之漸。殆在於此歟。士之欲成其所志。以効力於國家者。莫急於此時焉。文豹勉旃。聞知事島君。亦嘗與先師同道。公事之餘。試取易理而叩之。必有合于吾言。而益於文豹者矣。

雜祭說

荅 湖 浦 井 信

邦俗婦女。陳列偶人。獻酒供膳。以相嬉遊。謂之雜祭。其所由來者尙矣。或曰。濫觴於崇神之世。不知果然否。但朱雀之朝。已有此儀。而其定爲三月三日者。在土御門之時云。凡人世事物。豈盡適理供用者哉。古來習俗。其無弊害者。以爲禮爲儀固多矣。雜祭亦是耳。均之偶人也。漢土之作俑。孔聖疾之。以其啓害也。野見宿禰之作土偶。垂仁嘉之。以其除弊也。如雜祭。蓋無可無不可者。維新之後。五節之儀廢。其意蓋在除虛文褻禮。然而西歐事物。一意摸倣。不復問適否如何。雜祭雖小事。亦可以徵時世之變矣。丙申重三作此說。

謝人惠新茶贖

全

捧誦瑤函。時維清和。翠紅參差。想尊臺。撫景怡情。不減三春行樂也。賀賀。惠賜新茶。感佩何勝。弟性不好酒。一年有三百六十日之醒。而嗜茗飲。不可一日無此物也。坡仙所謂。汲黯之戀。寬饒之猛。粗辨其味。所賜者。宇治所製。實爲上乘。綠陰濃處。讀書漸倦。埴爐石銚。七椀輿來。乍覺兩腋生風。如飄々乎仙化去也。何賜若之。弟往年遊宇治。觀探茶。風景宛然。今猶在目。嘗

作一律。因錄奉教。客歲京師設博覽會。弟亦將一遊且問貴鄉。偶罹脚疾不果。曷勝遺憾。肅復。碧雲十里望何奇。吟屐探他舊宇治。鳳閣憑空思昔日。石橋無趾擗殘碑。番々歌曲隨行起。陣々薰風拂面吹。看遍清和探茶景。再遊期是撲螢時。

蝸牛子傳

高橋亨

蝸牛子不知始何名、以其爲蝸牛氏之族故、人呼之、亦自稱焉、其祖早見於天地混沌萬物化生時、綿々至于今日、不進化、不退轉別、爲一族、不與他交通、蠢々焉生息、或曰太古原人穴居之法、蝸牛氏之祖蓋教焉、蝸牛子生安永天明之間、生而頽然秃、性最懦而鈍、行步遲々、望之如反却、常愛山林草野沮洳、遭雨霽、則欣然出、求食里邑、其食不必鮮美、或不能獲穀、枯蔬菜根亦怡然食之冬夏一褐、不貯妻子、無有家屋、常從敝車一輛、日暮則輓入林翳、橫臥車中、或出遊見可恐者、蒼黃伏車中、屏息縮身、待其過、徐々擡頭、輒然嬉笑、若復不知嚮可恐者也、以是生、以是死、人皆輕之、無肯顧者、前後知己、唯有一蟪蛄子已、然蝸牛子、自以爲分、不敢求他也、人或罵其步行遲々不足共適、則笑曰、雖然如斯、所欲到處、則必達而已矣、或詰所以其無交友、食枯蔬衣、一褐、伏敝車、而自得者、則又仰天曰、我無能、不可與衆共事、我性怯懦、不能與衆馳騁、是人無益於我々損於衆目、力才強者、居高而住麗屋、肉食輕衣、力才劣者、居卑而踣踏茅屋、粗食羸衣、我之無力無才、不當住家屋、衣食穀帛也、其死也、無棺槨、入蔚林、臥敝車、與車腐朽、而無人之悲之吊之者、蝸牛子死、而其族益蕃滋、散處天下、皆繼述蝸牛子之所爲、人之遊山林者、

往々見其車之未朽、而蝸牛氏、則既已腐化不留枯骨云

高山子曰、語稱、滿招損、謙受益、乞兒煮菜莢葉、爲茶、炙蛤爲肴、而親子團欒、談笑自得、富家食前方丈、羅列美珍、而或以爲不足、蓋人慾無限、而物有不能盡得者也、故世之最大幸福者、不屬富貴之人、在知足之人也、嗚呼蝸牛子亦有見於此者邪、

北陸名勝誌序

垂東仙史

天地清淑之氣、粹然鍾於山水、其巍然高者、可以爽我氣、灑然長者、可以暢我氣、而雄偉奔放、波瀾動盪、粲然爲至文者、皆莫不可以養我氣焉、是古能文之士、所以放浪於山水也、今也山水清華之地、東奧之水、鎮西之山、遊履普乎天下、騷人韻士、或彰之紀文、詠之詩賦、所謂猿狖所宅、異物所宮、苟有幽遐瑰詭之觀者、悉爲所飲聞、而厭見、獨北陸之地、神皋隴區之所蘊蓄、峯巒之起伏也、雲烟之聚散也、波濤之噴激也、乾坤靜寂如太古、豈天作之、而地藏之、有所以遺後人者耶、古稱登高賦詩、可以爲大夫、夫大人君子胸包古今、志在濟物、及其登高山縱眺、臨大江專遊觀、俯仰感慨、不能自遏、發爲吟咏、以抒平生所蓄、則其材器志量、可由以見也已、友人隈川亦文章經學之士也、夙有四方之志、已彷彿京畿、西優遊天草之洋、東登覽富岳之巔、大養其文氣、今春更負箬、跋涉北陸七州之地、乃擲筆叙其所歷遊、哀然爲帙、徵予以序、凡其山水流峙觀、形便要害處、至通邑大都古刹叢祠、盡描寫其真、俾人如脚履而目擊、嗚呼如隈川豈非所謂其人乎、神靈若有心、必也掀髯而稱快矣、

論壬申亂

能戴子

天下之安危存亡。所由以繫者勢也。勢之所趨。汨々然如水流奔注。非人力所能支也。是以。依勢而從之者則盛。違勢而逆之者則衰。勢者以漸而變。以漸而成。非卒然而生。卒然而滅者也。唯智者及其將變而未成。逆爲之謀。以制馭之耳。勢之往當其初也。極微矣。唯其微。故人常怠之。及羽翼既成。爪牙既銳。不可復奈何之也。壬申亂之成。非成於成之日。而必有遠所由來者存焉。何也。曰。天智以弘文爲太政大臣是也。何以謂之乎。夫天智以皇極之所生。歷仕三朝。爲太子三十年。殲大奸於黼坐之下。登極之後。銳意謀治。革新政制。可謂勤矣。而天武以皇弟常任畫策。多所輔弼作謀。名聲隆望未必輒下焉。天下皆謂。今上百年之後。膺大寶者。其爲皇弟大海人。而天武亦如心許之者。及天智以大友爲太政大臣。天下皆曰。帝之意可以想見耳。夫太政大臣。雖位高。亦人臣也。天智必欲以大友爲儲貳。何必爲特以彼當之。蓋帝以其出卑腹。心有所憚也。或曰。天智之聰明。豈不知之哉。而其能爲之者。欲使皇子收攬天下之衆望也。甚哉說之惑也。孔子曰。名不正事不順。世有得權而失力者。有得力而失權者。與失宜矣。其予奪之者在我。之謂權。土地甲兵。擅擁使之者。之謂力。皇子大友時年猶壯。恃其多文藝。頗驕人。是以人不樂附。人心日乖離。權力頓失。而皇弟大海人。年將知命。經歷艱難。習熟世故。齒德共邵。衆望隆々。而盡歸之。勢之所決既明矣。及天智不豫。召皇弟托遺孤且讓位。天武固辭之。剃髮入吉野。弘文乃踐祚。無幾天智晏駕。物情騷然。而大勢之所決已久矣。宜哉。官軍叫囂於東西。鑿突於南北。轉戰不利。敗衄塗地也。雖然先使天智夙以皇子爲皇太子。輔之以二三老臣。告天下以其所志。天武雖則烈矣。無

復奈何。可惜哉。

月夜上美川橋

水石隱士

星少中月天色晴。彩華萬里攪吟情。江浮大舶千檣靜。水擁青山一帶明。春夜偏寒如雪夜。笛聲遙遞和潮聲。清光似此無人識。獨立橋頭到五更。

篠原雜詠四首

木曾意氣可禁當。一死元期劍鐵槍。老億羞他壯士侮。染成鬢髮向沙場。戰士如林旗捲雲。雄心欲掃帝都氛。西兵却是簪紳耳。爭敵源家旭日軍。喊聲四起萬雷轟。滿地塵雲失赤旌。首級洗來鮮白髮。帳中飛將勇魂驚。無限憂懷一曲歌。英雄何在夕陽多。丘陵莽蒼盡喬木。也遣行人喚奈何。

登旭嶺三首

巒坡行盡入嵯峨。鳥徑盤空躡躑多。雲護山腰偏窈窕。風迴谿壑幾逶迤。四邊巖壁翻人語。一道懸泉灑玉沱。徑欲洪崖肩一拍。上天有響笑阿々。遠度崎嶇凌斷鴻。日車方輒半空東。孤身三尺拔坤外。大海一泓歸掌中。噴起濛々洞龍霧。吹來颯々翼鵬風。誠堪憫笑人寰事。傀儡妄爭雌與雄。露濕衣袵覺峭寒。碧空咫尺上仙壇。群山蟻蛭看皆伏。溟海蠡杯吞可乾。舉手徑須捫皓日。乘雲何處駕青鸞。臨風長嘯依巖石。仰臥始思天地寬。

山中

一市繁華仰化工。樓臺湧出碧山中。清泉地下通靈火。神液人間假熨攻。不是扁倉瘞瘵起。况憑儀狄鬱憂空。浴餘最覺心神快。短髮輕衣向冷風。

初夏園中

閒庭容我恣徜徉。日與群禽弄衆芳。桐葉尙疎楊柳細。石苔偏綠粟芽黃。枝間梅子低垂地。林下竹孫高過牆。萬物生々渾得意。人間底事日皇々。

夜行

暗々山耶水。不看燈火搖。陰風吹颯颯。黑樹嘯鴟梟。去國孤身遠。想朋千里遙。電光時一閃。飛雨捲回颿。

蓮湖泛月

好放蘭舟一棹閒。乍看蟾影照蒼灣。清輝演漾先搖水。烟樹蒼涼漸現山。碎月明星留棹底。湘妃漢女舞波間。去來幽景娛良夜。不聽晨鐘不肯還。

月夜

神氣四邊盈。蒼々大字清。古杉千仞梢。中夜一環瓊。細影臨軒動。妍輝入露明。微風傳遠籟。詩句忽然成。

浦の筥屋

隆 準 子

世の中の樂としいへば、こかねしる銀を鑲め、瑠璃の沙厚く珠玉の贅暖にして落英自から繽紛たる朱樓紫殿に起臥して、錦の褥を重ね、春の朝秋の夕、詩歌管絃の宴遊に耽りて、世のうき節をつゆしらぬ貴人富者の裡にのみいつも宿り、人めも草も枯れはてし、見るもいふせき賤か伏家には、樂なきかのように思ひある人こそをかしけれ。さればうたてや名聞に逞はれ利慾に遣はれ、身に靜なる違なく、あたらし生を齷齪として苦の内に送る人々の、多きか常なるにひきかへて、高位富貴に目も眩れず、ひたすらに己か天分を守りて賤しき業にいそしみつ、雄浪雌波の寄せてはかへす清き渚にからき浮世を渡り、磯馴松に通ふ風の籟を自然の琴と聞き、破れ窓もるゝ月影に眞如の心を澄し、朝な夕な潮風に吹き晒らされて膚は鐵の如く黒くとも、心は清き海人の身には、雪月花もなにかあらん、一家團樂して晝の疲れを晚酌一杯の濁酒の酔心地に任せ、明らけく治まる御代のさまの長閑やかに安らげきを夢みるこそ無上の樂なれ。

有明月の影消えて、昨夜の夢もいつしかに、東の空ほのくど白みゆけば、鷄鳴早や曉を催し、森の梢にむれ鴉の羽音喧しく、朝餉の支度にやあらん、蛋か筥屋より麗々と立昇る薄煙の消えゆくはては、前なる小山の松々枝に霞みて、さながら晝のようになん。いでや今日の獲物を漁らんと、海人は、手練の小舟に打乗り、腰篋吹きかへす峰の朝嵐に面を洗ひ、自から櫓を推しつゝ、浪路直に漕ぎ行けば。妻は家に居残りて、まめやかに家事向萬づ我身一ツに整へ、夫をして毫も内顧の患なからしめ。暇ある毎に破れ損したる網あるは帆布なんと取繕ひ、内外互に翼け、明暮

憂を偕にし樂を分ち、人のためにわつらはるべきとなく、琴瑟相和し、波風安く治まりて陸しく和氣霽然として、霞は淡く棟の上に懸ける様、あはれ此境には、いつも愛の神の宿れるかも。日もはや西に入相の鐘の響に今はとて、群れて遊へば浦千鳥、沖の鷗も已かじ、曙に歸る夕まぐれ、吾夫歸りきまささんと、妻は磯邊に佇みて、袂涼しき沙風に衣の裳あほらせつ。海原遠く見渡せば、煙は落ちて風ぬるく、沖も入江も青空に、山の端押しもれいつる月の光りの耿きて、白波寄する岸の邊に黄金と碎け珠と散り、朧に霞む島山は龍の伏すかと疑はれ、浜路遙けき夕霧に見え隠れしつ行く舟は浮ぶ木の葉にさも似たり。かゝる美妙自然の活畫に對しても、常に目馴れたる賤の身には、二千里外の故人を偲ふ風雅心も起らざらめ。されど此景色もし心あらば、世の生物識りの三十一文字にから歌に謳ひ囉さるゝよりも、却て此無邪氣にして眞摯なる賤の月に眺めらるゝ方こよなう喜ぶならんかし。折りしもあれ、八重の汐路に見えそむる一點豆の如き火影、天津み空にきらめく星かど見る内に次第々々に大きくなりぬ。これや家路を急ぐ蛋の漁り火にて白帆に充分の追風を含ませ、板一枚の下は奈落の底も物どかは、節面白き欸乃の聲、櫓を繰るの音、高く晚靄の間に響かせ、瑠璃しきたらん水の上に笹波立て、磯邊に着けば、待ち詫ふる妻は、心もいそ／＼と終日労働の憊れをいたはり、甲斐々々しく獲物の籠を携ふれば、夫は網を肩に擔ひ、陸しく語らひ打連れて、姿は早や松の樹蔭に埋もれ、跡はたゞ更けゆく月愈澄み、岸うつ波昔ながらに靜なるのみ。あはれかの一双の鴛鴦今はいつ地ゆき如何なる温き夢や結ぶらん。かくて益正月の外、春秋は固より、炎熱赫灼鐵を溶す夏の日、さては朔風凜冽肌粟を生する冬の朝

も、華々己か勉めを勵むととて「世の中にたえて櫻のなかりせば春の心は長閑けからまし」てふ櫻を愛づる違なきも、一家和合てふ長閑なる無形の櫻を眺め、「月見れば千々に物こそ哀しけれ我身一ツの秋にはあらぬとて」ふ月の明なるは、却て舟の進退し易きを嗜ふなるへし。されは稼くに追ひつく貧乏神なく、さして豊ならざるも、身は襤褸を纏ふて路頭に迷ひ、子は飢に泣き妻は寒に號ふの悲境に陥らす、苦なければ今日は今日、明日は又た明日と、悠々自適、其日／＼を送る樂の眞味果して幾許ぞ。世に黄金に遣はれ、金錢を積むを無上の樂とし、己れに害を招き、煩を買はんとを恐れ、終夜枕を高くして眠むる能はざるの人、少しく省みて靈妙なる形而上の樂を味ふては知何。

批

評

本誌第十號を讀む(圖點あるは前號の借用文字なり)

露

子

花落ち水流れて梢の春色何時しか變はり、緑こぼるゝ青葉の蔭、蟬の羽袖を靡かすも流石に花に恨し風の悪くからぬは、此の頃の空景色のみかは、實に本誌第十號のあらましなりとす。前の編輯委員諸子か、吐痰玉を爲すの資を以て、本誌未曾有の大冊の名残に、其の終を潔くせられたるに引き換へ。之れは新委員の秀才か、綴り上げたる一百有餘頁の初つ舞臺、かよわき節も見ゆれど、聞くからに先つ嬉しく、殊に論說欄の愈々盛りにして、新に批評欄の設けられたるなど、生

ひ先き見えて床かし。秀才諸子勉めてます。其の任に當り給へ。そも、また青春の校友諸君、空しく螢雪の素養を潜めて、群書堆裡にのみ湮滅せしむる勿れ。おのつから新委員の顔の多く揃はれたるも、蓋し其の所謂委員の秀才か、諸君の爲に瓊玉の詞を驅りて、隗より始められたるにあらでやば、千里の駿九霄の鵬、清才洪筆敢て或は雄篇大作を著しむ勿れ、本校の體面を誌上に發揮するも、また會員諸君の務む可きところなり。

論説欄收むるもの其の數まことに四。併かも之れ皆同窓の賢才か、複雑なる校務に忙殺さるゝなく、おのも、に螢雪の花を咲かせられたるもの、誰れか讀みて其の香を占めて其の實を慕はざるべき。唯余は不幸にして生來科學的思想に乏しく、わりなき一部の教課に苦うられては、何時も頭痛に堪え難く、果ては佐保姫ミューズの惠の露に、眠を覺ます懶け者の習とて、心ならずも齋藤君の生物學上種の觀念の變遷及び丸山君の生物の進化の二論は、例の病に催されたれば、空しく紙頁を送りぬ、之れ決して兩君の卓説の然らしめたるにはあらで、偏に余の宿運の致せし所、幸に余の不實を咎め給ふな。若し夫れ論旨の如何に至りては、前者は岡村博士の校閱を經られたるやに漏れ聞きぬれば、元より其の道の方々を啓導するもの多かるべく、後者また稻葉理學士とやらの教草に據られたる趣なれば、未聞の諸君を利する所なからざる可し。余は唯其の筆路の、甲は簡樸にして乙の適健なる、何れも科學的一種の風姿を備へたるを唱して措かんのみ。次は河原君の時習寮とす、先には朋友論を草せられ、今又此の文をものせらる、余は君か校友を思ふの切にして我校を愛するの忠なるを、謝せずんばならず。本論時習寮を題すると雖も、確かに

一個の校風論とす、顧みれば嚮きに第五號に於て、始めて編輯子の筆にはのめかされし校風論以來、茲般の論策に文を草するもの嘗て見え、遂に九龍齋主人をして獨り慨歎せしめたりき。今幸に此に河原君の此の論を見る、九龍齋主の悦喜も思ひやられて嘻し。殊に君か水清く風靜かなる石伐山房を忍ひざるに去りて、吾か時習寮の爲に、由來の世評を否蒙せんか爲に、雪冤せんか爲に、抑も亦寮風即校風を研めんが爲に、居を移されたるを聞きては、讀む者誰か君の至誠に動かでやば。本號僅に其の一端を論せられたるに過ぎざるも。しかも余は讀みて尙ほ鴻儒の言を聞く思の出たりき、一種の霸氣紙表に躍るの慨、うれしくて繰り返しぬ。山鳥の尾の長々しき劈頭の形容詞、如何はしけれど、之れも君か熱情の餘覺えず滑りし筆の跡なる可ければ、言ひ出ても烏乎の業ならめ。余は君か入寮せらるゝの際、不可を唱へたるの一人なれば、今更にかしてく、河水に誓ひても君か高容を希ふものなり、而して君か先づ學生心得を擧げられ、暗に余輩の猛省を促さるゝに至りては、愈々身の置き所もなく、穴あらは入り度き思のせらるゝに、果ては時習寮生規約までも列擧せられ、嚴かに寮風即校風、校風即寮風と論斷せらるゝほどり、之を讀む寮生諸君の心情も思やらる。末段切に悲む云々より願くは予をして諸君の驥尾に附せしめよ、蓋し予猥りに事を好むものに在らずと、結はるゝに至りては、緒言の結末と反覆せられて誠に隨喜の涙も出てつへく、愚かなる身に浸むること深し。次は春秋君の莊子管見。清楚なる筆致は熱情もゆる如き時習寮と、豊かにならびたるも面白し。君か和漢の籍に至り深き今更なれど、本論の如きは誠に君か所謂由來の漢學大家か、荒誕不羣徒に大言を放つて天下を愚にする者となした

る者、たはやすく解剖せらるべきに非らず、されど君か獨得の敏腕に懸りては、宇治の里の茶漬飯全然、さら／＼と滯みなく、第五號より本號かけて本論の結はれたる、蓋し本誌あつて以來、有數の文字とす。地下の莊子も定めて君を顧みて、満足と笑まるゝならめ。余はもと儒學流行地に生まれれば、常に莊子の名を耳にして、何時も先輩の言、先入の主となり、彼を目して荒誕不替の徒となし、敢てわれから其門を窺ふの勇なかりき、幸に君か高論に依り、啓くもの少からざるは、深く之を君に謝す、唯君か嗚呼、苦味を以て空しく一世を終り、蠢爾として五尺の醜骸の役する所を免れざるもの、焉ぞ天地に通して三才と呼はるゝの徳あらんや、など吐かるゝ邊を叩かば、何うやら莊子獨り生死利害を一にして自然の妙境に逍遙せられし様に覺えて、餘りに豪傑すぎる思のせらるゝは、之も濟度し難きひが目ならんか、切めてはわれも悟道の境に入らまほしくて、今更に賤の緒手巻、繰り返して讀みつれど、何時も詞藻富艶筆跡流るゝ如き君か瓊文に迷はされ、巻を掩ふて餘るものは嗚呼の歎聲のみなるも、にくき筆の業なり。殊に本號に至りて佛語の愈々しけき極に達しぬ。以後余も勉む可ければ幸に益々斯道に盡されよ。史傳欄の見えざりしは、何となく物足らぬ心地して、文苑欄に入りぬ。流石に咲き亂れたる千紫萬紅の筆の花、何れ劣らぬ勢は見ゆれど、詩文の段に氣焔の澎湃して、俳段之れに次ぎ、われもと競ふ心は健氣なれど、歌文段の未しきことは、宛然梅櫻の間に交はる春の草花とも見つゝけれ。願くは臨池の葉に親まるゝ高橋、安木田の兩大人、いよ／＼金玉の歌文を漏らして、後進を勧め給へ。殊に歌欄に於ては、一葉散り二葉亂れてあはれ獨の新顔もなく、將又知名の諸子も、既に老いて詩

俳段と比ふ可くも非らず。詩文の段上常に村上浦井兩先生の玉篇絶ゆるなきは、抑も櫻花の眺めある所以なる可し、兩先生の生等を啓くの厚きに感謝すると共に、國文の兩大人に望むもの切なり、香陽君の蓬萊遊囊、その重さ測る可くもあらず、君か斯文に熱心のほど見ゆるも、いと／＼うれし。されど此の長篇に句讀の落ちしと、誤植の少なからざることは、可惜名篇をして讀者の少なきを恨ましめけめ、大谷山中の美人を追懷さるゝの筆致、中野道遙か上毛の美人を懷はれたるに出づるなる可しとは、例の皮肉屋の評なれど、情緒の綿々たるは何處までも無邪氣なる書生肌なり、松心冷骨の兩子また斯道の熱心家、至囑々々、梅花の眺めある俳壇は、所謂子規派とやらの勢すこく、何時もなから修竹子の羽振、床しども床し、球江子また全派の達人、惡からざるなし。垂東子は未だ練磨を要する者か。

雜錄欄例に倍して賑やかなり。殊にK、O恒堂の兩先生か、何時もながら一部に二部に、底ひなき知泉の水を漏されて、初學面牆の蒙を啓かるゝは、夏の日に疲れ果てたる旅衣に、夕立に遇へる心地して、兩先生の生等を導かるゝ熱情感佩に堪えざる所なり。もだまの説は斯道に益すること多かるへく、太古希臘物語集は「シラシツシ」研究の入口にかまびすしき此頃、一きはうれしく讀まれぬ。法窓餘録は流石に權利義務の流を汲まるゝ乾燥生の寄せられたるもの、法窓の士を益すること少なからざる可し。燒李婉兒は淡島氏の文なり、之れは嘗て貴族の鋒鏑に斃れし愛弟を思ふの切なるど共に彼等を憎む革命的平民的精神禁じ得ず遂に自ら羅馬往昔の隆盛を恢復する天遣の神使なりと信じて起ちし美男兒、李婉兒の、さかり短き春の花賤心なき暴徒の嵐に散りて名の

み、著、く、記、録、の、上、に、残、れ、る、を、見、て、感、愴、の、情、堪、え、難、く、遂、に、氏、が、彩、筆、を、遙、か、に、飛、は、し、て、タイ、バ、ー、河、畔、に、懷、感、を、注、ぎ、し、も、の、余、も、亦、之、を、讀、み、て、當、時、竊、か、に、氏、か、史、筆、を、羨、み、し、か。あ、は、れ、空、し、く、一、朝、の、烟、と、消、え、て、今、や、ま、た、續、篇、を、待、つ、の、念、も、失、せ、果、て、ぬ、。倦、て、も、灰、の、み、残、る、感、愴、錄、に、心、澄、み、ぬ、と、聞、く、あ、る、じ、の、情、問、は、ま、ほ、し、。花、供、養、は、青、蛾、氏、の、春、風、に、散、り、に、し、花、神、を、吊、は、れ、た、る、も、の、例、の、才、情、楚、々、た、る、隨、筆、な、り、。以、上、の、二、篇、は、帝、京、よ、り、寄、せ、ら、れ、た、る、も、の、古、巢、を、思、ふ、情、多、謝、々、々、。小、蓬、萊、春、遊、記、は、弄、界、居士、の、旅、行、記、。取、り、出、て、ん、ほ、ど、も、な、し、。九、華、生、の、懷、舊、は、前、號、に、見、え、し、故、郷、の、却、り、て、情、深、く、覺、ゆ、れ、ど、九、龍、齋、主人、は、凡、そ、此、の、如、き、文、は、情、を、以、て、勝、る、も、の、と、評、さ、れ、た、ら、ば、此、篇、に、至、り、て、は、愈、々、主人、の、首、肯、せ、ざる、も、の、な、る、可、し、。不、眠、坊、の、く、や、み、草、。い、ど、め、で、た、し、殊、に、君、が、家、君、と、對、話、の、あ、た、り、至、情、濃、か、に、筆、致、精、妙、。覺、え、ず、袖、を、し、ぼ、り、ぬ、。此、の、篇、君、か、亡、友、に、及、ば、ざ、れ、ば、余、は、後、篇、を、待、つ、旱、天、の、雨、の、如、し、。桐、の、家、主人、の、就、俳、人、一、茶、坊、。仄、か、に、聞、く、主人、亦、信、州、の、士、と、余、は、主人、か、斯、學、の、爲、に、此、の、俳、人、を、論、せ、ら、れ、た、る、に、非、ら、ず、し、て、却、り、て、單、に、君、か、故、里、の、爲、に、此、人、の、紹、介、せ、ら、れ、た、る、や、う、覺、え、ぬ、。そ、も、一、茶、坊、と、は、如、何、な、る、俳、人、ぞ、門、外、漢、な、る、余、は、元、よ、り、知、り、え、ん、様、な、け、れ、ど、。され、ど、三、日、月、の、頃、よ、り、待、ち、し、今、宵、か、な、の、句、は、余、も、幼、時、よ、り、故、里、に、あ、り、て、既、に、誦、し、ぬ、。此、の、詠、者、を、此、の、人、と、せ、ば、必、ら、ず、や、名、吟、多、か、る、可、し、。唯、主人、の、引、か、れ、し、所、の、も、の、何、と、なく、塵、俗、凡、調、の、句、多、き、は、抑、も、此、の、俳、人、の、未、た、堂、に、入、ら、ざる、の、故、乎、。將、に、主人、の、杜、撰、な、る、に、由、る、乎、。沙、翁、一、ミ、ル、ト、ン、ダ、ン、テ、一、ヤ、ョ、ー、テ、の、輩、を、さ、へ、た、く、ら、べ、ら、れ、た、る、主人、の、此、の、文、に、引、證、の、粗、疎、な、る、か、の、如、き、は、斯、道、の、爲、な、り、と、も、或、は、故、郷、の、爲、な、り、と、も、余、は、首、肯、す、る、能、は、ず、。

本號に入りて新に響きし批評の聲は、誠に九龍齋主人の筆に上げられたり。主人の此の大奮發、子孫に傳へて永く本誌に銘す可し。唯主人か序とも見る可き三頁餘の文字か、切に校風の爲に寫さるゝの愛校心を以てして、何故に之を正々論壇上に發揮せず、僅かに批評の片隅にほめかされたるやに至りては、主人の爲に之を惜むこと荐りなり。

雜報亦豊かに、運動場裡の寂寥も嘗て球と棒とを握りし手は、櫂と舵とを取て海若を叱咤し、雄心落々竊かに中原の獲鹿を期するの故なる可ければ、茲に濶目蓮湖の大會を待つ可く、長途行軍はた積年の失望を醫するに足る可し。今は何事も第十一號に期して此に秃筆を捨つ、顧みれば我ながらあきれた暗夜の鐵砲、狙も何もあらばこそ、手許も見えぬば丸も込められず、誠は空音の響、諸君幸に諒せよ(妄評死罪)



雜報

青帝駕を回らす

翔鸞林に飛むて競ふて佳人の盃を散し、紫魄紅
魂流水に迷ふて瑠璃の明鏡爲めに曇る、冨已
みなん哉、花神無情にして春倏忽、黄兒故巢を
慕ふて歸心挽き難きを如何せんや、吾人寧ろ去
るものは追はじ、乞ふ殘花を尋ねて暮れなんと
するの春を惜まん、

卿等速に往て後園を訪へ、杜鵑半樹に入て花鼻
鼻、柳絮大水に落ちて萍緑なり、花王今正に焯
灼、國香蘭を欺ひて析くもの語るか如し、藤架
は紫の振袖を垂れて嬋々愛すべく、海棠は美人
の嬌姿を睡つて嬋娟喜ふべし、花軸簇生蔓とし
て薔々たるは東籬の棠棣に非すや、冷艶雪の如
く凜として郁々たるは西圃の白薔薇に非ずや、

花や四時愛すべし、而も暮春の殘花寧ろ憐むべ
し、

卿等又杖を郊外に曳くの意なきか、何を往て詩
想を煙濔に鍊らざる、今や新緑漸く書窓を壓し
て雨後の前山翠滴らんとし、澤雉已に啼破して
麥隴平かなり、若し夫れ柳蔭影暗き處、燕子細
雨を縫ふて屢垂簾を蹴るに至ては、閑雅幽寂の
氣人の心脾に泌して吟情掬すべきものあらん、
况んや嵐氣遠林を籠めて樓形影淡く、鶯の抹す
る所題鳩東風に哭するに當ては、愴然として轉
簫瑟の情に堪えざらんとす、

卿等又此時に當て善く樂み善く遊べ、一年運動
の好時節餘す所果して幾何ぞや、漣湖扁舟を浮
べて鴻歌閑鷗の眠を覺さんか、棍棒熱球を飛ば
して歡聲運動場を漂はさんか、是も可なり、彼
も亦可なり、唯速かに往て卿等の身軀を鍛鍊せ
よ、歲華猝々として輪回窮りなく、逝水遠く流

れて淫霖來らんとす、勉めよや、

紀念式

歳の四月十八日は吾人の正に記憶すべき佳辰な
り、茲に創立第九年の今月今日、我輩謹んで第
四高等學校萬歳を三唱せん、蓋し吾人の紀念日
を歓迎する所以のものは、邦に紀元節あり、人
に誕生日あり、鮮魚を剖き、赤飯を蒸し、參差
相祥慶する所以と異なるなきなり、

此日午前八時、職員生徒靜勝館に會し式を擧ぐ、
校長一揖莊重なる語氣を以て告て曰く、子等今
日此佳辰に會ふ、豈唯に祝賀歡喜するのみにし
て已む可けんや、紀念日の典を擧ぐるの要は、
其創立當時を追懷せしむるにあり、屈指回顧す
れば明治二十年、我初めて開校の式を擧ぐる
や、時の文部大臣森有禮君校に臨み、親しく設
置の理由を説明せられたり、今試に其一節を朗
讀せんと、乃ち懷を探つて一片紙を得、朗々之

を高誦す、其略に曰く、

抑高等中學の設立豈に偶然ならんや、國家必
要あり、時勢應するあり、茲に初めて其設立
を見るに至れり、國家の必要とは何そや、諸
子之を知らんと欲せば、日本現時の國勢を觀
よ、一目心に釋然たるものあらん、蓋し列國
對峙疊隙之れ窺ふの今日に當ては、人物正確
に、學術精練の士を養ふと尤も緊要なり、而
て今や我邦濟々たる多士を誇るに足るか、顧
みて心に慙怍たらざるを得ざるなり、歐洲の
文明必しも悉く羨むべきに非ず、然れども大
躰に就て之をいは、彼我に勝るもの十に七
八、之に追及せんと欲する豈に難からずや、唯
日本を擧げて直前斷行し、迂餘曲折せず、彼
一步すれば我二歩し、彼十歩すれば我二十歩
し奮發勉勵する所あらんには庶幾くは、相拮
抗するを得んか

校長語を繼て曰く、故大臣か所謂國家の必要なるもの、今日に於て毫も異なる所なし、否、豈唯に異らざるのみならんや、膨脹的日本は寧ろ吾人を促して益高等學校を擴張進歩せしめざる可からざるの氣運に會す、諸子希くは直前研鑽、以て故大臣の所期に副はんとせよ、次て例により樹木寄附者の姓名を報告し、終て一同退散、

故有栖川宮殿下紀念樹栽培

運動場の北隅、稷々たる古榎を距る二三間、一株の山櫻あり、木柵之を繞り、石之を表す、石上十六字あり、曰く、

維王所憩、種櫻代銘、千載仰止、豈花惟馨、櫻樹はこれ神州の精華、以て故有栖川熾仁親王殿下之餘烈と、我校の光榮なる歴史とを表彰せんと欲するなり、

吾人は事新しく、殿下の高徳を頌讚せざるべし、蓋し殿下の御功業は、今更に喟々を要せざる程

顯著なればなり、唯吾人をして紀念樹栽培の來

謹んで校記を按ずるに、明治二十二年六月二十八日、參謀總長陸軍大將熾仁親王殿下金澤に着せらる、此日本校本部及醫學部生徒を隊伍に編成し、職員之を率ひ、河北郡柳橋に到りて奉迎す、越て三十日午前十一時、親王殿下本校に臨み、本科及豫科生徒の中隊運動、補充科生徒の柔軟体操を觀給ふ、黒川陸軍中將、岡本陸軍少將、三好陸軍歩兵大佐、一柳子爵、大町知事陪觀せり、尋て本校職員に謁を賜ふ、七月一日午前八時、親王殿下金澤を發せらる、職員及生徒有松郊端に到り奉送す、と、聞く殿下の親しく兵を我校に閲し給ふや、深く其精銳を嘉し賞詞を賜ひしといふ、我校の面目之れに若くものあらんや、爾來茲に七年、烏兔匆匆、星移り人變り、當時の光榮を記憶するもの寥寥辰星の如し、

豈慨に堪ゆ可けんや、大學豫科三年生諸氏茲に感ずる所あり、發奮興起して浴く校内に義金を募り、樹を栽え、石に刻し、以て當年の跡を後昆に垂れんとす、職員生徒亦喜て之を賛し、醜金立處に集る、乃ち委員を舉て工を督せしめ、爾來數閱月にして工始めて成る、此に於てか紀念日の佳辰を下して、櫻樹を練兵塲裏玉趾の跡に植う、

紀念式了るや、衆員相率て樹下に繞り、栽培の式を擧ぐ、校長委員長の資格を以て其來歴を報告し、次て委員中川忠順君亦進て告ぐる所あり、式全く終る、聞く、樹の高二丈四尺、幹周二尺三寸、財帑を費すと實に貳拾五圓と、吾曹謹て委員長閣下を始め、委員諸氏の勞を謝す、

委員長報告書の末文に曰く、自今以後我校學生は、日に此樹前に於て兵式体操の課業に服し、殿下の盛徳偉業を追想し、益身軀を鍛鍊し、尙

武の氣風を振作せは、又以て殿下臨校の光榮を發揮するに足らんか、と、然り、濕絮濛々、天地冥晦、積雪脛を没して朔風皮膚を劈く白戰の朝、或は鬱蒸盈々、乾坤風死し、貓鼻爲めに暖かくして炎熱金を鑠す甌中の夕、銃劍を握つて馳驅周旋するに方てや、櫻樹我を鞭ち、刻石我を勵まし、奮發蹴起、渾身の勇を傾倒して、心は霄漢に飛ひ、氣は星辰を呑むに至て、些か當年の至遇に奉答せざらんや、之れ我校學生當然の義務なり、本分なり、

端艇競漕會

言ふ勿れ日東男子水に暗しと、知らずや、攻清の役、我海軍は一戰して敵艦を豊島に走らし、再戰して之を海洋島に破り、三戰して彼の北洋艦隊を威海衛に殲滅し、トラファルガーの海戰をして後に瞻若たらしめしに非すや、又議らすや、輓近我郵船會社は英のビー、オー會社を退

ふて其航路を奪ひ、長驅して印度洋の鯨濤を破り、更に進て其本據を衝きつゝあるに非ずや、然りと雖ども、吾人東瀛の堦に邦するもの、未だ以て満足すべきに非らざるなり、須く海を席とし、世界を家とするの覺悟なかる可からず、此目的を以て呱呱の聲を擧げたる我校端艇會は、設立以來將に期年ならんとす、健兒業已に熟し、技已に精し、此時に當て冲天の鵬翼を鼓して、一大飛躍を試みずんば、夫れ將何の時をか俟たんや、

何事ぞ、半月以來部員東西に奔走し、經營畫策するもの、如く、滿校到る處活氣動く、見よ健兒の容貌を、渠等か赤銅色の顔は、落々たる雄心を包み兼て媮婉滿面に溢れ、炯々たる眼光尙笑の泉を湛えつゝあるに非ずや、彼等何事をかなさんとするぞ、果然、大果然、大々の廣告は控所壁上に掲げられぬ、墨痕淋漓、曰く四月十

九日を以て、地を遶湖の下流に相し、發會式を兼ねて一大競漕會を催すべしと、壯漢眉宇軒昂、活氣今や沸騰點に達せんとす、何等の無情ぞ、天公吾人に禍して期日に至れば細雨蕭々、技行ふに由なし、即ち一日を緩ぶするに決す、委員此日學友某を訪ふ、彼頗る憂色あり、乃ち問て曰く、子至親を失ひしか、何ぞ痛恨するの甚しき、某愁然として答て曰く、陰雨此の如し、何の日にか新晴を期せん、我又終に技を行ふ能はざるを恐る、之を以てか歎息すと、彼等の無邪氣概ね此類なり、然りと雖天公永く無情に非ず、健兒の雌雄を賭したる四月二十日は明けぬ、曉來密雲散して朝暉暉々、乃ち走て大野の會場に聚まる、

一日の雨半日の晴道途塵を揚げず、衆庶報を聞て來り觀るもの、肩相磨し、臂相接す、發會式に次て競漕は午前十一時を以て始る、恨らくは

強風面を打つて馮夷哭し、操艇甚た便ならざりしを、其鯨鯨相争ふの壯觀に至つては、之を卷尾の附録に讓て茲に贅せず、當日競漕十六番と稱す、惜ひ哉、暮潮日落ちて蒼煙飛ひ、倦鳥遠林に鳴て疎鐘響くに至て、猶餘す所數番、撰手競漕亦其中にあり、乃ち遺憾の拳を握て相分れしは、午下第七時、

俳壇起る

俳句の流行今日より甚しきはなし、而も多くは區々たる繩墨の中に踟躕して、古人の糟粕を甘餐するもの比々皆然り、見よ、上は都下數十の大新聞より、下は邊陲眇々の田舎雜誌に至る迄、日々載録する所の俳詩、雨後に萌え出る雜草の如く夫れ多く、將又風に散る枯葉の如く夫れ夥しきや、吾人は萬物の盈滿を喜ぶ、而も雜草の萋々と枯葉の狼藉とを喜はざるものなり、此時に當て所謂子規派と稱する、秋虎、修竹、吐

虹、樂園、豆男等諸氏、相謀て一團となり、十七字詩に天地の美を發揮せんとすと、我輩夙に諸君の秀吟を下風に聽き、密に推服する所、今や諸氏が奮然蹴起して、社を結ひ徒を聚る所以のもの、其意蓋し測り難きに非らざるなり、森羅萬象喜で諸君を迎へ、天地星辰諸君の諷詠する所に任す、若し夫れ天地諸君の詩神と冥合して興到り情溢るゝの時あらば、須く瓊瑤の聲を爲せ、想ふに諸氏か俳詩に堪能なる、卓厲風發、能く一新機軸を出して俳詩界に革命の新聲を鼓吹するを疑はず、諸君願くは加餐せよ、

長途行軍

行軍出發の掲示は喝采を以て迎へられたり、時正に暮春四月、朔風料峭の寒なく、炎熱睡魔を催すの暑なく、恰も旅行の好時節、况んや端艇競漕會僅かに終て健兒餘勇勃々、鐵腕未だ滑かなるを歎するに於てをや、

其兵を加越の野に放ち、武を北海の濱に鍊り、健兒渾身の勇氣を叱して虎嘯き龍躍るの壯觀は、卷尾の附録舉て餘蘊なきを期せり、若又朝に菜花踏青の履に映し、夕に翠微帽扇を壓して、颯爽の氣金玉の聲と化したるものは、諸君向後之を文苑欄上に訪へ、唯吾人は行軍か我校健兒の素養を顯彰するの、好箇試金石なりしを附記して己まんとす、渠等か九日の行軍に於て發揮したるの美質一にして足らず、豪宕、勇敢、眞率、謹直、敏捷、快活、從順、友愛、忍耐、剛健等舉げ來れば正に十指に餘る、宜なる哉、渠等か過き來るの地、北陸學生の頭領として讚賞措かさりしや、

小松宮殿下奉迎

加越の山野に曝露すると九日、名山大水を越え、峻坂峻嶺を踏破し、具に艱難を嘗め盡したる我校三百の健兒は、五月四日午下二點を以て、掄

色欣々金澤に歸る、之より先き、參謀總長小松彰仁親王殿下、此日を以て御着澤あらせ給ふと聞き、旅装を解くに暇あらず、犀川橋畔野町に奉迎す、由來沈靜なる金澤も今日計は色つき渡りて、滿城の活氣今や昂騰、車馬連りに宙に驅りて陌頭數町の間在るかど疑はる、待つと多時、夕陽漸く西海に落ちて斜に彩燈に映する頃、烟火一發爆然中空に轟る、御來着、御來着の聲は口又口を通して到る處に響き渡りぬ、續て烟火一發又一發、金裝燦爛たる前驅の武官は轟然として來りぬ、御來着の聲は再び全線を通して萬口に反響せり、須臾にして車聲軋々、峩帽、緑は殿下を擁して近づき來り、衆口寂として聲なく、的に寒山深夜の如し、

講師磯田中尉「氣を付け」の一令に、肅然容を更め恭く敬意を捧げ奉れば、殿下車上豊に驅らせ

給ひ、玉顔春風澹蕩として、卓犖の英姿儀觀堂堂たるを仰き奉りぬ、閃電一過、車去り馬走り、人波乍ち玉影を呑み盡して、「海行かは」の鐵笛尙嚙曉、清音高く晚風に響ひて餘音嫋々たり、

小松宮殿下の御臨校

明治二十九年五月五日は、我校々記に特筆大書すべき良辰なり、我輩前日殿下を奉迎するの榮を擔ひ、踴躍三百、抃舞措く能はさりき、況んや殿下此日を以て我校に鶴駕を枉け、學生の兵式躰操を親閱せられ、且褒詞を賜ひしに於てをや、殊恩優渥、歡喜極つて恐惶を増すのみ、顧れば我校先に故有栖川親王殿下の御貴臨を賜ひ、而て今復此寵遇を辱ふす、眇々頑鈍の寒拙大、死尙餘榮ありと云ふべし、庶幾くは永く此日を以て紀念とし、造次忘れず、感奮激勵、誓て殿下の至遇に答へ奉らんとを期せんとす、今禿筆を役して、當日盛觀の一般を叙せん、

午前九時三十分、殿下三好少將等數名の武官を率ひて臨校せらる、職員生徒之を門外に奉迎し、秋山、木村兩教授御先導校に入らせ給ふ、御休憩後各教室御巡覽、且職員に調を賜ひ終て校庭に學生の兵式躰操を親閱あらせらる、見渡せば、

再々たる芳草翡翠の褥を織て地縁に、天高く、颯風池邊を吹ひて倒涵の檐影を搖かす、殿下此日陸軍大將の略服を着け給ひ、胸間十數の大勳章、累々として光彩陸離、才華俊發なる御品性は、玉顔掬すべく視上げ奉りぬ、實に見易からざるの盛觀たり、吾輩頑骨稜然、素より尊覽に供すべきの餘技なし、加ふるに九日困頓の後を受け、英氣半は銷沈す、唯恐る矢躰恥を殿下に遣らんとを、然りと雖ども、殿下の御威風顔を去らざると咫尺、豈に敢て不敏を以て之を辭し奉る可けんや、即ち大學豫科三年、二年、及醫學部學生は中隊運動を、大學豫科一年及豫備生

は柔軟体操を演ず、思はさりき、隊伍整々、武歩堂々、紀律嚴明にして進退能く規矩に適はんとは、須臾にして殿下歩を移して内に入り、次て御退出あらせらる、職員生徒之を門外に奉送し、光榮ある歴史は永く我校に留りぬ、

小松宮殿下奉送

紫山晨曦を孕むて斷雲殷紅を帯び、朝風旭章を吹ひて翻々として醜る、時維れ五月六日、殿下此日を以て金澤を發し御西下の途に上らせらる、我校殿下の寵遇を擔ふや大、豈敢て滿腔の熱誠を捧げて其行を奉送せざらんや、朝來市街喧驢、峨帽劍影、盛裝するもの、衣袴なるもの絡繹として南に急く、編輯子亦走て野町郊端に至れば、職員學生既にあり、俟つと少時、午前八時二十分、殿下扈從に簇擁せられ我列前を御通過あらせらる、此に於てか一同誓首、謹んで奉送すれば、殿下莞爾として舉手御答禮あらせら

れぬ、天潢を分ち給ふ殿下の如き尊き御身に於て、寛厚能く儀禮を重んじ給ふに至ては、轉感泣に堪えざるものあり、奉送了て一同解散、

グラウンドの寂寞

新緑交加して草莽々、蕉葉風に披ひて杜鵑人の離情を牽く、運動場裏滿目荒涼、僅に此寂寞を破るものは、場の一隅に贏輸を争ふロケットの一連のみ、而も彼等か吐き來る光燄蠟燭の火よりも小さく、未だ人意を強ふするに足らざるなり、怪ひ哉底球部の壯丁、今何の處にかある、吾人か最終に大々のマッチの張紙を見たるは已に一年の前に非すや、爾來消息香として聞えず、且や所謂大々のマッチなるもの、其眞象を發き來れば、當時來り會するもの僅々數名を以てざりしに非すや、一年鳴かず飛はず、諸氏何の日を俟て一大飛躍を試みんとするぞ、人は近日グラウンドの寂寞を以て操艇の流行に歸す、夫れ

或は然らん、端艇の操縦や大に好し、然れども徒に水上の一局に偏して、當年諸君か汗血を濺きしグラウンドを閑却するに至ては、吾曹俄に與する能はざる所なり、諸君何ぞ奮て暴風土を捲て來る底の元氣を振作せざる、グラウンドの草は永く諸君の汗血に餓えつゝあるに非すや、城後の白壁は久しく歡聲の來らざるを歎せるに非ずや、勉めよや、蹢躅逡巡は我黨の士に非ざるなり、

無聲

頃者連りに無聲堂の無聲を慨するものあり、然れども無聲は獨り無聲堂のみかは、曾て高調鬼神を泣かしめ、秀詠天地を感せしむるの抱負を有して生れ出でたる歌文會の秀才健在なりや、吾人は卿等の消息を聞かんと欲するや切なり、卿等果して大に伸びんか爲めに大に縮まりつゝあるか、將否か、初め盛にして終衰ふる之を龍

頭蛇尾といふ、始あるか如く終なきか如き之を幽靈といふ、卿等請ふ躍起して京童の嘲を取る勿れ、

活力試験

旅行、पोर्टレリス、行軍は、健兒の筋骨を鍛錬して、鐵腕、鐵脚、焦顔、烟視の幾多二王金剛を造り出しぬ、此時に方つて渠等の活力を試験し、体育の効果を測定するも亦無用の事に非らざるなり、蓋し活潑なる精神は剛健なる身軀に宿るとかや、諸君幸に自重して、今日の活力を永遠に保存せよ、試験は五月十一日を以て始まり、同十六日を以て終る、

委員撰定

學藝部委員任期満ちたるを以て、該部長の推撰により、會長の允可を経て、新に左の如く確定せり、

學藝部、講談會委員

宮川鼎、齋藤賢道、吉田弟彦

同討論會委員

田代循、野村淳治、栗本貫一

又先日撰定されたる雜誌部委員は、

河原始二、春秋原在文、丸山環、戸村義保、

鈴木保臣、田代循、遠山熙、曾我部俊雄、

月岡眞備、内藤昌太郎、稻並幸吉

月桂冠

明治二十九年は各地高等學校一部水上撰手に災して、敗北の報は頻々として耳朶に達しぬ、獨我校同部撰手は、五月十六日を以て、其久しく夢みつゝありし勝利の月桂冠を頭上に輝かしめぬ、所謂萬緑叢中紅一點なるもの、希臘の昔、オリンピアの競技のそれならねど、吐き來る光榮萬丈、得意想見すべし、然りと雖も勝て胃の緒を締むるは古來名將のする所、彼等誇らす、銜はず、愈奮發して其技量を研磨して可なり、

滿は損を招き謙は益を受くとかや、吾曹其勝利を慶賀すると同時に、一言婆心を添ふると然り、

一高ベイスボールの大勝を祝す

五月廿三日夜九時一電着す、曰く今横濱洋人とマッチあり二十五餘勝、と蓋し一高ベイスボール競手が横濱在留歐米各國人連合アマチュア俱樂部撰手の大天狗然たる隆鼻を物も見事に取り挫きたる快報なり、即ち不取敢祝電を發す、想へは一高撰手諸兄が日本男兒を代表してグラウン下に衝立ちたる時、其胸中の覺悟は如何なりしぞ、將た世にも稀なる大勝利を博してグラウン下を引き擧げたる時、其胸中の愉快は如何なりしぞ、嗚呼吾人は感謝す、敵、碧眼綠髮の敵を思ふか儘に壓倒し了せるとを、諸兄か穢々たる奇骨、毅々たる高風、是れ日夜吾人が敬慕する所、此飛電に接し快絶を大呼して殆んど狂せむ

と欲せるもの偶然ならむや、猶當日の壯觀の如き願くは速に校友誌により知るとを得む、時下向暑邦家の爲め益々自愛せよ、

朝鮮守備兵の歸澤を迎ふ

萬里朝鮮元山の地、國に捧けし身にも雪の朝はいと寒く、月の夕は物かなし、慣れては安き戟の枕も指屈むれば二十有幾月、勤め終りて故郷に錦を飾る一百七十五名、後備第六聯隊第二中隊は五月廿五日午後二時降雨を犯して我金澤に歸着す、我校職員生徒之を郊端二萬堂橋畔に歡迎す、蓬たる其鬚、窪たる其眼、流石忠義の勇士も苦楚辛酸に堪へ兼ねて斯くぞと見ては誰か又一片同情の感に泣かざる、城内發砲爆竹盛なるは今や慰勞の酒宴も酣なるらむ、あはれ猛者積る旅情を散せよと云ふ、

學友の訃音

行衛を見せぬ青葉の蔭の郭公、情に漏らす一聲

は、偕ても痛ましや同窓中山文三郎君の訃音なりけり、君夙に吾校に入り今や豫備級を終りて豫科に進むに際し、空しく蘭摧玉碎の歎とは化しぬ、嗚呼白玉樓は遠し、幽魂何處の天をか驅ける、悲しき哉、

學年漸く促る

隙駒驅て光陰碎々學年漸く暮れなんとす、學年の暮るゝは歲華の極まるか如きか、人は歲晚儻石の儲に哭し、吾曹年末文債の積もるに泣く、惟ふに諸君か身は累々たる簿冊の中に埋まり、閑かに亂帙を檢して讀書曉に徹するの日は、將近きにあらんとす、諸君幸に自愛して一年蘊蓄する所の精粹を考試に反映せしめよ、

諸君學年試験を終らば、行李匆匆還て父母を省るなるべし、二月の夏期休暇、諸君如何にして之を費さんとするか、蓋し夏期休暇は學生一年の樂天なり、須く最も愉快に而も最も健全に消

費せざる可からず、諸君笈を他郷に負ひて慈親に背くや久し、幸に此休暇を利用し、自ら帚掃の勞を執つて至親に奉仕する尤も可なり、若くは短褌輕鞋、飄然として山野を跋渉し、名勝を探り故蹟を訪ひ、大に身體を鍛鍊すると同時に、觀察力を涵養するも亦可なり、或は蘇漫たる碧海海若と闘ひ、或は綠蔭影清き處晏臥涼風に嘯くか如き亦妙ならずや、希くは諸君心身を修養して新に來るべき學年の計を爲せ、若し又休暇中の消息、研究の結果に至つては、之を會誌に漏して紙上一層の光彩を添へよ、吾人をして徒に編輯難を歎せしむるなからんことを、本學年の終刊に臨み敢て一言す、諸賢願くは健在なれ、

校内雜俎

叙任と叙勳と、元島根縣松江病院長醫學士山崎幹、助教授徳永富、同高山基重の三氏は、

今般本校教授に任せられ、山崎氏は高等官六等に、徳永高山兩氏は高等官八等に叙せられたり、

又助教授福見常太郎氏は、二十七、八年役の功に依り、勳八等に叙し、瑞寶章及一時賜金五十圓を賜はりたり、

又博物學助手橋船次郎氏は兵庫縣尋常師範學校教諭に任命せられたり

校長の上京、大島校長は文部省の召集に應じ、高等學校長會議に列席の爲、四月二十八日上京、五月廿六日歸澤せられたり、

動植物實驗室竣工期、目下新築中なる同室は、工事を取急ぎ、六月十五日迄に竣工すべしと云ふ、

講談會、五月二十二日化學教室に於て須藤助教授の講話あり、演題は「北陸地形の變遷と太古人類の分布」なりき、

柔道紅白勝負概況

(吐 虹 生)

行き掛けの駄賃に、紅白勝負をものさずやと編輯先生の仰せ、もういやぢや書くのはいやぢやと、だいをこねたれどいつかな許さず、義理の何のと持て來られて今は詮方なく、好し己れも男ぢや、やつてのくべしと受合ひ、かくは雜報欄の片隅を汚すとはなりぬ、而かも例によりて記事は粗漏、批評は悪口、

諸も五月の二十四日、第二回の紅白勝負舉行さるべしとのこと、傳へらるや健兒腕を拊て天晴の高名、我れ博さんと力氣味し雄々しき、番組は揭示されぬ組員は決定しぬ、其日如何と首を伸はせし者は校を擧つて然かり

愈其日は來りぬ、午前九時無聲堂裡は戦士と校生とを以て満たされぬ、赤旗白旗相對して翻へり、其下には紅白の勇士、胡坐して頻りに時の

來るを俟つ、

紅組

白組

- | | |
|---------------|-------------|
| (幼)河 西博愛 | (幼)大 島 雄治 |
| (幼)大 島 亮治 | (幼)今 井 守信 |
| (中)竹 中 剛三 | (中)伊 藤 小二郎 |
| (中)井 和 雄 | 水 上 佐 太郎 |
| (中)押 原 三 吉 | (中)西 川 巖 |
| 名 川 彦 作 | (中)田 村 昌 新 |
| 安 藤 豊 | 山 科 祐 二 |
| 五十嵐 嘉一 | 澤 田 堅 太郎 |
| 栗 本 貫 一 | 林 達 爾 |
| 高 橋 亨 | 東 方 伊 三 松 |
| 大 石 雄 輔 | 永 松 文 一 |
| 大 將 山 口 重 作 | 近 藤 常 吉 |
| 大 將 江 間 圭 一 | 秋 山 信 次 |
| 大 將 佐 藤 龜 久 次 | 大 將 高 梨 恂 一 |
| | 大 將 紅 林 豐 治 |
- 惜むらくは白の總大將たる近藤他家雄氏は病を以て出で、戦はず、其他紅白の驍將勇士或は病を以て或は事を以て、此日堂裡に會する能はざる者多く、六十の戦士、唯僅かに其半を餘すのみ、

あれば効を奏せざるは勿論なるべし、安藤氏また好んで拂腰に入らむとせしも、林氏の腰磐石の如し、これも蹉躓、遂に引分

東方氏他流を學ひたりと稱す、腕力無類なりと稱す、紅の諸士は悉らひ強敵なりと稱す、この東方氏と向ひしは五十嵐氏なりしが、誠にこれ好對、其搏闘の如何に愉快なりしぞ、惜むらくば伏せはつかみ合ひ立てばねじ合にて、始終双方より其技を出さざりしこそ憾みなれ、最後は引分となる、またまさに理の當然なる者、若夫東方氏にして横掛に入り五十嵐氏にして巴投に入らんか、十秒を出でずして勝敗歸しつらんに永松氏に比せば栗本氏遙かに其技に達せり山嵐の一本は左程苦しとも思はれず、ついで白より名乗り出でたる近藤氏は、技を以てせば稍栗本氏に勝りたらむも、この勝負に於ては寧ろ抑込多分を占められたれば、跳ね返し跳ね返すうち、

あざむき、直ちに膝車に入て大石氏を斃し、次で森山氏と相戦ふ數分、森山氏焉んぞ高梨氏に敵するを得ん遂に大外刈を以て刈り倒され、こゝに始めて紅の大將御出馬となる

出でし者は誰ぞ、山口重作氏、五人殺しの名を博したる驍將山口氏、

去んぬる十一月第一回の紅白勝負に高梨山口の兩氏轡を並べて敵陣に殺入し、非類の勳功を立てし身の、今は別れて敵として立つ、而かも其技量相伯仲して譲るところなき者、この勝敗こそ此日の見ものや云ふべき、十分餘の奮闘、並並の戦士ならむには早くも勝負の定まるべけれども、流石に大將様の試合とてちがつた者也、されども山氏は新手のととて、猛威炎々として天を衝くが如くに、始めは内捲込を以て七分を制し、更に外捲込を以て一本を制す

而かも山氏なほ餘勇の鼓すべき者なしとせん

遂に近藤氏押込まれき

次に顯れしは白の秋山氏、今や日の出の勢を以て上進しつゝある氏のことなれば白組か氏に負はしむるところまた少なからざるべし、果せる哉抑込を以て栗本氏に、大外刈を以て高橋氏を破りたるも、苦戰其身を勞すると甚だしかりけむ、紅の大石氏の爲めに、膝車の一本を以て戦死しき、

この時白組の勇士は悉く斃れて餘すところは將紅林高梨の兩氏なるも、高氏一度奮闘せば腕に立つ者果して如何かあると、人も信ぜり恐らくは己れも信じつらむ。あゝ、昨の紅白勝負にチャムホオン、フラッグを手にしたるは實に氏なればなり

高梨氏胸を打つて跳り上れり、すは大敵、斃さぬまでも疲からし呉れむと、向ひしは大石氏なり、されども一度高氏得意の浮腰を以て敵を

や、横掛と横落とを以て遂に遂に白最後の紅林氏に勝つ

チャムピオン、フラッグは山口氏の手に落ちたり、赤陣佐藤總大將江間大將をわづらはさずして勝てり、これを以て第二回紅白勝負終を告げにき

當日、進級進組せるは左の諸氏也

近藤他家雄

佐藤龜久次

紅林 豊次

高梨 恂一

山口 重作

右四級より三級へ編入す

(但し三級は今回を以て始めて設けらる、講

道館初段に相當す)

徳岡 精彦

森山 守次

五條 隆圓

右甲組より四級へ編入す

秋山 信次

右乙組より四級へ編入す

高松 勇

近藤 常吉

中村 光吉

平澤象二郎

久保田 整

浦 五郎

中村 孝

石田 莊二

栗本 貫一

白井 精一

大森 篤次

高橋 亨

笹川四郎吉

右乙組より甲組へ編入す

佐々木政直	名川 彦作	國井 和雄	浦井 繡次
多島興三次	田中正太郎	水上佐太郎	田宮 春策
東方伊三松	林 達爾	辻岡 律	本多 勝久
岩倉兵次郎	永松 文一		

右丙組より乙組へ編入す

小言一則

近來本校學生にして詩歌論說等を新聞紙に投録するもの増加したるか如し、予は之を惡しと云はず、然れども事の苟も我校面に關するものは丁寧慎重ならむを要す、彼の誤謬多き「演習記事」の如き、小供らしき「金澤一部の人士に告ぐ」の如き、自ら從軍四高生の一人と名乗りたる「福井縣尋中生に告ぐ」の如き、予は其何人の筆になりたるやを知らずと雖も我校の輿論にても代表したるか如き書き振りは不都合千萬と

云はざるへからず、失敬千萬と云はざる可からず、予は今後此の如きとなからむを望む。

近來本校學生の宴會費は一般に餘程高くなりたるか如し、二三年前を顧みれば半日の豪遊十錢乃至二十錢にて十分なりし、然るに今や廿五錢三十錢、五十錢而して七十錢を一夕に散するに至れり、父母の膝をかちりて勉強する身の如何にして此の如き餘裕ありや、自ら味嚼磨り惹、大根、芋等を料理し、一方に減多汗を作ると同時に他方に牛鍋を擁して健啖吐飲、腹足り耳熱して蓋世の氣、堂裡に動き高論勇浩せる當日の景况、將さに漸く見ると能はさらむとす、紳士然と一人く美膳に端坐し美酒嘉肴山海の珍味一口ほどを賞翫し杯盤既に食ひ盡して腹猶滿たさるが如き馬鹿の至極なり、有骨慷慨の士所謂周旋家なる者に迷はされずして樸直廉節の良風を保てよ。(右二件かき、生授)

端艇漫言

予は端艇會員なり、會員なるか故に本會の益盛大ならむことを希望し、會員ならざる人の益會員たらむことを欲す、此に於て予は入會金半減説を提出するものなり、抑々學生に向つて大枚一圓を出せと云ふは無理なり、入會したくて堪らぬと一圓と聞いて残念ながら先つくと思ひ止まる者多し、入會金一圓と定めたるは創立費用多く已むを得ざるに出でたるのみ、何時までも此儘と謂は、是れ自ら其身を殺くもの、會や衰へさらむと欲するも得へからず、既に第一回競漕をも施行したる今日、斷然此の拒絕法を緩め同志の健兒をして等しく蒼波碧瀾を蹶るの愉快を享けしめよ、若し夫れ已に一圓を收めたる者、彼是小言を云ふあらは予は其人に向つて今少しく公共心、義俠心に富まむことを切望せすむはあらず

何ぞ速に艇庫を建てざる、毎日三艇を砂上に引き下し又引き上ぐるは面倒ならずや、面倒なる可なり、艇の破損を如何せむ、嗟何等躊躇する所ありて速に艇庫を完全にせざる、姑息因循は海國男子の大敵なるぞ

メダル根性を起す可からず、養ふ可からず、メダル根性はマーク根性と同しく陋の陋なるものなり、人間をして卑屈ならしむ、社會に出ても胸間のピカ／＼したる人を頻りにエラがりお髯の塵をも拂ふ様になりぬ可し、メダル欲しさに競漕する如きは吾人の取らざる所、當局者もメダルの濫典を戒めよ

本校職員の数六十名を下らず、而して今回の競漕には僅かに六名を出せるのみ、吾人は之を無理とは思はぬと少なくも職員レースには職員許りにて行はれむとを欲す、彼の吾人をして私にポイント熱心の教員來れかしと謂はしむるもの亦

是非ないかな

競漕會の爲めに吾人は大に親睦友愛の情を増したり、競漕五六分間こそ敵にもあれ、其前後に於ては同一艇に共に練習を勵む仲間なり、其面を知り居りて其名を知らざりし人、其名を知り居りて其面を知らざりし人、其名と其面とを知り得たるのみならず、同時に其性質をも知り得て案外に大利益を受けたり、吾人は例令掌裡の豆膨癒ゆることあるも其交情は決して變せざる可く、否な寧ろ其交情の變せざるか如く掌裡に豆膨の癒えさらむことを欲す(煙波艇長投)

(編輯 〆切五月廿七日)



附錄
第一回大競漕會記事

附 第一回大競漕前會記事

想起すれは當に一星霜、昨廿八年七月十四日、帝國大學、第一高等學校等の諸豪、發起して琵琶湖第一回聯合大競漕會を施行せしことや、當時我校既に端艇會設立の計劃ありしも、事猶企圖經營に屬し、學生多くは未だ端艇を知らざる者、飛檄に接し委員某々幹旋是れ力めたりと雖ども、遂に一人起て其氣と其伎とを示さむとする者あらざりき、鬱たる唐崎の老松、巍たる膳所の古城、千秋の翠色剛健の徳を古武士に倣ふ海國男子の牌章は獨り我學生の胸間に輝かす。且つや東都諸豪の雄風、苦もなく關西を懾服せしめしを見ては吾人肉飛び骨鳴るの感なきを得ざりき

漕艇、好箇の遊戯なり、豈に唯遊戯と云はむや志氣は此か爲めに鼓舞涵養され、身體は此か爲めに鍛冶練習さる、端艇會の有無盛衰は偶以て

海國文明の程度と國民身心の強弱剛柔とを察す

へし、之を地理上より論するも英邁豪果なる國民を育し、四方環海の日本帝國、古來此か歴史に富む可きは當然なり、而かも爲政者一時の偷安姑息は子孫に流毒すること二百年、敢爲進取の氣風地を拂て銷磨し盡せり、可憐、桃源洞裡の怠眠は天下大勢の攪破する所となり、輿驚一番醒め來れば天賦の稟性凜として勃々、海事思想養成の必要は發して端艇會設立となる、西に東に巨川大湖の存する所、蒼海曲浦に瀕する所而して我金澤の地久しく此の企なかりしもの、抑々地勢の不利なるによるか、將た必要を感せざりしに由るか

市を去る北方一里許に一湖あり、河北瀉と云ひ又蓮湖と稱す、周圍七里東西に狭く南北に延ぶ、西方一帶の砂丘は北海を隔て前山後峯三面を繞る、淺野、森下、津幡の諸川注入し、其溢

れて海に通ずる者灣曲す、之を大野川とす、幅大凡三十間、長一里餘、橋梁三、岸脚蘆荻を生し、沙洲あり水流深淺を異にす、河口の大野村人口四百七十、其他五郎島、粟ヶ崎等の水郷ありと雖ども、固より寒村僻陬のみ、流を逐ふて下れば水勢激して駭浪砂を捲き横波一襲輕舸翻蕩す、春夏風穩に濤靜かなる時にあらずむは遠路航海は企つ可からず、之を要するに瀉と川と海と漕艇に最適なりと評す可からざるも、而かも眼界の變するに従ひ、或は悠悠蒼波に浮むて漁翁と談し、或は奔然悍馬の如く強漕萬身の勇氣を振ひ、時に怒濤狂瀾を劈きて力倆の熟達を檢せむに又以て得易からざる練習場ならずむは

に昨年四月廿三日日本會設立の企計發表となり、同九月より追次敷島、瑞穂、葦原三艇の成功を見、假りに艇庫を粟ヶ崎に相し後改めて大野村に定む

あらず、既に此の練習場あり、而して端艇會の設なかりし所以、知るへし見聞の狭き未だ其必要を感するに至らざりしことを、東西遊學の士陸續本校に負笈するに及び氣運漸く磅礴し、遂

一健兒か肩に載せらる、一部一年の「クラスチヤン」は鬱勃たる霸氣制し難く戰を同部三年及二年に挑み撰手にも劣らじと意氣込みたるは豪氣の程未頼母かりしも、種々故障ありて其結果一部三年と二部二年との戦ひとなりぬ、斯る内

にも第二學期試験は過ぎ去り、廿七日より四月八日まで春季休業は來れり、各部撰手は我後れ

づくに隨ひ吾人か痛痒を感じたるは天候なり、

じと大野村に下宿し旌旗堂々三方に割據して人知らぬ間に互に訓練軍容を廻らし、用意何れに愚はあらざりき、撰手此の如し、雜卒たりども安閑消光して敵に笑はれぞと、初參の面々日々

同十四日、雨降り風吹く午後は降りみ降らすみ夜は大暴風雨

に押し掛け待ちかけ競ひかゝるに、三艘の端艇今更數足らぬ心地するに況してや掃除塗代に時日を要し「オール」出來準はぬ腹立しさよ、貴重

同十五日、曇寒し

の一日を費して二十分交代の乗艇に四回漕けるは鼻高々なり、競漕日近づくに従ひ下宿する者

同十六日、今日も晴れやらぬ妙な天氣

次第に多く、廣からぬ町の南軒北亭洋服姿の出入は實に前代未聞と知られたり、曉起輕裝二里程を走せ、腕筋張り豆膨破れ、春とは云へど海

同十七日、晴夜弦月明かなり

風料峭たるに暴露したる元氣は感すへきも、俄

同十八日、午前は晴天にて暑かりしも午後次第に變して晚景には測候場頭紅球かゝり雨滴兩三仰く勇士か面に落つ

競漕日前一週間の天候。競漕日の一日と近

此日學校紀念日にして種樹式あり、漕艇練習を停止し一同出席、式終りて大野に向ふ

四月十九日。雨天順延の豫告は事實となりぬ

雨天順延の豫告は事實となりぬ

待ちに待ちたる當日は夜來の降雨蕭々として終

日霽れず、頑雲低く垂れて江面を蔽ひ、濃霧深

く凝て山野を罩めたり、三艇淋しく斜岸に横り

勇士空しく客樓に嘆す、一日の長きこと千秋の

如く、或は對局黑白を戦はし、或は鬪噓尺八を

弄す、「トランプ」を知らず骨牌を知らず、其之

を知るも此なき所、反故本を借出して讀むと雖

とも、倦み來れば等しく是れ仰天慄然、欠伸一

番雨を犯して外出すれば橋下碇泊の和船、寂寞

聲なく漠々濛々、陸には野翁耕耘に餘念なく水

には漁蓬脚軋幽かなり、忽ち見る蓑笠者、合羽

者、覺束なげに網を撒するを、是れ同窓か鐵腕

用ゆるに由なく僅に孤憤を漁獵に散する者、無

聊無爲に日は暮れむとす、一使あり、參會の令

を各舎に傳へ由水停上談は明日晴雨に關せず競

漕を明後日に延期し、明日は平常の通り授業あ

る可きを告ぐ、即ち匆匆夜に入りて歸澤す、而

して明くれは

四月廿日。霽雨既に歇むて前庭芳草鮮に、旭

曦玻璃窓を射て碧落白雲を排き、天候漸く晴朗

たらむとするもの、如し、而して時辰將さに八

時、俄然本日施行の命あり、校内號砲爆然天に

冲す、狼狽混雜を後にして一鞭急に馳せて大野

に着すれば彼此の準備未だ全く整はず、東奔西

走午に至る、事は創成に掛り衆は機務に熟せず

加ふるに天爲人爲の頓挫を以てす、而かも諸掛

員の熱心盡力と漕手諸氏の磊落仁俠とは一言恨

嗟の聲なく、勇や壯や愉々快々の裡に北陸未曾

有の大偉觀を了むぬ

當日の景况。大野橋上上流を見渡せば此處本

日の戰場と知られて兩岸の光景唯事ならずぞ思

はれける、數十の大國旗は翩々として海風に翻

り、中流に繫留せる一大和船、檣頭高く八方に

紅提灯を曳き張りたり、決勝線は其上にして左

岸に鐵砲、三色旗など携へたるは審判官ならむ

審判席の後方一町許の廣地は各學校生徒の席に

して、其れより上方は麥隴菜畝松林に連り、黃

波緑浪五郎島村を浮ふ、右岸は競漕者の溜場、

準備所、藥學部寄附のレモン店、豫備生設置の

賣店、賞牌授與所等より棧橋を渡りて四十間の

來賓棧敷に及ふ、後方一面は萬頃の水田にして

遠樹茅屋參差たり、嚴冬の名残止めて醒き群峰

は蜿蜒起伏して雌雄を争ふ者の如し、戰場たる

大野川は大水漫々たり、流れて盡きぬ先登の高

名を誰か傳ふらむ、輕舸小舫何時何處よりか集

まれる、舳艫相銜むて來往聲援盛なり、而して

絶間なき寒風は鍛ひに鍛ひし鐵身にも應へたれ

は沿岸横塘貴き賤しき觀客は左こそと氣の毒な

りき

次て會員總代築山直彦氏左の答辭を讀む

答 辭

正六位勳六等大島誠治

第四高等學校端艇會會長

發會式。競漕を行ふに先ち發會式あり、大島

本會長左の祝辭を朗讀せらる

風飈蕩花爛熳たる春光に際し我端艇會は茲に
發會式を兼ねて第一回競漕大會を大野川流れ

漫々の間に開き内外諸賢の臨場を忝うしたるは實に生等の欣喜に堪えざる所なり

由來本校陸上の運動は既に己に完備の域に達せりと雖とも水上の運動に至りては香として其計畫を聞かず遺憾空しく澎湃たる北海濛々たる運潮をして漁夫の蹂躪に一任せしめ鐵腕長權を揮ひて波浪怒濤を蹴るの快事を知らず遙に諸校の消息を耳にするに過ぎざりき而かも賑々の間氣運磅礴して昨廿八年四月廿三日本會設立の企計發表となり爾來歩武を進めて先づ敷島、瑞穂、蘆原の三艇の成功を告ぐるに至れり是れ實に大方諸賢の贊助と發起人諸君の盡力とに依らすむはあらず生等豈に赤誠以て感謝する所なくして可ならむや自今生等は學餘此の技に盡瘁し上は義勇奉公の聖旨に對へ下は内外諸賢の贊助と會長閣下の囑望及び發起人諸君の辛苦經營とに報せむと

とを期し并せて本日の競漕會をして和氣飄々の内に圓滿なる美果を收めしめむとを希ふ聊蕪辭を陳して答辭となす
明治廿九年四月廿日

第四高等學校端艇會々員總代築山直彦
式終りて直ちに競伎を行ふ

競漕番組。競漕會數を重ねるに伴ひ種々の情實纏綿し番組掛を煩はすものは番組撰定なり、一人の不當は其競漕をして競漕の實を失はしむて此情實を打破し毅然信する所を決行するは亦以て大男兒の本領ならずむはあらず、今回の競漕は第一回なるを以て未だ情實の甚たしきあらすど雖とも、會員の伎倆の評價茲に定まり範を後來に傳へ、且つ一步を誤まらば所謂情實なるもの、根原を作すなれば、當局者は苦心省慮數度變更訂正の勞を執りたり

回	第	能	手	整	調	五	番	四	番	三	番	二	番	艇	軸	艇名	航路	著順	時間
回一第	赤	重嶺	一祐	飛石	久太郎	東方	伊三郎	秋山	信次	河合	歷金澤	智融	福岡	録太郎	數	左	1		6.m
回一第	白	近藤	傳逸	光町	三郎次	齋藤	敬一	系井	仙之助	三島	爲雄	宇賀治	修造	矢浪	淑二郎	瑞	右	3	
回一第	青	谷野	格岡	田	光次	吉田	哲雄	寺崎	新策	吉田	幡誠	北川	健三	鷹取	鶴二郎	芦	中	2	
回二第	赤	佐々木	雄二	郎伴	房三郎	増田	知藏	山科	祐二	内藤	昌太郎	横山	正夫	藤田	良平	瑞	右	1	6.40
回二第	白	戸川	文次郎	山本	亥太郎	浦井	鏑次	浦	五郎	永野	八郎	藤井	梅三郎	平澤	象郎	芦	左		
回二第	青	青木	澤五郎	水木	常信	高橋	清一	河原	始二	竹俣	吉松	小松	倍一	中村	光吉	數	中		
回三第	赤	中大路	正雄	田邊	輝雄	勝俣	又三郎	大塚	晃長	永松	文一	中山	清藏	森	源之助	芦	中	3	
回三第	白	佐治	脩三	住田	寅二郎	佐藤	周輔	吉川	貞二郎	矢浪	淑二郎	寺崎	新策	中村	孝	數	右	1	5.35
回三第	青	飛石	久太郎	徳岡	精彦	高橋	享二	朝長	勘十郎	宮崎	逸丸	橋	左内	淺田	八十八	瑞	左	2	
回四第	赤	下村	繁太郎	光町	三郎次	今井	三郎	稻垣	文次郎	長谷川	茂一	郎金澤	智雄	東方	伊三郎	數	右	2	
回四第	白	吉田	弟彦	五十嵐	嘉一	鹿取	龍造	丸山	義男	紅林	豊治	林	直谷	野	格	瑞	中	1	6.15
回四第	青	澤田	堅太郎	中山	佐之助	大島	辰之助	鈴木	一吉	秋澤	貞猪	早瀬	完二	藤田	良平	芦	左	3	
回五第	赤	石黒	健會	根	廉郎	松村	大吉	近藤	傳逸	加藤	範治	郎柳田	友慶	築山	直彦	數	中	1	5.15
回五第	白	近藤	他家雄	田宮	春策	久保田	整岡	田	光次	中野	玄次	鈴木	小一	竹俣	吉松	瑞	右	2	
回五第	青	田中	正太郎	赤澤	欽次郎	江間	圭一	吉川	貞二郎	栗本	貫一	石井	循岡	慶	治	芦	左	3	
回六第	赤	傍士	完治	吉村	盛男	近藤	常吉	秋山	信次	橋本	正治	河原	始二	村橋	素吉	數	左	3	
回六第	白	曾根	廉郎	住田	寅二郎	伊藤	三郎	中村	孝佐	藤	信安	小松	倍一	大森	保之助	數	右	2	
回六第	青	小藤	孝徳	瀧山	與佐々木	雄二	郎柏	原	省私	佐治	脩三	寺崎	新策	小松	然三郎	芦	中	1	5.30

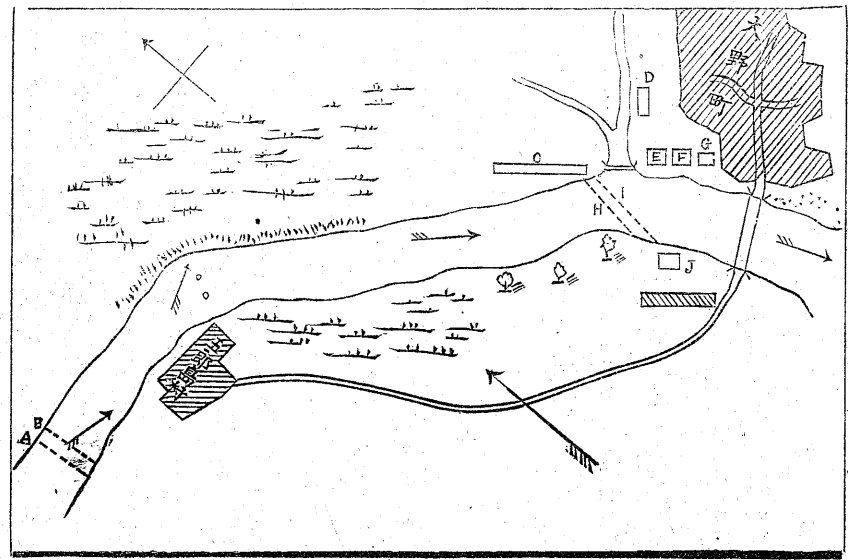
第十回	第九回		第八回		第七回		
	赤	青	赤	白	赤	白	
赤 谷野 格飛 石久太郎 中大路 正雄 五十嵐 嘉一 築山 直彦 佐治 修三 中村 孝 瑞 敷	青 近藤 常吉 傍士 定治 久保田 整 藤井 梅三 郎元 田 龍佐 高梨 恂 一大 森保之助 瑞 敷	赤 江間 圭一 近藤 他家雄 石 黒 健白 井 精一 戸川 文次 郎 柏原 省私 栗本 貫一 敷 瑞	白 鈴木 小一 田宮 春策 田中 正太郎 老田 太文 澤田 堅太郎 山本 亥太郎 高松 勇 瑞 敷	青 久保田 整 小藤 孝徳 中野 玄次 鈴木 一 吉 淺田 八十八 田 恒齋 藤敬一 郎 敷 瑞	赤 柳田 友麿 高橋 堅河 合 齋橋 本 正治 矢浪 淑二 郎 横山 正夫 高橋 清一 瑞 敷	白 松村 大吉 中山 佐之助 丸 尾 晋白 井 精一 宮崎 逸丸 浦 五郎 秋澤 貞猪 敷 瑞	青 下村 繁太郎 朝長 勘十郎 加藤 範治 郎 老田 太文 中大路 正雄 系井 仙之助 橋 左内 瑞 敷
白 吉田 弟彦 瀧山 與今 井三 郎 澤田 堅太郎 鹿取 龍三大 塚 晃長 村橋 素吉 瑞 敷	青 近藤 常吉 傍士 定治 久保田 整 藤井 梅三 郎元 田 龍佐 高梨 恂 一大 森保之助 瑞 敷	赤 江間 圭一 近藤 他家雄 石 黒 健白 井 精一 戸川 文次 郎 柏原 省私 栗本 貫一 敷 瑞	白 鈴木 小一 田宮 春策 田中 正太郎 老田 太文 澤田 堅太郎 山本 亥太郎 高松 勇 瑞 敷	青 久保田 整 小藤 孝徳 中野 玄次 鈴木 一 吉 淺田 八十八 田 恒齋 藤敬一 郎 敷 瑞	赤 柳田 友麿 高橋 堅河 合 齋橋 本 正治 矢浪 淑二 郎 横山 正夫 高橋 清一 瑞 敷	白 松村 大吉 中山 佐之助 丸 尾 晋白 井 精一 宮崎 逸丸 浦 五郎 秋澤 貞猪 敷 瑞	青 下村 繁太郎 朝長 勘十郎 加藤 範治 郎 老田 太文 中大路 正雄 系井 仙之助 橋 左内 瑞 敷
4.45		5.40	6.10		6.		

會長 大島 誠治 副會長 高安 右八
 評議員 秋山正議、木村竹治郎、今井省三、野田忠廣、佐野安慶
 理事 中大路正雄、佐治脩三、鶴見左吉雄、福岡録太郎、古澤健次郎、近藤他家雄
 審査長 谷岡 少佐
 審査掛 吉井中尉細野少尉福岡教授野田教授磯田講師福見助教授日下助教授宮川助教授、石黒健、鈴木小一、曾根廉郎、飛石久太郎、田宮春策、朝長勘十郎、瀧山與、柳田友麿、小藤孝徳、久保田整、田中正太郎、近藤常吉、赤澤欽次郎、下村繁太郎、澤田堅太郎

前後十六回の豫定なりしも開會の時刻遅れたれば六回を後日に譲るの已むを得ざるに至りぬ、即ち今は施行の十回を記す

航路、水勢及艇癖。五郎島村沿岸より大野橋上流に至る千「メートル」直航とす、但し河幅狭くして三艇並行を許さざるを以て左圖の方法に由り出發線及び決勝線を各二處に設け中流艇をして他二艇より五十「メートル」の距離を保たしむ、水勢も左圖に示すか如く、滔々として五郎島村岸を突き岸に沿ひて下ること二百米突許二本杭邊より斜めに左岸に移り七百米突許を走せて遂に航路外に出づ、殊に當日は雨後にして水積増加し勢熾に、加ふるに北風烈しかりければ舵手の責任一層重く勝敗の決一に其伎倆如何に關せりき、艇癖は

敷島、Bow強ければ進行は尤もよし
 芦原、船足尤も重し
 瑞穂、Stroke強し



A、第二出發線 B、第一出發線 C、來賓席(機敷)
D、艇庫 E、賞品授與所 F、賣店 G、準備所
H、第二決勝線 I、第一決勝線 J、審判席

第一回競漕

十二桡の和船は徐々として漕き出したり、白赤、青の三艇は順次一直線に曳かれ行く、艇上の勇士是れ真に我様第一回競漕會に第一回の戦勝者、又第一回の失敗者たるべき者、數へ來れば廿一名、銅顔鐵骨何れか勝ちて何れか負けむ

零時十分、號砲一發九天に響き渡れば萬籟寂として衆目齊しく上流に嚮ふ

白の調子初めより整はず、進むこと三分にして赤に抜かるゝこと一艇身許、白心焦りて強漕力めたれども赤は「ベストカレント」に乗して遂に胸間擦たる「メダル」を懸く、其得意想ふ可く而して失意の漕手は青原の七名

第二回

先きに全力を傾注したれば今は元氣乏しく、白と青とは相拮抗して面白かりしか白遂に半艇身を抜きて青を敗りぬ

第四回

出發線まで引舟にて溯るには少なくとも二十分を費し一回に要する時間三四十分に下らぬは觀客の欠伸は關せずとするも豫定の回數を終了する能はざる恐れあり、依て今回は試みに舟師を各艇に分乘し長權を振つて急き漕かしむ、斯くて出發線へは速に着したれども乗代への面倒ありて時間の節儉にならず、次回より元の如く引き舟とす
中流を取りたる白は後方より「ヘビー」の掛聲勇ましく赤の追及し來るを見て一生懸命強漕をなし、殆んど終始「ヘビー」にて決勝線に逃げ込みたり、赤の四番決勝線近くにて「オール」を流せしは残念々々

赤と青とは強漕を以て始め中程に於ては二艇殆んど同時に白に追及す、白は整調顛倒し次々に二三權を流せし者あるを以て一同斷念し風のまに青の航路に吹き寄せらる、青は必勝を期して勢鋭く進行せるか此障碍に逢ひて中流に出てむ餘裕もなく、白と左岸とに挟まれ遂に接觸するに至れり、此に於て赤の獨舞臺となり、悠々「ロング」を以て決勝線に着す、六分四十秒を要せるは二艇の接觸を見て調子を緩めたればなり

第三回

前二回赤の勝利は輕舸及び堤上の小兒をして赤々の聲援を爲さしめし間に白は猛然突進し勢頗る可なりしか、二本杭邊にて審判船の爲めに航路を妨害され、之を避けむとして杭に近づき左舷三人は共に顛倒したり、審判官即中止の喇叭を命し、改めて競漕を初む、赤は

第五回

撰手三名若くは四名乗り込みたる今回は本會中面白き競漕として注意されたり、流石に何れ劣りはあらざれども白の「スタート」は特更に美事に、赤は調子大に整ひたり、百米突許にて白青を抜き其れより三艇赤、白、青の順を以て進む、而かも青遂に白に及はず白遂に赤に及はずして砲聲響く、五分十五秒

第六回

二百米突許にて白赤を抜き三艇とも相去る十間許青遂に他を制す、「スタート」は青尤もよく白之に次ぎ赤悪し、赤の舵手の泰然迫らざる最後に在りて「急くな」を掛け、來賓席に近づき「ヘビー」一聲他を抜かむとして漕手の既に疲れたるに呆れたるも可笑しく而して青か二本杭に當りて四番顛倒し勢頓挫せるに係らず、更に勢力を回復して勝利を博したる

は驚く可し、况んや其艇芦原にして芦原の勝ちたるは十回中今回ののみなりしを見ては其名譽大なりと云ふ可くして而して浮標の位置正しからざりしと聞きては何とも云へず

第七回

中流の浮標何時となく十間許りも流れ居ることを發見し測量を仕直す、是れ水勢の猛烈なるに因らむも其責任は測量隊之を負はざるべからず、四、五、六、三回を連ねて中流艇の勝利を得たる所以、必ずしも伎倆の優れたるに由ると斷言し難きにあらすや、今後一層注意周到ならことを望む

白「スタート」よし然るに四番櫂を流せし爲め少しく遅れたるも直ちに回復して赤を抜く此間に中流の青か右流に出たたるは左岸に吹き寄せらるゝを避けしならむも殊更に遠航路を取りたるやに覺ゆ但し強漕を以て勝を得たり

第八回

前七回中には浮標を取る爲めに其周圍を上下し徒に時刻を移したるものありて甚だ感心し難かりしか今回は三艇とも上手なり、就中青か一度紐を切りて直ちに之を取り返したる時の如き、審判船上の水主等一齊に其巧妙を稱して曰く、是れ本日の第一等なり、其顔の色黒くして其舳の偏強なる、彼の舵取は船乗の子に相違なし、素人の子にはあらじ必勝くと、果して其噂の如くなりき、予は青舵手萬福を呼はざるべからず

第九回

右側前面より吹きすさびたる海風は此に至りて漸く方向を變し順風となりかけたり、艇上如何なる武者やあると窺へは何れも撰手四人を乗せたり、第六回に對して此れも本日の見物なり

赤「スタート」あしかりしが二本杭邊にて青を追ひ起す、青は之を回復せむと力め二艇の競争酣なるに當り中流の白は中原の鹿我こそと猛進し白勝ちと見えたるも戦勝の名譽は赤の手に歸しぬ

第十回

江鳥既に晴に歸りて晚霞遠山に棚引き、暮色近く來りて糝糊前浦を閉つ、若し圓團々たる満月ありて皓々地を照さむか、吾人は寧ろ喜んで萬丈の金龍を斬らむ、而かも八日の弦月は浮雲之を蔽ふて微光だも漏さず、十六回の競漕は十回を終らして我事已矣を嘆せしむ遮莫、第十回は法科三年と二年との「シラッスレース」なり、撰手に次て最も多く練習習古せる仲間なり、撰手競漕に及はずして日の暮れたるは競漕後會ある所以、此に於てか今回は本日の最大合戦なり、殿戦なり、最大

偉觀なり、壯觀なり

左流なる赤は「スタート」に於て「バンク」に動搖を生し、最初二三本櫂の亂れたる間に右流なる白は脱兎の勢を以て漕き出せり、其出發の敏捷迅速なる瞬く内に赤を抜くこと三艇身、忽ちにして二本杭を過ぎ、充分の餘裕を以て「ベストカーレント」に移り赤の面前にて「シオートヒット」を續けたり、赤は調子全く整ひたる時既に「ベストカーレント」に達し居り次第に其調を急にし其力を強くし、六七百米突を過ぎては満身の金剛力を揮ひて白に急追せり、而かもあゝ而かも砲鳴り旗動き勝敗は定まりぬ、赤は白に後るゝこと二艇身許日は全く暮れて大提灯は空しく來賓席を照せり凱歌唱ひ止むて人影四散し、新戦場は昔も今も同し流れに勝敗の迹もなく、澎湃たる濤聲と颯颯たる松風とのみ千代萬代に盡きぬ節をぞ奏しける

ず、見えざりしなり、即ち知らざるなり、前會に於ても審判船は常に遙かに後れたり、而して予の不才なる前會記事は彼か如く諸氏は囑望に背くこと大なり、然るを况んや今回は萬事簡易の餘り審判船の競漕艇に従ふものなく、一千米突の長距離を出發所若しくは決勝線近傍にありて觀察せざるべからざりしをや、且つ予頃者流行感冒に罹りて筆を執るに懶し、隨て益々粗畧なる所以、諸氏請ふ諒せよ

第一回競漕

題して寄宿舎餘興レースと云ふ、其競漕の可笑なる知るべきのみ、舎内の會員相會し、

第二回

抽籤役割を定む、曰く何艇の舵手、曰く何艇の何番、曰く何艇の御客様、と悉く之を三艇に分乘す、此に於て右舷者にして左を漕くあり、左舷者にして右を漕くあり、未た一度も舵手たらざる者舵手となりて俄かに操法を先

用意の喇叭にて青は一擲を入れたるか如し、其かあらぬか出發も甚たよく、航路を取ることも頗る巧に、暫らくにして他を抜き決勝點に近づきては赤及び白の左に出でたり、而して五六艇身の勝ちは未曾有

第三回

青出發あしく白は忽ち之を後にして進む、赤は頗る陸に沿ふて進みしか此も白に抜かれたり、決勝點に近づき青は強漕を力め白は權亂れて危かりしか而かも凱歌は其艇員の口に唱はる

第四回

法科の「クラッスレース」、但し三年は二部との混成、白は初めより勢悪く青と赤との競争愉快なり、一年生は青と呼び三年生は赤と叫ひ、何れを何れとも分たざりしか青遂に半艇身の勝を占む

第五回

相變らす右艇と中艇との競争にして左艇は後る赤白の拮抗は決勝點に於てキワドク白の勝となり青は二艇身許後れたり

第六回

輩に學ぶあり、斯くして競漕は滑稽を以て始まる

中航路の赤は早けれども次第に沖の方に出かけ、左航路の青は後より進むて赤の右に出でむとし、次て各舊位置に復す、ピッチは整はず權は高低し、航路は蛇の如くウチリ行く、其内にも白の舵手は割合によく六分を経て決勝線に入る、次て赤、次て青

第一着者の賞品は齒磨粉に手拭、第二着者には草鞋五足、而して第三着者は罰金一錢を課せらる

水陸の群衆は俄かに動搖めき初めたり、果然

待ちに待ちたる撰手競争の來れるなり、若し平素の練習上より推せば青(豫備)は熟練を以て自ら任せしもの、如く、赤(一部)は腕力を以て之に當らむとし、白(一部)は巧に其間に處し機に臨み變に應じて戦勝の榮を占めむとするもの、如くなりき、而して抽籤により赤は右流芦原、青は中流瑞穂、白は左流敷島と定まれり

此日左流は最も多く風を受け漸次沖に出るの不利あり、然れども艇は敷島にして三艇中最可なるもの、中流は又右流に比すれば風を受くると稍甚たしく左に吹き流さるゝ不利あり而かも艇は瑞穂にして敷島に次くもの、右流は風を受くると最も少なしと雖ども艇は葦原にして他二艇より船足大に遅し

他に先して白の聲援をなさむと三艘五艘輕舸

を飛せたるは二部生なり、之を見し一部と豫備とは如何で黙して止まむ、忽ち十數艘の小舟は沖と岸とに散開し航路を狭てひしめき合へり、赤勝て白負けるな青まつかりなどあらゆる獎勵詞のうち三艇は各浮標を取れり、用意！號砲！赤は權を少しく前に出し極めて軽く第一漕を終り第三漕に至り始めて充分の

以てSteady pullをなし、青少しく先して漸々進みしか決勝線前に至り赤少しく其方向を右に取ると同時に青白各其機に乗し強漕を試しも赤又強漕を以て之に應せしかは大勢遂に動かす可からず、二艇身許の差にて赤一青二白三着となり、金牌は一部撰手の胸間に閃き摸擬靈鷹は一部の有となれり

第七回

フオクワイドバックワイドを用ひ其出發宜しきを得たるを以て最も遅き赤他の二艇より先に出て青白殆んど相並むて出てたり、斯の如くにして赤白はSteady pullをなし、青はStart Heavyを試み、二百米突にして赤は青を抜く一艇身白は又少しく青に後れたり、殆んど四百米突にして白青殆んど同じく赤は依然二艇身先にあり、遂に五百米突にして赤は強漕を始め三十二のStrokeは忽ち卅九となり、他艇を抜くと三艇身、青白は各卅二三のStrokeを

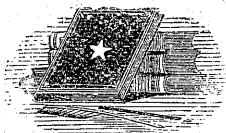
稱して職員競漕と云ふ而かも職員の乗り給ふ者僅に三名宛なり、吾人は我校職員に其人なきを悲むと同時に六名の職員諸氏か率先奮發されたるを感謝す、最初吾人は思へり、平時練習なき諸氏は必ずや往復二千米突に堪えずして中途に止まる如き奇觀あらむ、滑稽を以て始まりたる本會は滑稽を以て之を終らざるへからざるかと、而して是れ全く吾人の空想なりき、左艇の舵手は秋山教授、整調野田教

授、五番福見助教授、右艇の舵手は福岡教授、整調目下助教授、五番宮川教官、他は學生野田教授の高名は兼々聞き及ひしか流石右艇は調子整へり、然るに左艇はオールも高く調子最も整はず、目下助教授の舳操的なる、宮川教官の船頭流なる腹藏なく云へは他の者は調子を合はすに餘程困りたるか如し、勝敗の差二艇身許

敵子を北陸にのみ求めむや、遠くもあらぬ琵琶の湖、期も近づきぬ聯合會、東西南北の健兒輩か國の元氣を此に進めて挑み戦ふ其間に天晴勇將猛士か高名を挙げむなり、嗚呼豈に此の如くにして止まむや、日本海の荒波に鍛ひに鍛ひ、鍊りに鍊たる豪氣大膽鐵石の身、進むて世界の鬼共を取り挫かむなり、昨夏湖上聯合競漕の當日杉浦天台道士遙かに祝電和歌一首を寄す、今在帝國大學の一友加藤某更に之を北海同志の建兒に贈らむと云ふ、其歌に曰く「西北の風は寄來る白波を心して漕け秋津島人」

曇天なりしも幸に降雨せず六時過ぎに目出度第一回競漕會を終了す、之を要するに今會は三航路ともカーレントに左まで相違なきか如きも勝利は必ず右、中の二者に歸して左は連戦連敗せり、

將さに歸らむとす、一人歎して曰く嗟呼美なる哉、山川、是れ我輩の好戦場、獨り恨む、外敵の共に相當るに足るものなきをと、夫れ然り而かも戦場は蓮湖と大野川とに限らむや、又何ぞ



福井地方行軍記事

甲午の春四月、我軍能登地方に軍を行りしより年を閲すること茲に二歳、其間我軍の、或は朔北の窮野に入り、或は臺南の瘴地に進み、連りに敵軍を撃破せしに報に接し、雄心落落として抑ゆる能はず、半宵蹶起長銃を彈じて北斗を睨せしも、實に幾度なりしぞや、然るに當時兵式教官の招集に應せられしもの多く、加ふるに事情萬聚し來りて、遂に長途の行軍なく、僅に金石附近に於て、一兩度の演習を試みしも、意氣殊に昂れる六百の健兒、焉んぞ以て甘心することを得ん、空しく髀肉を撫して、轉無聊を嘆じたりき、昨秋梧桐葉戰て、蕭殺の氣一度蒼旻を拂ふや、我兵式教官多くは既に歸校せらる、此處に於て行軍の噂は再び校内を動し、壯心勃々肉飛ひ腕鳴れり、思ひきや虎疫遽に猖獗を極

め、欣抃措く能はざりしの豫想は、亦もや水泡と消えんとは、嗚呼々々幾多の青衿は、失望に續くに失望を以てして、空しく越路の冬に入れり、然るに今や青帝駕を廻して乾坤復たひ春なり、風は駘蕩として花自綻び、四邊の光景麗々として、男子一日も徒爾なるへからず、期なるかな期なる哉、一片の揭示は控所に翻れり、曰く四月廿六日を期し、福井地方に八泊の行軍をなすと、待ちに待ちにし我健兒は、如何に熱心を以て之を歡喜せしぞよ、唯踴躍其日の來るを俟つに切なりき

如し

大隊長
同副官
旗手

磯田正謙
鶴見左喜雄
三好久朋

衛生部助手

同 同 同 同 同
測量手
書記

第一中隊長

第一小隊長
第一分隊長
第二分隊長
第三分隊長
第二小隊長
第一分隊長
第二分隊長
第三分隊長
曹長

附 録

島田吉三郎
末岡外次郎
田上 涉
堀 直 江
東 良 平
本多 勝 久
渡 部 鏞
石黒爲次郎
河原 始 二
春秋原在文
福見常太郎
佐藤 信 安
飛石久太郎
茨木清次郎
朝長勘十郎
佐々木 雄 二 郎
野村 淳 治
武内 梅 吉
佐藤龜久次
永岡 堯
石 井 直
吉田 弟 彦
横山 正 夫
中川 忠 順

給養掛

第二中隊長
第一小隊長
第一分隊長
第二分隊長
第三分隊長
第二小隊長
第一分隊長
第二分隊長
第三分隊長
曹 長
給 養 掛
第三中隊長
第一小隊長
第一分隊長
第二分隊長
第三分隊長
第二小隊長
第一分隊長
第二分隊長

石 黒 健
日下庄太郎
北島常晴
横田利三郎
栗本 貫 一
曾我部俊雄
田鶴濱治吉
吉村 盛 男
伊藤 三 郎
下村繁太郎
稻 並 幸 吉
松 原 武
原田 永 治
稻垣文次郎
山科 祐 二
中村 光 吉
宮川 爲 三
鈴木寛之助
永 井 環
辻 岡 律
平井正澄
中野 玄 次
生 沼 曹 六
橋本喜久三

第三分隊長

北川 健

第三小隊長

深美貞之助

第一分隊長

大塚 正一

第二分隊長

武田 正壽

第三分隊長

吉田 幡成

曹 長

橋 薫

給 養 掛

室田 萬三郎

本 部

統監部長

福岡 清一郎

同 部 員

浦井 鎧一郎

指揮官

岡 部 忠

兼審判官

磯田 正謙

設管部員

佐野 安麿

衛生部員

堤 從 清

會計部員

蒲原 重實

視察員

藤 井 鏡

同

岩崎 法賢

同

松本 善次郎

同

堀 米次郎

同

山瀬 時吉

同

岡村 金太郎

同

須藤 求馬

同

村田 金太郎

同

秦 秀 穂

四月廿六日、前日の兩名残なく晴れて天候殊に麗に、風は習々として軽く面を拂ひ、身心爽快

天公亦此の行を惠する處あるが如し、皆結束校に昇り武裝して令の下るを待つ、午前八時三十分一同を校庭に整列せしめ、武裝の検査あり、

終て大島校長の告諭ありたり、曰く

今度の行軍には、必ず諸子と同行するの覺悟なりしも、遽に上京の命ありて意を果さず、

公用如何ともするなきも、衷心甚だ遺憾なり唯廿八日の出發まで些の猶豫あれば、せめて

其までなりとも、諸子と行を共にせん、行政の事は總て統監部に委任す、希くは諸子、凡

て兵式上の規律を守り、能く幹部の命を遵奉せよ、而して各幹部は堅く其權限を守りて、

互に相犯す勿れ、終に云ふまでもなき事ながら、諸子の歸校は、小松宮親王殿下が、御來

澤の頃なるべければ、萬事意を注で本校の不

に派遣す、北軍は之を追撃せん爲め四月廿六

日金澤を發す

面目を、御通路に止めざるやう心掛あるべし

次に福岡統監部長進みて曰く

余は行軍の員中に加はる、實に此回を以て初

とす、故に不行届の事も多からんが、既に之

大任を受けし以上は、飽くまで諸君の爲めに

勉めんとす、諸君希くは唯今の告諭を體し、

軍隊の事に就ては指揮官の命を奉じ、圓滿に

此行を終へられん事を望む、而して福井地方

は初めての行軍なる由なれば、彼地方の人士

は大に注意すべければ、此方に於ても深く心

を留めて、地方子弟に好模範を示すの、覺悟

ありたし

此に於て一般の方略は、各中隊長に示され、九時大隊は磯田大隊長の號令を以て、喇叭一聲校門を出づ、隊伍整々、威儀堂々、豪壯の氣高く天を衝く、一般方略は左の如し

北陸街道を背進する南軍は、一枝隊を濱街道

に派遣す、北軍は之を追撃せん爲め四月廿六

日金澤を發す

九時半有松郊端に小憩して松任に向ふ、新緑色

鮮にして菜花十里に連り、道は塵埃を流して天

に片雲なく、雨後の好景頗る心目を爽かにす、

况んや微風髪を吹て蝴蝶行に戯れ、啼禽耳を怡

ばしめて足自軽く、神澄み身胖にして快云ふべ

からず、四日市村に一休し十二時松任に着す、

即ち郊端に綠艸を敷て午食を喫す

食後軍を南北に分ち、磯田教官審判官に移らる

南軍は第二中隊及び假設一中隊(旗)より成り、

日下教官之を率ゐ、北軍は第一及び第三中隊よ

り成り、福見教官之を總ぶ、共にこれ兩軍の枝

隊にして、北陸街道にある本軍(假想)の、側面

掩護の爲め、濱街道に派遣せられしものなり、

地はこれ旭將軍が、平家の大軍を追撃せし故

道にして、今尙木曾街道の名を残すどころ、

白山の體々や比羅河の蕩々や、敢て六百年の舊觀を改めず、嘗て源平の激戦を熟察せし之眼を以て、今や我核の演習を注視せんとす、知らず三百の健兒、如何なる飛動を企て、此の山河に耻ざらんとする

南軍特別方略

一 北陸街道を背進せる本軍は、午後三時手取川に達す、四時三十分に至れば、全く渡川を終るべし(手取川橋梁は當時破壊し居れり)
 一 左側掩護の爲め濱街道に出せる枝隊は、美川附近に於て敵の攻撃を扼せんとす
 一 情報によれば、敵は今朝金澤を發し、右側掩護の爲め一支隊(約二中隊)を、松任より分遣せるものゝ如し

北軍特別方略

一本軍の先頭は、正午十二時松任の南端に達し右側掩護の爲め一支隊(二中隊)を美川方位に

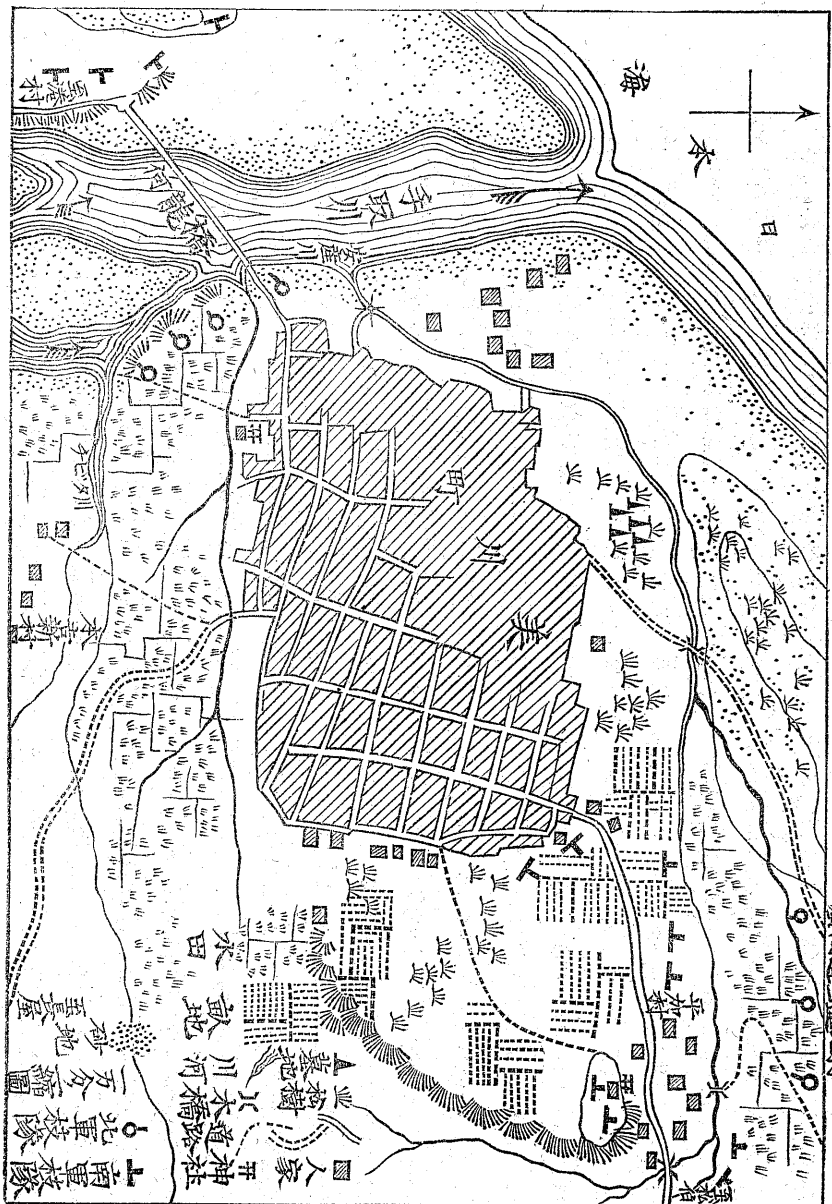
派遣し、當面の敵を撃退せしむ

一 情報によれば、敵の左側枝隊は、美川方位に退却せしものゝ如し

午後一時、南軍は隊の部署を終へ、第三小隊を後衛とし、日覆を帽に附し、美川に向て背進す同三十分、北軍は第一中隊第一小隊を以て前衛とし、行進を始む、行く々々警戒して二時二十分笠間村に達す、即ち尖兵を村端に止めて一時敵の状況を窺はしめ、更に第二小隊を尖兵とし支道より濱手に向はしむ、蓋し木曾街道の徒に兵勢を暴露せしめて、攻撃に不便なるを思ひ、且つ敵の意表に出で、大に奇利を占めんとす、策を取りしなり、此に於て第二小隊は、普く搜兵を出して、隴畝の間を潜行せしめ、松本石立の諸村を経て蓮池村に向ふ、三時十分村を過ぐれば、前面に小丘あり遠く海岸に連る、地勢頓に改まりて皆敵の近きを想見す、即ち竊かに桑楦

の間より瞥見すれば、敵は之の小丘を距る六百米突許の高陵にあり、尙進みて海邊の砂丘高さ略敵と同じきものに據れば、彼の行動歴々として悉く明なり、而も敵猶部署に勉めて未だ我を知らざるものゝ如し、即ち前衛長は情報を齎して、射撃開始の命を請はしむ、使者三度に及びて猶隊長の命を得ず、終に前衛は意を決して、爆然射撃を開始せり、時に三時四十五分なり、是より先き松任を發せし南軍は、笠間村を経て二時五十分平加村に達す、透曲せる木曾街道は此の地に至り、僅に四百米突を餘して美川町に盡きたり、而して地勢道の右側に隆まり一丘を爲し、疎松之に生して自然の障蔽をなす、上りて前面を望めば、街道十餘町の地、瞭然として手に取るよりも明なり、左側村端突出して敵彈を避くるの便を有し、形勢頗る雄偉なり、即ち此の地に於て敵を扼せんと欲し、防禦の命を下し、

第一小隊を本道右側の丘端に、第二小隊を本道左側の村端に、第三小隊は其一分隊を本道上村端に配置して、敵の追撃をば扼せんとし、其二分隊は村落中央の丘上に、假設中隊は右側丘上の日吉神社に、並ひ駐りて援隊となる、部署既に定り勢頗振ふ、皆腕を扼し眼を張りて、敵軍の至るを待ち、今にもあれ開戦の命來らば、直に十字火頭に敵を陥れて、之を殲さんと意氣込めり、されば北軍は假令十倍の衆ありとも、をさへ進み難くぞ思はれける、然るに何ぞ圖らん北軍は、敢て此の道に出ずして、遙かに左方なる海濱の丘上に現はれんとは、之を見しの南軍は如何に周章狼狽なせしぞよ、嗚呼北軍の計畧は實に能く、其圖に當りしなり、若し北軍をして其敵を發見するや、直に射撃を始めしめば、南軍の混雜は實に名狀すべからざりしならん、而も北軍は未だ隊長の命を得ずして躊躇せり、



第一日演習地

一 髮千鈞の危期は既に去りぬ、事になれたる南軍は、驚きながらも速に陣を移せり、第三小隊は直にさきの小丘に散開して、早くも海濱の敵に當り、右側丘上の假設中隊は、遙かに退却せしめられたり此の利那北軍は猶豫なく、猛烈なる射撃を開始せり、然るに如何したりけん、南軍は此危急の時に當り、傳令の錯誤より第三小隊をして、一度丘陵を引擧げ、更に亦之に散開せしめ、熾に北軍の砲撃に應せり、此の時に當り北軍は愈進みて、第一中隊の第一小隊は前衛(第二小隊)の右翼に、第三小隊は左翼に散開し、松樹を楯とし次第に岡を下り、漸く敵に近づけり、而して第二中隊は、其第一小隊を一中隊の左側に進め自餘の二小隊を援隊とし、蜿蜒々長蛇の陣を張て南軍を砲撃せんとす、然れども前面に水田を控えて、大に進撃の勢を沮まる、依て第三小隊は意を決して、一直線に畔徑を馳せ、

村落中央の丘上に向て突撃せり、此に於て南軍は全く退却して、美川の入口に至り、第一小隊を同じく道路右側の畑地に、第三小隊及び假設一小隊を道路左側の畑地に散開せしめ、尙假設一小隊を郊端の途上に残し、餘の二小隊は之を湊村附近に退かしめたり此の間に乘して北軍は、安全に水田を涉り大に敵と接近せり、兩軍の發砲殊に烈しく、硝煙地を蔽ひ銃聲天に轟く、暫にして北軍悉く着刃し猛然馳せて畑中の敵を襲ふ、夕陽劍芒に映して勢潮の如く、吶喊地を震はして短兵急に逼る、南軍倉惶兵を收め、疾く馳せて湊村に退かんとす、北軍之を追て美川の入口に及ぶ、忽にして喇叭一聲休戦の命下る、時正に四時なり、海風煙を拂て神心頗る快く、十里の菜花夕陽に照されて、滿目黃輝々たり四時十分再び開戦の命あり、北軍は第一中隊第一小隊を以て前衛とし、市内を警戒して湊村に

向ふ、夫れ湊の地たる手取川左岸の一邑にして所謂何龍橋を以て美川に連り、丘陵海岸に拔へ、頗る防禦に適す、今や南軍は退て此地に據れり、知らず北軍たるもの何の奇策かありて此を撃退せんとする、四時三十分北軍は進みて何龍橋畔に至れば、南軍は二流の紅旗を海風に翻し、第一小隊と共に道路左側の高丘に散開し第二小隊を手取川左岸に、第三小隊を其後方の丘上に配置し、尙假設の一小隊は之を人家の後方に伏せしめ、用意をさく息なく、名におふ手取の大川を控へ、見事此處に北軍の追撃を扼止せんとせり、されは北軍に於ても、直に部署を定め、第二中隊の第一小隊は、橋の正面に排列し、第二小隊を其左翼に、第三小隊を其右翼に各散開せしめ、第一中隊を以て援隊となす、四時三十分射撃開始の令下り、稍暫は砲戦に時を移せしが、河は濁流を漲らして、日本海の怒濤と激

し、風は獵々として四月猶膚を裂き、銃聲一種の呻を帯び來り、轉々憐惻の想あらしむ、而して南軍は倔強の高陵に據り、敵を眼下に狙撃するの形勝に引きかへ、北軍は充分に敵を射撃せんとせば、身を廣漠なる河畔に暴露せしめざるべからず、亦敵彈を避けんとせば、市街に退て勢攻撃を弛めざるべからず、况んや橋梁を衝て敵軍に逼るは、地勢の萬々許さいるところ、百方策なく逡巡時を移せば、兩軍の彈丸既に竭き、唯海風の淋瀝として夕陽の潮に咽ふあるのみ、此に於て交戦何時しか息み兩軍は戦闘前哨に移れり、即ち南軍は小哨を何龍橋の西方、約三百米突の丘阜に設け、其歩哨を手取の左岸に配附し、前哨中隊は湊村の東端願淨寺内に駐まれば、北軍も同じく小哨を美川の西端に設け、歩哨を河岸に張り、前哨中隊を藤塚神社にとむ、既にして暮色蒼然として淡靄四面を罩め、白山獨

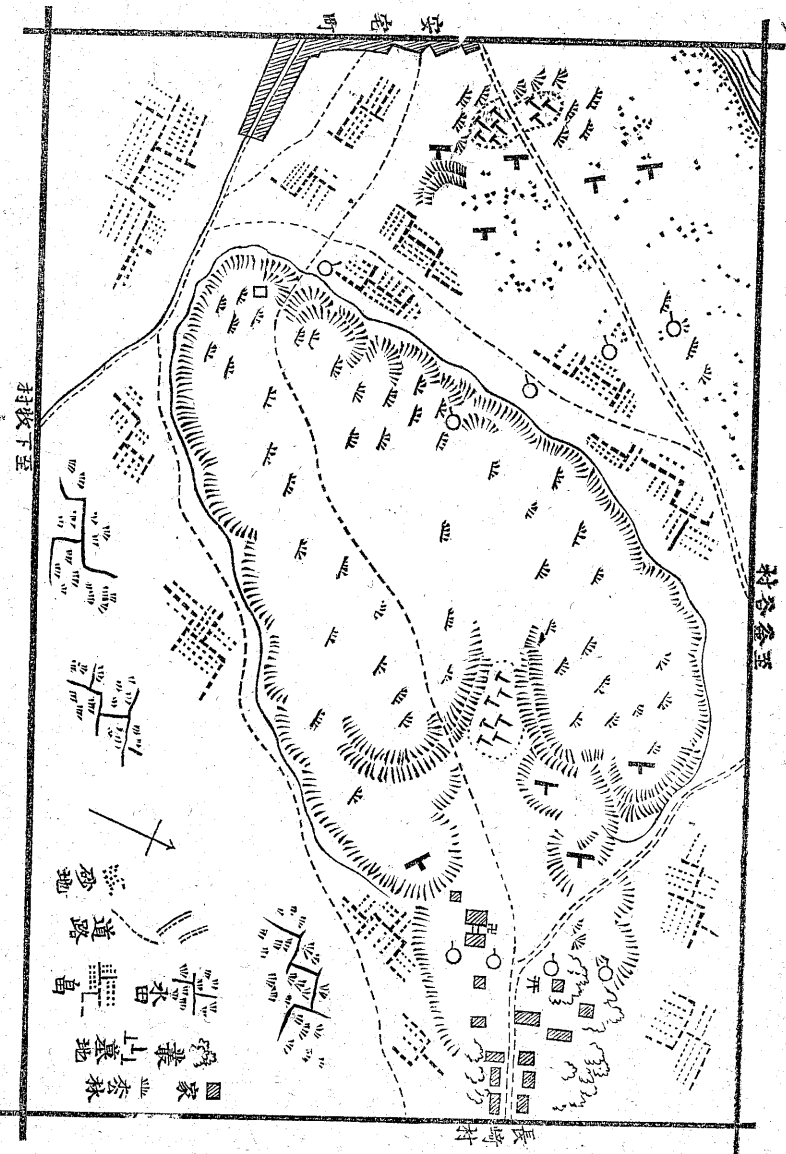
紫光を中空に放ち、海風一入の寒を増して、歩哨の膈に浸む、時は流れて七時に至れり、此に於て指揮官より前哨を徹すべき命令あり依て南軍は湊村に、北軍は美川町に各舍營す、此夜月殊に明にして天色甚だ清く、何龍橋上立て長嘯すれば、山色朦朧として、水波蕩漾す

二十七日快晴滿天雲なき今猶昨の如し、午前八時北軍の斥候は出で、何龍橋邊を探索せしに敵は既に湊村を退て亦隻影なし、依て夜來の前哨(假想)を徹し、八時二十分第二中隊第二小隊を前衛とし、安宅に向て警戒行軍を起せり、湊福島の諸村を經、十一時高坂村附近に進めり、此間海濱一帯の地、丘陵相連りて松樹密生し、尖兵は常に之を迂廻して、普ねく敵を搜めざるべからず、加ふるに太陽赫々として汗淋下し、前衛の苦心云に堪たり、而して南軍は昨日日本軍の午後四時三十分を以て、手取川を通過せし

報に接し、今朝七時半安宅に向て湊村を引擧げたり、十時安宅附近の地に達し、部署を定めて戦闘準備を開始せり、此地丘陵道を夾みて聳へ、左側殊に拔で、斜に前面に突出し、其麓遙に開て海濱に連る、即ち第二小隊を本道の右側約二百米突にある丘上に據らしめ、展望兵を丘端に置けり、第一小隊及び假設の二箇小隊は本道左側の丘上に置き、尙假設一小隊に第三小隊の一分隊を附し、其左翼より本道までの間に排列し、而して第三小隊の殘餘は、道路の左方約四百米突の地に伏し、敵の遙かに進むを待て、決起其右側を粉砕せんとせり、用意は既に整へり意氣は頗る昂れり、假令數千の大軍銃を竭して押寄するも、こゝ一步も通さじと、勇みに勇んでひたすら敵の襲撃を待てり、かくて十一時兩軍の斥候は高坂村附近に出沒せしが、同十分に到り南軍の斥候は、敵の分隊に圍まれ終に發砲して

退きたり、時に鐵笛空に響て休戦の命下り、兩軍は此處に午餐を喫して三十分間の休憩を取れり、四十分北軍は其第二中隊を散開せしめ、松林の間を進みて漸次敵に近けり、南軍は三流の紅旗を見揚ぐるばかりの高地に驕し、樹木を楯とし鳴を鎮めて近く敵を誘へり、今は彼我の相距る僅に二百米突に近きぬ、時は來りぬ南軍は萬銃一時に起りて爆然射撃を開始せり、北軍亦地物の障蔽をかりて熾に之に應じ、硝煙漠々として天地を罩め、砲聲般々響百雷の如し、然れども南軍は形勝の高地を占め、北軍如何勉むるも徒に兵勢を損して益する所少し、依て北軍は意を決し、第二第三兩小隊の勢を合せて、敵の最も右側にある丘陵に突貫し、之に據て側面より敵の左側を壓し、正面の兵と力を協せ、一舉して敵の根底を覆さんとし、勢疾風の如く砂を捲て猛然敵陣を衝けり、敵軍倉惶少しく後方に

退きしも焉ぞ遠く逃るゝ事を爲さん、悍然踏み止まりて再び敵に當り、僅に數十米突を隔て、亦もや砲戦に時を移せり、其間に北軍の第一中隊は自餘の第二中隊と合し、松樹を楯とし敵の左側と當り全力を砲撃に竭して、左側の戦況を窺へり、然るに左側の戦況彼の如く、未だ遽に意を違くする能はず、揣りにはやる血氣の殿原は、いかで長く此に徒爾なるを得ん、終には期の熟するをも待たで、二個分隊は劔を連ねて高陵に駆け上らんとせしが、地勢は固より此の突飛的の猪進を許さず、審判官より退却を命せられ空しく拳をにぎつて陣地に引返せり、此瞬間爆然たる響は遙か海濱の畑中に起れり、之ぞ南軍の伏兵が決起して、側面より北軍の砲撃を初めたるなり、勢を見て取りたる日下枝隊長は、直に南軍を攻勢に移せり、吶喊山を震はして轟然丘陵を下り、潮の湧くか如く總進撃をなして、北



軍に突き入れり、猛虎既に嶋を出でぬ蛟龍いか
でか猶豫はん、北軍は其颯々たる長蛇の陣を進
め、首尾相應して南軍を掩撃せり、閃電野を劈
て呼聲山岳を搖し、愉絶又壯絶、天柱爲に挫げ
地軸亦折れなんとす、時に兩軍の形勢所により
て異なり、道路の南方に於ては二小隊有餘の南
軍は、一小隊半の北軍を退けて勢次第に強く、
道路の北方に於ては四小隊有餘の南軍は、三小
隊の敵を破て氣愈鋭く、一方に進む者は亦一方
に退き、戦は漸亂れて劍芒互に交る、此に於て
十二時三十分休戦の命下り、兩軍は各三百米突
を退却せしめらる、四十分再び戦闘を開始せり
即ち南軍は安宅村入口に引擧げ、此處に最後の
決戦を試みんとせり、道を狭みしの丘陵は既に
前の戦場に盡き、四望快濶平沙遙に連り亦些の
障蔽なし、依て第二小隊は本道右側にある墓地
の石垣により、第三小隊は本道左側の小埵に散

開し、自餘の諸隊を援隊として其後方に置き、
敵や遅しと待ちかけたり、其間北軍は漸く進て
前の丘端に達し、仔細に敵の動靜を窺ひ、百方
策の據るべきを求めしが、終に意を決して二箇
小隊を敵の正面に散開し其勢をかりて餘隊を敵
の脊面に出でしめ前後勢を合せて敵を夾撃せん
とす、即ち第一中隊の第一、第二小隊は直に丘を
下り、敵の前面に散開して、次第に砲火を熾にし
漸く敵に近づけり、此に於て南軍は力を竭して
此の撃退に勉め、砲聲殷々硝煙地を捲て起る、此
機に乗して北軍の四箇小隊は、丘麓を迂廻して
遙に敵の後方に出て、菜花の間を匍匐して近く
敵陣に逼り、激烈なる一整射撃を開始して大に
敵の側面を亂さんとせり、北軍此に於て氣全く
南軍を呑み、勢に乗じて一同皆着劍し、將に蹶起
して敵陣に亂れ入らんとせしの一利那審判官の
傳令は飛ひ來りて引揚を此軍に命ぜり、蓋し此

地は假設障害地にして曩に兩軍へ戦闘を禁せし
の地なりと、何者の疎忽より事此處に到りしか
得て之を知らざるも、北軍の一部は實に全く此
事を知らざりしなり、而も今は争ふべき時にあ
らず、空しく無限の憾を遺して悄然引揚げたり、
時に兩軍正面の戦正に酣に、南軍は第一小隊を
延伸増加として左側に散開せしめ、三流の紅旗
は適宜に之を配置して勢頗る盛なり、此に於て
四箇小隊は其戦線に加はりて南軍の鋭鋒に當れ
り、然れども怒心頭に燃えたる北軍は、いかでか
長く砲撃に時を移すを得ん、直に獅子奮々の勢
を以て敵軍に突撃せり、此利那南軍も亦攻勢を
取り、鋒芒相摩して殺氣天を衝く、忽ち鐵笛響き
急に休戦の命下れり、時に午後二時十分なり、風
は飄々として菜花軽く戦き、雲雀一聲響明かに
して、壯士の心胸爲めに轉快なり

二時三十分安宅郊端に於て、分隊長以上を集め

磯田審判官が講評ありたり、先づ審判官は日下
南軍枝隊長に向ひ、其美川に於ける防禦の備を
海岸に設けざりし所以を問ふ、日下枝隊長はそ
の餘に廣漠にして、戦闘正面は二箇中隊の兵員
が能く守り得べきにあらざるを以て、之を爲さ
ざりし旨を答ふ、つきに福見北軍枝隊長に向ひ
其兵勢を専ら濱手に集め、木曾街道を空くせし
の理由を尋ね、福見枝隊長は斥候の報告により
大に攻撃の不利を察し、進路を別に求めて全力
を之に集め、他を顧る能はざりし旨を述べ、此
に於て磯田審判官は一應一般及特別方略を擧げ
て演習の結構を告げ、且つ云ふ今述べんと欲す
る所のものは審判官の職務としての事のみなら
ず實は教官たるの故を以て敢て勝敗に關するど
いふ程にもあらざる些細の事と雖ども、之が講
評をも併せなすへしと、今其大要をあげんに

一、北軍か松任より美川に行進する、警備行

軍によりしが、自分は中途にして南軍の方へ行きし爲め、其全くは之を見ざりしも、宮保村までの搜索は頗る疎漏にして、敵前の動作と思はれず、畢竟演習といふ考より起りし事ならんが大に注意すべきことなり

一、南軍の配備は稍完全なり、然れども最初より餘に力を用ゐ過ぎたるの嫌あり、即ち道路の左右に甚た多くの兵を出せり、抑も防禦には最初は成べく少數の兵を用ゐ、後方便宜の地に充分の餘力を貯へ、敵の至力の向ふ所を知りて始めて之を用ゆる等、機に應ずるの覺悟を要するならん

一、北軍の進路を濱街道に取りしは同意す、然し其一兵をも木曾街道に出さず、全く本軍との連絡を欠きしは、右側掩護の目的に反して不可なるが如し、予は思ふ北島村附近に少數と雖ども一隊を出し置かば、大に可なりし

ならん

一、南軍は恐くは最初の豫想ど、敵の來路大に異りしの觀あり、されば左方の敵に向て頗る混亂を極めたり、然れども其退却は方法を誤らず、且つ北軍の攻撃稍緩慢なりし爲め、左したる害なかりしならん

一、北軍は前面に水田を控へや、攻撃の便を缺きたり、時に平賀村中央の丘を衝きしは、策の得たるものにして、南軍防禦の最弱點は更に此處なりしなり、然れども攻撃の方法その善を得ず、二人三人宛進み來るか如きは、遂に功なきものと考ふ

一、南軍の第二陣地は其所を得たり、暫此處にて防禦せしも、北軍の突撃に遇ひ、四時二十分に至り湊村に退却せり、思ふに南軍の任務は左側掩護にありて、四時半本軍は全く手取川を通過すると云にあるを以て、其任務を

盡せし上に就ては充分なりしならん

一、手取川の右岸に於ける北軍歩哨の配置は不可なり、元來歩哨は籬中より外物を見るが如く、極めて身を地物に隠し敵よりは洞見せられず、而も我よりは能く敵を見るを要すといふにあり、然るに當時は廣漠たる河畔に屹立して身を敵に露し、僅に二三十歩を進て家屋によることを爲さざりし

一、第二日の演習に當りては、北軍の警戒頗る緻密にて大に善し、敵前の動作は常に斯くあらんことを望む

一、兩軍の交戦するに當り、北軍の右翼が僅かに一分隊餘の兵を以て、形勝の地に據る多數の敵に向ひ接迫し、又依然不利の地に停止して射撃を續け居たりしが如きは、全く兎戯に等しく審に功なきのみならず、却て損害を受くること大なりしならん、故に予は直に退

却を命せしなり、次に南軍は攻勢に轉せり、

其時機に就ては同意す、然れども其左方は有効陣地を捨て、新に加りたる優勢なる敵に向ひしは、少しく無理なるに似たり、之に反して其右翼は頗る優勢なりしを以て大に功を奏せしならん、然れども左右かく勢を異にしたれば勝敗は固より決し難し、故に北軍には三百米突の退却を命し、南軍には三百米突以外に於て適宜の運動を命せしなり

一、第二回の交戦に先ち安宅村東北方の畑地は、演習上の障害地となし其中に於て戦闘を禁する旨兩軍に通知し置けり、然るに演習始まるや北軍の一部は此方に進み入れり、此の如きは演習上頗る思む所にして、畢竟支隊長が命令を等閑に付せしか、或は之を傳ふる事の薄かりしか、又は之を受くる者の實行せざりしかに歸す、爾後大に注意を要す

一、南軍は旗の使用に於て大に誤れり、初め三本を殆んど散兵線の一所に束ね置き、危場に應じ或は右或は左と使丁をして遽に配置せしむ、これ實際に逆りて到底出来得べからざる事なり、よし一小隊(旗一流)の人員と雖ともかく容易に動し得るものにあらざり

一、最後の交戦地は甚だ開濶にして、地形の應用すべきものなく互に隊形を暴露せざるを得ず、而して兩軍は固より均勢にして力相等しきなり、勿論防禦の方は有ゆる地勢を利用するの便あるも、かゝる地形にては其利少し

故に今は兩軍とも地形同一にして兵力も亦同等なり、兩軍に就て其任務を盡せしや否やを後にし、此局部の戦鬪に於て強て勝敗の決を下さんか、唯北軍は南軍に比し隊伍の稍錯亂せしと、此の如き地形に於ける攻勢は少くも二三倍の兵力を要すべきを以て、北軍の攻撃

は甚だ困難なりしと云ふに止む

以上講評及び審判せしことは予の目撃せし所に止る、故に一小部分の運動に至るまでも、講評なりとは断言せず、終りに昨日より今日に至る演習全躰に就て云へば、各幹部及び列中の人も能く規律を守り、各其職を勉めたる點に於ては從來の演習に比すれば、數等の進歩をなせりと確信す、尙爾來の演習に就ては以上の注意を實行せられん事を希望す

講評終りて逐次安宅村に入り、各其舎營に就けり、時に四時を過ぐる事十分

夫れ安宅の地たる、謠曲に演劇に藉々として世に傳へられ、辨慶が主を落せしの苦計は普ねく天下の知る所なるが、物變り星移りて桑滄幾度か更まり、當時の關趾今は海上三里の沖となりて亦尋ねるに由なし、夜海邊に立て遠く六百年の古を思へば、松風袂に落て朧月潮に碎け、征

夫の心腸轉悲愴の想あり

此日午前大島校長軍を辭して金澤に歸らる、上京期逼て諸事多忙の際、強て一日を行と共にせらる、吾人は深く校長の演習を重ぜらるゝを欣び、亦切に事故の永く同行を許さざりしを哀む

二十八日午前八時安宅村を發して大聖寺に向ふ天晴れ風死して暑氣稍強く、途は松間の砂地に於て歩行甚だ惱む、此に於て軍歌大に起り勇を鼓して篠原村に達す、時に十二時十分なり、此處に午餐を喫し一時間の休憩をなせり、地はこれ壽永二年の春、義仲平氏を追てこゝに及び、齋藤實盛か白髯を染めて名残を止めしの所なり、衆皆林を穿ちて實盛が古墳を弔ふ、老松蟠屈高く天を衝き疎枝四出低く地に垂る、側に小碑あり遊行上人北陸化道の砌、其英魂を慰めて立つる所と云ふ、墓を距る事數百歩小池あり、頭髮を洗て白きを知りしもの、所謂首洗池なり、皆

低回往事を追想し深く實盛か任俠に泣けり、十二時十分此處を發し小鹽辻を経て、午後二時大聖寺に着す、時に舎營準備猶未だ整はず、依て郊端に止て三時半に到り、隊伍整々として大聖寺に入る、四時隊を解き各宿舍に就けり

此夜天色暗澹密雲低く垂れ、雨期漸く近て苦熱人を煩悶せしむ

二十九日春雨蕭條として下る、即ち外套を着け午前八時三十分大聖寺町を發し、十時越前國吉崎村に達し休憩す、此地本願寺の僧蓮如か長く留つて北陸を風靡せしの所、東西の別院並ひ聳て今に遺教を傳へ、德音四方に宣流して老若常に群集せり、况んや時恰も蓮如忌の間に屬し、諸國の善男善女之に詣する頗る多く、門前爲めに市をなして雜沓殊に甚し、休憩中或は寺に養して所謂肉着の面を拜し、信心の臍を固むるあり、或は遠く海岸に出て、泥柱の奇を探り、地

質上に見聞を廣むるあり、終に十一時此處に晝飯を喫して北瀉の濱に出て、行く行く湖畔を傳て坂井港に向ふ、雨中の連山幽濛として淡濃一ならず、對岸菜花松間を點綴して黃翠色鮮に、丘陵水に逼て長汀曲浦毎に趣を異にす、况んや蓊帆疎雨の間を飛ひ歎乃聲微に荻蘆の邊に起る、眞に之蕪村畫中の景足自ら軽くして一時北瀉村に達す、之より雨甚た急にして道路泥濘深く、身躰悉く濡ふて歩行困却を極む、三時二十分終に坂井港に入り各隊舎營に就く

坂井一に三國と稱す、日本海岸の要港にして市街稍繁盛、九頭龍川其西を流れて澎湃海に入る景色壯大見るべきあるも、雨強くして人々衣を干かすに急に亦之を顧るの時なかりき

三十日雨猶息まず、午前七時三十分三國を發し一時間毎に休憩を取り正午船橋村に達す、即ち九頭龍橋上に中餐を喫す、南越の諸山高く前面

に秀て、濁流滔々勢渦を捲き、兩岸菜花遙かに連りて雨中の片舟轉趣を沿へ、神飛ひ氣散して菜根尙大牢の味あり、午後一時燈明寺村に至る、これ實に新田左中將公が無限の恨を遺して、泉

下に入り給ひしの地、明曆中公の遺甲を此處に得、萬治三年越侯松平光通一碑を立て、其所を表す、朱垣之を圍め内に小宇を結ぶ、一同悄然として五百歳の古を想へば、風は老杉を渡つて露戎衣の袖に繁し、一時半進みて藤島神社に達す、これ公の英靈永く留まつて北陸を鎮護し給ふところ、堂宇壯宏ならずと雖へども亦莊嚴を極む、隊伍肅々祠前に整列して敬虔捧銃の禮を爲す、拜神の喇叭喇叭として響甚た長く、香烟一縷靜に昇りて乾坤遠かに寂たり、時に雲垂れ風死して雨愈蕭ひれ、公か當時を追想し奉りて嗚咽涙を吞む、拜し終て一同寶物の拜覽を許さる、兜あり即ち燈明寺囀の畝中に得しもの、鐵製

鏝を生し古色鬱然たり、三十番神の名を鏤め尙經文を刻す、別に式紙あり公の親筆なり、二時此を發し同じく二十分堂々喇叭につれて福井市に入れり、此夜雨殊に烈しくして亦市内の散策を得ず、空しく簷滴を數へて無聊を歎けり

五月一日半は曇り半は晴る、此日の行程甚た短なるを以て午前十時まで市内の散歩を許さる、或は妙法寺内に景岳先生の墓を弔ひ、或は柴田神社に勝家の碑を問ふ、或ものは勝を愛宕山に探めて山水の景を賞し、或ものは停車場に初て汽車を見て爲めに膽玉を潰す、其他城趾に尋常中學校を訪ふて之を參觀するあり、市廛に名物を求めて呑盞を恣にするあり、千差萬別人様々に其欲する所に從ふ

十一時福井市を發して舟橋村に午餐を喫し、一時森田を経て三時半九岡に着す、九岡は市街の不潔を以て名を遠近に知られしの地、一行は今

や此處に宿泊するの不運に接す、旅店悉く汚矮にして衆皆眉を蹙む、郊端殘廢せるの天主閣あり、今浮屠氏の據る所となり羅漢を安置す、高さ百尺以て十里を望むへし、薄暮之に登つて試に一嘯すれば、聲は疎鐘に和して菜花響きに散す、夜片衾を擁して寢に就かんとせしに、蚤虱續々として身に完膚を餘さず、空しく煩悶を極めて終宵眠る能はず

二日晴、中隊各箇の行進を以て山中に向ふ、道に山中越の險あり、上下凡て三里、崎嶇羊腸高く聳えて頗る峻險を極む、加ふるに天日時に中して暑氣甚強く、苦汗淋下して衆皆疲勞の色あり、絶頂臨廣瀨にして加越の山河一眸に集り、九頭龍西に銀を流し三湖東に鏡を漂はす、其間綠野遠く日本海の茫渺たるに連り、二州の城市歴々として指すへし、此處に晝飯を終へて峻坂を馳せ、二時相前後して皆山中に着す

山中は北陸屈指の靈泉にして、味谷蟋蟀橋等の勝あり、浴客常に群集して亦一方の名區なり、此地大に我行を歓迎して優待らざるなし、衆の靈泉に浴して心神甚だ快く、晝間の疲勞直に消滅して夢華胥に遊ぶ、

三日曇、午前八時山中を發し桂清水を過ぎ、九時半山代に着す、此地亦溫泉あり山中と並ひ其名遠近に高し、十二時動橋驛に達し此處に中餐を認む、午後雨蕭々として偶到る、而も外套を着くる事を爲さず、三時小松町に入り直に舍營に就く

夜簷滴音繁くして殊に寂寞を覺ゆ、衆皆最後の團樂をなして快談時を移し、亦春宵の更け易きを知らず

四日雨未だ息まず、午前六時小松を發し金澤に向ふ、此日小松參謀總長宮殿下が御着澤の御豫定なれば、出發を早めて金澤に歸り此處に殿下

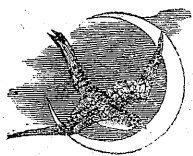
を奉迎するの心算なればなり、九時手取川に達す、濁流堤防を破て滔々田園の間に溢れ、水勢

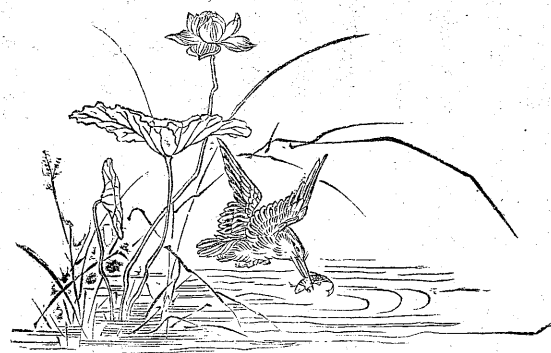
箭の如く毛髮自鳴る、云ふ今より二旬の前河水大に暴漲して沿岸の田野を荒し、餘勢尙未だ寢まざるものと、渡舟辛く通じて十時半柏野村に至る、時に日光雲際を洩れて天また麗らかならんとす、此に外套附着の號音あり次て晝餉を食す、正午松任町を通して三時金澤郊外に入り同三十分野町に達し此處に殿下の御通行を迎へん爲め犀川橋を左方として整列し、五時恭しく殿下を奉迎す、同三十分隊伍殊に堂々として山の如き群集の間を通し終に校門に入れり、一同校庭に整列し福岡統監部長の挨拶ありたり、曰く不肖敢て事に熟せずして屢附託の天命を辱かしめたり、然るに諸君之を咎むる事をせずして圓滿に行を終らる、諸君が行軍中能く其規律を守り、本校の名譽を全くせられしは、余

が堅く之を保證して校長に申告するの榮を喜ぶものなり、而して各幹部が皆其職に勉めて處置宜しきを得たるの勞は深く此處に感謝の意を表する所なり

次に磯田大隊長より二三の告示ありて、隊を解き各家に歸る、行軍是に於て全く結了を告ぐ

此行路程總て五十里に亘り、日を重ぬる事また九に及び、行程の長き宿泊の多き我校從來曾てあらざるの長行軍なり、其間翠山碧水の胸襟を洗ふて書窓の勞を慰め、砲煙彈雨の身神を鍛ふて浩洪の氣を養ひしもの夫れ幾許ぞや、艱苦必ず之を與にし快樂亦必ず之を分ち、友情如何に濃かに赴きしぞ、况んや嚴正なる規律の下に兵式的の生活を試み、尙武の氣象を鼓舞して報國の素を養ひしもの、其得し所果して僅少なりとせん哉





行軍餘談

風紀衛兵

江南四月艸萋々、千山落花杜鵑哭、我校即軍を福井に行る、日を重ぬること九、行程亦五十里に及ぶ、其間佳話珍談の傳ふべき者少なしとせず、即軍中の逸話を集めて、行軍餘談を綴る、固より見聞甚だ狭く竭さざるどころ多し、讀者之を諒せよ 記者誌

菜花行軍

きなり

香氣なる連絡兵

北地由來春遅く、四月下浣尙櫻花を見る、然るに今年氣候頗る暖に、花は中澗に及はずして既に悉く散れり、故に此行亦一紅の眼を慰むるなく、唯到る所菜花黃を亂して蝴蝶の之に戯るるのみ、南越殊に菜花多く、高に登て一望すれば滿郊悉く黃なり、正にこれ所謂「てふくや菜の花盛り金屏風」なるもの、依て此行を名けて菜花行軍と云ふ

我校行軍に風紀衛兵ある、實に今回を以て初めとす、各隊代る／＼之に當て三更尙巡邏に勉む皆奇に驅られて珍事あるを希ふ、而も風紀の嚴肅なる僅に旅舎の喧騒を戒めし外終に事なし、一同竊かに其お目玉を頂戴せしむるの機なきを嘆じ、眼をこすつて眩き云ふ、あゝ面白くもないと、然り御當人は征中日に焦されて甚だ面黒きなり

そのかみ熊谷次郎直實は、宇治川の橋桁を傳て譽を源軍に恣にせしが、濟々たる多士豈に勇武の熊谷に及ぶなからんや、美川の役南軍の退て湊村の高地に據り、河を隔て、大に射撃を盛にするや、北軍茫然として策の出つる所を知らず、偶一士あり傲然橋梁の上を進み、亦敵の砲撃に關せざるものゝ如し、審判官その何たるを問へ

は連絡兵と稱す、而も前後隊の之に續くものなし、嘗て聞く大奸は忠に似たりと、大勇は夫れ呑氣に似たるか

魁偉漢の失敗、ツイ近眼で

軍美川に入り各其舍營に着くや、容貌魁偉の一卒軒頭高く敵襪を掲げ、厲聲大呼して曰く、苟も我襪をアッフするものあらば、鐵拳立どころに飛んで其頭に落ちんと、音吐雷の如く意氣豪壯聽者取て一語を發するなし、一矮卒あり、之を識らず渠其襪子を失ひ、鵜目鷹眼之を索むると久ふして遂に得ず、會軒頭の襪子己が有に酷似せるを認め、欣躍直に馳せて之に觸る、魁卒之を見るや赫として怒り、嗚然呼んで曰く、咄爾何等の無禮漢ぞ、敢て我所有權を冒すと、然れども仔細に之を檢すれば、曷ぞ圖らん是れ曩に矮卒が失ひしものならんとは、於是乎魁卒惘然自失謂ふ處を知らず、低頭平身其罪を謝して曰

く、ツイ近眼で(隆進子投)

美川の夜景

此夜天氣澄清風閑にして纖翳なく、玲瓏たる一輪の團月高く中霄に懸り、淡霞滄々巒峰を閉し攢煙繚繞林腰を帶る、備して足下を瞰へば、手取川濼々遠く流れて碧瑠璃の如く、一條の金龍透迄漣漪に躍て璀璨眼を奪ひ、河畔の楊柳低く枝を垂れて翠蔭娑婆たり、橋上立て簷に眸を放てば、白山突兀として九天に沖し、北海渺漫として怒濤岸を嘯む、烟雲杳冥の内翠黛模糊として、蛾眉舞ふが如きものは是れ雙嶽なり、白鷗夢濃にして點々波上に眠るか若きものは、是れ舳艫の帆影にあらざや、茅屋の殘穗光淡くして霜華皎々雪よりも白く、前面鬱蒼として相連るの青松は、蜿蜒として長く走る後方の白沙と映し、山村水廓參差混茫の間に隱顯して影煙に似たり、微風習々輕裳を拂ひ、月光娟々落ちて素

襟を照らす、風景清楚、恍として躬の塵寰にあるを覺えず(隆進子投)

橋と築山

全軍の進みて大聖寺に入るや、永岡堯君親友を家に誘ふて曰く、橋と築山と聊か以て諸君を饗せんと、邸大聖寺川に臨み長橋虹の如く簷を掠めて起る、蓋壯觀なり、而も終に所謂築山なるものを見ず、怪んで之を君に問へば、君南窓を排して堯爾遙に白山を指し、云ふ將に火を之に點せんと、一同手を拍て快と稱す、一生達せず何の意たるを問ふ、君洪然大笑して十六夜の月と答ふ、皆このつき山に一杯を喰はされて飛だ御馳走に遇ふ

肉着の面と本向坊か墓

肉着の面に嫁脅の面と云ひ、一向宗徒の藉々尊重するところ、軍の吉崎を過ぎる之を觀る者多し、寺僧得々縁起を語て曰く、昔一悍婆あり

嫁の甚た佛を信して深く蓮如に歸依するを惡み百方之を妨げんとし終に傳家の面を被り、鬼裝道に要して之を脅せり、而も嫁自若念佛を唱し顧みずして去る、婆悄然歸りて裝を解かんとせしに、面堅く肉に着して終に脱せず、即ち懺悔深く耻ぢ蓮如に赴て、罪を謝し一度竺語を唱すれば面忽焉として落ちたり、この面即ち是なりと、事頗る奇にして且つ東西の別院各之を納め一面兩所にあり、然るに尙養して之を觀るものあり、獨怪む遂に吉崎山頭に登りて、一偉僧の墓を弔せしものなきを、偉僧名を本向坊了顯と云ふ蓮如の弟子なり、嘗て吉崎御坊の焼くるや猛火の内に馳せて親鸞の遺書を求め、其遁る能はざるに及び割腹書を藏めて火中に死せり、眞宗の寶典教行信證は爲めに涙ひさるを得たり、嗚呼其節紀信の忠に劣らず、其跡大川支右に同じ、假令身浮屠に屬すと雖ども、頗る欽すべき

の士なり、俠骨稜々重きを一方になす四高の健兒、獨り彼の妄誕厚くして、此の節義に薄かりしは深く我惜む所なり

質朴なるお婆さん

吉崎は所謂蓮如忌に際し、善男善女頗る雜沓を極む、某々の二卒別院の入口に踞して相語る、一老婆あり卒然來り頭を撫して曰く、お前さん達は何處へお出かけになります、臺灣でムリますか、誠に御苦勞でムリます、お前さん達がそふ働てきたるから、婆々等樂に佛様に參つて居られるのじゃ、婆々の所は新田の太郎右衛門と云て此處から二里しかない、御歸には寄て下され、屹當御馳走致しますから、あつちへ行つたら切角お念佛を申さつしやい、すると病も何も何にも恐しくない、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と、二生惘然煙に捲れて漸く苦笑せり、さても質朴の婆さんもあればあるもの(當白組寄)

藤島神社

一行藤島神社の參拜を終り、寶物の拜觀を社務所に請ふ、一士あり威容凛々、白髪を束ねて後に垂れ鬚髯長く腰に及ぶ、中黒の大紋を染め抜きたる鐵色の羽織を着し、自ら稱す大館氏の裔と、快く義貞公の遺甲及び親筆を示さる、後書記改めて之を拜觀し仔細に説明を請へば、丁寧に教へて曰く、明曆てや判て居るか明かな曆とかくのたど、書記唯々たり、其公の遺詠を寫すに當り又曰く、此は日本中讀める人が居らぬのじや、此處は○を附て置かつしやいと、即命に従ふ、其寫は

行路 菘

行やらてやすろふ袖の見ゆる哉

小菘花咲く野邊の通路

鹽屋 烟

藻鹽やく烟と見えてあまの屋の

村々〇〇夕きりの空

草鞋を穿て寝に就く

福井に泊するや、某中隊長命して曰く、若し非常召集あらは九十九橋を右翼として直に整列すべしと、卒某元來洒落飄逸なり、命を聽くや秘に艸鞋を穿て寝に就き、得々獨り謂へらく、夜色沈々行人途絶え四顧寥々萬籟盡く死して、健兒の征夢正に濃なるの時、鐵笛明々急に響て召集を報せば、颯起一番高綱たるの高名を博するものは夫れ乃公かと、翹首鶴頸之を俟つと多時而も夜氣森々として更深く、一穗の殘燈影暗うして山川共に眠り、四邊の光景轉々悽愴、唯時に闇を縫ふて長く響く、遠寺の疎鐘を斷續の間に聞くのみ、睡魔絶えず襲ひ來りて、心魂の疲勞堪ゆる能はず恍惚之を久ふす、既にして鷄鳴曉を催して群鴉樹梢に騒き、東天漸く白雲を吐て微紅を漏すの頃、心搖々として羽化する

かと思へば、熟睡昏倒又發程進備の喇叭を識らず(平六天狗寄)

景岳先生の墓

橋本左内先生の墓、福井市の郊端妙法寺の傍にあり、渺たる一小碑高僅に三尺に過ぎず、兩親か墓間に介す、繞らすに石柵を以てし、方總て二間、稚松未た枝を延すに到らず香花永く絶ゆ嗚呼先生稀世の英才を抱て、幕末多難の際に生れ、盛に勤王の大義を發舒して天下の重に任し終に幕府の忌む所となりて、小塚原頭の露と消ゆ、然れども先生の死後、天下の名士赴然雲の如く起り、能く其遺志を繼て王政維新の大業を成就す、先生亦瞑すへきか、我輩幼時より先生の啓發録を讀て、常に感憤の心を起せしもの、靜に墓前に跪て往時を懷へば、萬感胸に攢まつて淚湧沸たり

柴田勝家の碑

北庄は地福井に接せり、柴田勝家か據て南越を治めしの地、其衝を猿郎と争て敗るゝや、此處に焚死せり、勝家心を治に用ゆる深く遺澤今に及ぶもの多し、福井郊外柴田神社あり、勝家の靈を祭る、碑あり峻として高二丈に餘る、鬼柴田が如何に地方の民心を得しや見るべきあり、銘に曰く

孤城受圍 儲水殆竭 破缸之智 死中求活
北門鎮鑰 誰守吾越 熊虎桓々 特被簡拔
猛侶夜叉 慈如菩薩 威惠並行 四民夷悅
託孤寄命 身臨大節 猴郎竊權 忠志巨奪
聞捷知敗 公亦人傑 百世之下 歿有餘烈
祭祀以時 案盛芳潔 遺澤靡泯 鑄茲高碣

愛 宕 山

愛宕山福井市東方の小丘なり、南越の地悉く一眸に集まり、山河紛糾の景頗る悦ぶべきあり、満山青松翠を滴して遠く國境の諸山に連り、足

羽川麓を流れて遙に渺茫の海に朝す、南都風の樓臺所々に聳へ梵唄響優に自ら塵震と離る、神社佛閣殊に多し、就中足羽神社は式内の縣社にして、古に所謂「庭中の足羽の神」之なり、仁孝天皇の御宸筆にかゝる、大宮地之靈なる額を掲げたり、今を距ると千四百年の前、

繼體天皇尙男大迹皇子として越國に留り給ひし時、此處に登り地を相して三國港を開き給ひ、日野黒龍足羽の三川を之に落し、以て當國の水患を除き給へり、即ち 天皇の像を此處に立て長く其御功績を標せり、此地昨年を以て福井市の公園となれり、我は深く其人爲的工夫を加へて此地を俗にせん事を恐る(愛山生寄)

岡村博士の動物研究

九岡の旅舎凡て不潔なり、就中演習本部を最も甚たしとす、軒破れ柱傾く尙月を洩すの風流ありとするも、家百年の煤を止めて塵室中に堆く

床奇聲を發して疊足に纏ふに至ては、如何なる不精男と雖ども閉口せざるを得ず、况んや食熟せざるを進め肴焼けざるを喰はしむ、皆眼を閉ちて食し椀を代るものなし、起て室の不潔を見て胸を悪くせんより、速に寢て夢に華胥に遊ぶに如かすと、皆薄暮より衾を擁し眠らんとせしに奇臭鼻を衝て虱之に滿つ、衆皆悚然之を抛て外套を着け、頗る警戒を嚴にして眠に急げり、然るに蚤軍不意に疊間より逼り、亦一睡の時をも與へず、岡村博士悄然呟て曰く、噫今夜は動物研究に一夜を明かさざるべからざるかと、翌朝福岡統監褌衣を檢めて、豆大の虱三疋を得たり而して其多きものは七疋に及ひしと、夜來の警戒終に功なかりしなり

ポルトと箱入娘

ソラ、ポルトが下腹の邊へやつて來た、また一艘ポルトが殖へた、御前の處の箱入娘は幾組、僕

のは三組あれのは一組半、金石の倉庫へ送ふかたゞしは學校へ寄贈せうか、日下先生は凱旋の日、支那から蠟を土産に持てこられた、僕軍たつて黙して可ならんやだ、まして彼は死し此は活て居る、中々の見物じや、斯く謂て或士は密封して帽子の裡に收め、或士は大切に背囊に入る、ア、これ何物か、ポルト少年なりと雖ども、豈人の腹部に附着せんや、箱入娘に至てはこれ女性なり、焉ぞ赴々たる四高勇士の間に混して其清淨を汚すを得んや、半風子褌衣の襟元より得々叫んで曰く、二百五十士に隱もなきは、拙者てゐると、蓋し先生の八足は、ポルトの權の如く、深く隠れて現はれざる尙箱入娘の如くなる、即ちこの名ある所以か、觀音菩薩何ぞ奇名多きの甚だしき(南軍卒寄)

副官部員の夜中立

副官旗手測量手書記、凡て六人之を副官部と云

ふ、本隊本部に屬して常に役人風を吹かせり、然れども其宿を演習本部と共にするや、最下等に位せざるべからず、九岡に宿する亦この貧乏鬪を握めり、室の不潔云は、直に嘔吐を催さんどす、一行晝は悉く外出し夜は燈火を暗くす、蓋し不潔を見ざらんとするなり、相議して曰く終宵碌々として蚤虱の間に苦悶せんは、一夜を歩行に明すの快に若かざるなり、幸に今夜月明なり直に山中に向て發せんと、皆之に賛して評議頓に決す、而も命を指揮官に得るを難じ當惑の色あり、會命あり云ふ、明朝の出發は中隊各箇に之を定め副官部は其意に任ずと、衆大に喜び直に赴かんとす、然れども其早く山中に着して、舍するの所なきを慮り、終に午前二時を以て九岡を發す、皎月光寒くして霜華雪よりも鮮に、萬籟響死して乾坤頗る寂たり、知らず副官部員たるもの此内何等の好土産をか得し

河原書記天狗に握まる
九岡山中の間に旭峠あり、道路羊腸頗る險峻を極む、副官部員の夜行を企つるや、三時之にかかり次第に山懐に入る、月光漸く暗くして道數岐に分る、皆道の由るべきを知らず廣を擇で無鐵砲に進めり、道路遽に崎嶇として峙ち大に趣を從來と異にす、竊に錯誤を危みしも關せずして登る、山腹泉あり皆之に呑む、時に河原書記衆に謂て曰く、山路甚迂回せり、險を踏て直上すれば頗る近しと、君脚疾あり踵地に着かず常に趾端を以て歩む、道愈急にして君漸く遅る進むこと十餘町にして即ち君を待つ、十五分を経て尙未だ到らず、聲を擧て之を呼へとも應ずるものなし、衆相謂て曰く脚氣衝心して路傍に困臥するなきを得んやと、倉惶馳下つて之を探め先の水邊に達す、而も終に君あらず皆頓に色を失ふ、惘然空しく右往左往して狂せるもの、如

し、終に聲を合せて連りに君を呼ぶ、山岳爲めに鳴て轟として響あり、然れども遂に君の答なし、千呼萬喚聲漸く竭きんとす、會一聲あり頗る遙に響く、皆危ふんて反響とし尙呼ぶ事を續く、既にして明に君が聲を前面に認め、喜ひ馳せ登れば君一山を隔て、遙の山嶺にあり、蓋し例の近道主義の賜物なり、君子曰く行くに徑によらずと今日初て有難味を知れり、辛うして相合する事を得洪然一笑す、時に天漸く明けなんとして東方ほのかに白く、殘月光淡くして色銀盤に似たり、共に馳せ下て七時早く山中に着す

春秋書記湯で蛸となる

山中の旅舎内湯なくして皆總湯に浴す、家々の下婢其客に従て浴衣を預る、所謂湯方持之なり能く客を記して混同せしむるなし、春秋書記近眼なり夜浴して歸らんとす、婢の面を覺えず現

んや下駄をや、善加減に引かけ出つ婢直に着するに衣を以てす、得々歸らんとすれば婢怪む所あるが如し、其歸路を見るや直に馳せ追て屋號を問ふ、君會忘る苦笑指し云ふ彼邊と、婢己家にあらざるを確め、直に夜を褫き足駄に及ぶ、流石の香氣先生も爲めに歸るを得ず、悄然亦湯槽に入り屢頭を揚げて婢の來るを待つ、而も終に覺えあるらしき者に會せず、斯の如きもの殆んど一時間氣のぼせ眼くらみて、躰殆んど湯で蛸の如く今にも往生せんとせり、會同宿の友あり婢を従へて來る、君依て漸く湯陀佛を免る、友人皆笑て曰く之れ大食常に下婢を苦むるの報なりと、大食もめつたになすべきにあらざるなり、アウこわや

何とか云ふ國をシユタメてやらにやならぬ

田鶴濱小隊長人類學上の遺跡を探めて薄暮山中

に歸る、道に二樵夫と會す夫より歩數十武にして一の隧道あり、近來鬪擊するところ長五六十間と稱す、昏瞑にして水滴雨下し小河を造る、樵夫君に向て云ふ、御前暗らからう案内しようから跡から來いと、バチヤ／＼水を飛ばして進み行く／＼曰く、お前等は金澤の兵か此間の戦はドーヂヤ面白かつたろう、お前そんなとき何處に居た、おらの村の若衆一人打死した、天子様の御蔭で立派な葬式か出來た、コトトラの力ではトテモあんな葬式は出來ぬ、おらの處に十三の餓鬼が一疋居る今にたのむぞ、アノ何とか云ふ國はシヨタメて(屈伏せしむるの意)やらにやならぬ、お前等若衆まつかりやれやと、噫敵愾の氣この山間の賤夫にまで及ぶ、亦喜ぶへきの現象か(南軍卒投)

某の健啖下婢を呆殺す

副官部員某軀幹矮小而健啖能く斗米を盡す、

腹滿つれば大聲古今を罵倒して自快と稱す、臻る處旅亭の下婢皆爲めに驚殺せらる、一日大聖寺に入り晚餐に對へば、珍羞佳肴(?)積んで山をなす、某欣嬉措く處を知らず、且啖ひ且啜り卒に汁五杯飯十數杯を傾け更に碗を出す、下婢惘れ問ふて曰くあなたお湯ですかと某頭を搔て曰くいやあのもの少しと、斯の如き各所皆然り其山中に至るや侍女愛想をつがし、一度碗を覆し二度湯を注ぐ、而も某平然止めずして曰く、皆笑ふからお櫃を此處にいぐせと、傍人之を數て凡て十七碗に至る、皆呆れて云ふ何處へはいるやら見物じやあなあと(平六天狗寄)

糟糠の妻堂を下れり

山中越の險之に疲れしもの頗る多し、浦井教授亦其一なり杖をついて跟々漸くにして登る事を得たり、然れども靈泉疲を癒し翌朝元氣奮に復す、加ふるに道路坦々として車馬自由に通する

を得へし、先生即ち杖を棄てて歩む、岡村教授先生か杖なきを見之を問ふ、先生答ふるに實を以てす、教授即ち戯れて曰く、君も亦薄情なる哉終に糟糠の妻を捨てたりと、先生苦笑して曰く彼は道に拾つたんだから善いんですと

道理で御顔の黒いこと

行中何處に到るも皆兵隊を以て吾々を目したり彼是辨するも面倒故此方も其様風に構へしが、或村にてあなたらは支那より御歸りかと問ひしに、今まで支那にありしと云ふも異なる故、然らずと對へしに、そんなら臺灣にでも御居て遊はしたかと云ひし故、得意顔に左様と云へば、成程お顔か黒いこと御苦勞様と(南軍卒投)

醉漢の闖入

一夜風紀兵一伍堂々着劍にて市内を巡邏し、事ありて某中隊本部に至る、多日の征旅櫛風餐雨の餘たるを以て、皆赫顔勵聲悪く謂へは閻魔、

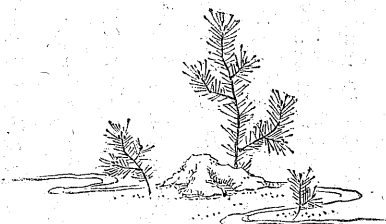
善く謂ても矢張閻魔たるの風采、舍人驚愕して醉漢の闖入するものとし、急に門障を閉ち扉に依りて僅に出入せしむ、翌朝主婦前夜の怖かりしを談て大に衆の笑ふ所となり、怪嫌な顔をなして曰く、ソーデしたク(南軍卒)

たれ連の喝采

行中疲勞に堪えずして乗車を許されしものあり稱してたれ連と云ふ、健兒が深く恥つる所のものなり、故に此のたれ連の車に乗て隊側を通過するや、皆喝采して一種異様の歓迎をなすを常とせり、事固より嘲笑の意を寓し或は忌むへきの跡なしとせず、然れども爲めに發憤の氣を生し疲勞を忍びて隊伍を離れざりし土ありしは疑もなき事實なり、我は此無遠慮の嘲笑が能く辛苦に堪ゆるの節を教へしを喜び、亦竊かに斯る嘲笑の必用に逼まりし所以を悲む(南八男兒)

懐しき學校

行軍の愉快は發火演習に在り、九日間の長途行軍少なくも四五回の對抗運動あるへしとは誰しも豫期せし所ならむ、而かも地勢の此に適せざる最初二日間引き續きて演習ありたるのみ、其後は唯平和なる歩行に一日／＼と過したるは如何にも残念なりし、然るにても山中までは猶前途の望幾分ありたるも山中を出發しては寧ろ歸心矢の如く、途中小松參謀總長宮殿下を奉迎して歸來香林坊頭より楊柳を透して巍然たる煉瓦館を瞥見したる時、一種云ふ可からざる感情に打たれたるものわれのみかは、例へば慕はしき父母、懐かしき同胞に逢ひたらむか如し、常ならは大嫌の書籍も少しく讀みたき様の心地するもをかしく、いでや養ひ得たる浩然の氣もて一勉強致さなむと申す



投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載するとを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は徳義に背くものは一切掲載致さるべし

明治二十九年六月十九日印刷
 全 年六月二十日發行

編輯兼發行者

河原始 二

印刷者

春秋原在文

發行所

第四高等學校北辰會

印刷所

株式會社 英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

金澤市廣坂通第四高等學校時習寮

金澤市泉寺十八番地

14